

満洲移民と史料・戦争とトラウマ

—第6・7回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集—

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会編

刊行に寄せて

「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」(以下「語り継ぐ会」)は、高知県内の旧満洲（中国東北部）帰国者、大学教員、マスコミ関係者らが、体験者が次々と逝去し歴史の継承が難しくなる現状を危惧して、次の世代に歴史を語り継ぐ組織として 2018 年 9 月に結成されました。高知県から満洲へ渡った人の実数は正確に分かりませんが、「満洲開拓団」「満蒙開拓青少年義勇軍」で渡満した人数は 1 万人を超える、人口比では全国 3 位の 1.4% となっています。戦前の高知県民にとって満洲は、多くの県民が移民した非常に身近な地域だったことが分かります。

語り継ぐ会では活動として 2019 年から 2023 年にかけて、研究者や体験者を招いて 5 回のシンポジウム（うち 1 回は台風の影響で中止）を開催し、記録集を発行してきました。

今回発行する記録集『満洲移民と史料・戦争とトラウマ』は、2024 年 7 月 28 日に「満洲移民と史料」、同年 11 月 24 日に「戦争とトラウマ」をテーマに、いずれも高知市立自由民権記念館で開催された「満洲の歴史を語り継ぐ集い」の第 6 回・第 7 回シンポジウムの内容をまとめたものです。

第 6 回集いは、満蒙開拓に関する史料の全体像と高知の満洲関係資料について理解する場としてテーマを設定しました。第 1 部にはその内容を講演録などで収録しました。細谷亨さんの「史資料から読み解く満蒙開拓と引揚げ」では、史資料から見た満蒙開拓研究の最前線に加え、戦後地域社会と引揚者の関係も知ることのできる貴重なものとなっています。楠瀬慶太さんの「満洲帰国者の語り継ぎ活動」は、高知に残る崎山資料・崎山文庫という重要な満洲関係資料を初めて研究資料として位置づけたものです。高知の満洲資料を今後全国の史資料の中に位置づけ、整理や把握を進めていく上でも重要な機会になりました。

第 7 回集いは、悲惨な体験をした満洲からの引揚者や兵士の体験が戦前で終わったのではなく、戦後まで続き、家族にも影響を与えていたという視点を可視化しようと「戦争とトラウマ」というテーマを設定しました。第 2 部には、その内容を講演録などで収録しています。戦争トラウマ研究の第一人者である中村江里さんの「戦争とトラウマ」は、戦後家族の中に封じ込められてきた戦争トラウマが「現在進行形」の問題であることを指摘しています。琴寄學さんの「北朝鮮からの引き揚げと戦後の暮らし」、高野好美さんの「残留孤児として中国社会を生き抜く」は、体験者たちにとっての悲惨な戦争体験は、終戦や引揚げで終わるものではなく、戦後まで連続して生活や家族に強く影響したことを教えてくれます。

最前線の研究成果や貴重な体験を収めた記録集は、満洲の歴史を語り継ぐテキストとして仕上がっています。今後、様々な形でご活用いただけましたら幸いです。

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・会長
大野正夫

目次

刊行に寄せて（大野正夫） 1

第1部 満洲移民と史料

【講演録】史資料から読み解く満蒙開拓と引揚げ（細谷亭） 4

満洲帰国者の語り継ぎ活動—崎山資料・崎山文庫の形成過程から—（楠瀬慶太） 15

第6回集いの感想 21

第2部 戦争とトラウマ

【講演録】戦争とトラウマ—日本軍兵士とその家族の事例一（中村江里） 24

レジュメ「戦争とトラウマ—日本軍兵士とその家族の事例一」 40

【講演録】北朝鮮からの引き揚げと戦後の暮らし（琴寄學） 46

レジュメ「六歳の戦争体験」 56

【講話要約】残留孤児として中国社会を生き抜く

－池上利久さんの体験－（概要）（高野好美） 72

第7回集いの質疑応答 77

第7回集いの感想 84

『高知新聞』記事より 86

【参加記】高知に刻まれた戦争の歴史に触れて（中森柚子） 88

第1部 満洲移民と史料

【講演録】史資料から読み解く満蒙開拓と引揚げ

細谷 亨

(立命館大学教授)

1、はじめに

(1) 語り継がれる満蒙開拓・引揚げの経験

立命館大学の細谷と申します。本日は「満洲の歴史を語り継ぐ集い」にお招き下さり、ありがとうございます。私の方からは、「史資料から読み解く満蒙開拓と引揚げ」ということでお話しをさせていただきます。満蒙開拓の歴史については、大学院生の頃から現在まで20年以上、研究テーマとして取り組んできたこともあります。これまで全国各地で資料調査もしてきました。本日はそうした成果の一端を紹介させていただきます。これからも研究や語り継ぎの活動の発展に少しでも貢献できればと思います。

まず、はじめに私の勤務する大学で取り組んでいる授業実践の話からさせていただきます。京都府亀岡市にお住まいの黒田雅夫さん、高知の開拓団とも縁のある方で、この中でもご存じの方もおられると思います。その雅夫さんを授業にお招きし、学生に話を来てもらうということを、ここ4年ほど続けています。

昭和12年（1937年）生まれの雅夫さんは6歳の頃、第11次廟嶺京都開拓団（京都市が編成した西陣織など中小商工業者からなる転業開拓団）に両親と共に参加しました。幼い弟も一緒でした。遅れて祖父も現地での仕事を手伝うべく合流しています。しかし、敗戦時、現地住民による襲撃に遭い、高知の江川崎開拓団と一緒に逃げて、収容所生活の最中に祖父と母を亡くすことになりました。それだけでなく、弟は中国人に預けられ、残留孤児になつたことで生き別れています（のちに再会することになります）。父親は軍に召集され不在でしたので、雅夫さん一人になってしまい、撫順で路上生活をしているところを修道院のシスターに助けられ、奇跡的に日本に生還できたという大変な体験をされました。現在は京都で「語り部」として活動されており、昨年、体験をもとにした絵本を出版しました。絵本は英訳されていることもあります。海外でも読まれていて、大きな反響を呼んでいます。

雅夫さんの体験は何度聞いてもとても辛くて、毎回色々なことを考えさせられるのですが、若い学生もまた雅夫さんの話から多くのことを学んでいます。戦争体験者の話を聞くのが初めてという学生は、衝撃とともに、授業の意味とか、平和な世界を実現するという理想について考えを巡らせています。もう一人の学生も、満洲引揚げについては初めて聞いたこと、「歴史は事象ではなく、たくさんのそれぞれの物語から成り立っている」とこと、「他人事ではなく自分事として戦争と平和の問題を考えたい」といった受け止めをしています。学生たちは、時折涙を浮かべながら語りかける雅夫さんの話に真剣に聞き入っていました。戦争で犠牲を受けるのは生身の個人であること、戦争が家族をバラバラにすることなど、いわば戦争のリアリティを受け止めたわけです。体験者の方から話を聞く、満蒙開拓と引揚げの体験を手がかりに戦争と平和の問題を考えることは、大学における歴史教育あるいは人間形成の面でも極めて有効な実践だと感じているところです。

（2）満蒙開拓をめぐる学術研究と史資料

体験や語りから学ぶことは非常に多いわけですが、それだけでは十分ではありません。体験者に共感したり、人間形成に役立てるだけでなく、学術研究の成果からもしっかり学ぶ必要があります。ご承知のように、満蒙開拓に関する研究は、歴史学をはじめ様々な分野で多くの研究蓄積があり、現在も書籍や論文が次々に刊行されています。また最近では、戦中の開拓団だけでなく、戦後の「引揚げ」も学術研究の対象として盛んに進められるようになりました。

私もその一端を担っているものと自負しているのですが、私の研究視角は、歴史学の立場からの研究で、特に母村（日本農村）と入植地（開拓団）の両者を視野に入れた研究をしています。いわば、農村史研究と植民地研究、二つの観点から研究を進めています。研究方法としては、地域に残された史資料を発掘・分析する傍ら、体験者・関係者への聞き取りも行いつつ、戦後史（引揚げ）を含めて満蒙開拓の実像に迫ることを目指しています。

研究の過程では史資料が必要になるわけですが、最も中心になる国や県など行政機関の公文書については、敗戦時、占領軍の追及を恐れた当局者による焼却指令、あるいは行政機関の意図的な廃棄があったと言われています。そのため、満蒙開拓に関する多くの公文書が失われました。ただし、全て失われたわけではなく、地域に入っていって資料調査をしていると、色々な資料が残っていることがわかります。例えば、県庁には政策に関わる文書が断片的に残っていることもあるし、市町村の役場文書も割と多くの地域で発見することができます。役場文書には、移民の手紙や開拓団報（現地の定期刊行物）が綴られていることもあります。それから、個人・遺族が残している私文書や、農協・郵便局・移住に関わった組織など関連団体文書、ポスターやパンフレットなど広報資料も残されています。これら多様な史資料を発掘して読み解くことで、満蒙開拓の実像に迫れるわけです。それから、一次資料ではありませんが、戦後の開拓団史や手記・回想録、聞き取り集なども、当時の記録に残されないような事実が浮かび上がったりするので、貴重なものと言えます。

本日は、限られた範囲にはなりますが、私の調査の過程で確認し得た史資料の紹介を交えつつ、満蒙開拓と引揚げの歴史について考える手がかりを提供できればと思っています。

2、満蒙開拓団の送出をめぐって

（1）軍事的要請から計画された移民政策

まずは、満蒙開拓団（満洲移民）の特質について考えてみたいと思います。ご承知のように、満蒙開拓は、1931年年の満洲事変以降の軍事的要請から関東軍など軍部によって計画されたものでした。関東軍の意図としては、日本人を武装移民という形で集団入植させることで、満洲国の治安維持や対ソ防衛の後備兵力として活用しようとしたわけです。同時に、入植した日本人移民は、満洲国の建国理念である「五族協和」の中核＝指導民族としての役割が期待されました。1937年の日中戦争以降になると、総力戦遂行のために必要な食糧増産

といった新たな課題が加わるなど、多面的な政策意図のもとに推進されていくことになります。

開拓団が軍事的役割を帯びていたことは、移民の入植場所から明瞭に読み取ることができます。開拓団の半分以上が満洲北部、陸軍が仮想敵国としていたソ連の国境近くに集中的に入植していること。北部は南部に比べて未墾地が多いという話もありますが、この時代は、北部であっても既に中国人農民によって耕作されていた土地が多くを占めていましたので、開拓目的というよりは軍事的要請によって入植させられたとみる方が適切だと思います。

移民の入植地は、中国人農民からの土地収奪、廉価での強制買収を通じて用意されました。土地買収については、拓務省の書記官として移民政策に関与していた今吉敏雄が残した文書からも読み取れます。これは1934年1月、「試験移民期」と呼ばれる時期の資料で、哈爾浜第十師団司令部会議室で開催された農地買収委員会の会議録です。関東軍将校を中心とする関係者が集まって農地買収の方針を話し合っています。注目すべきは、関東軍参謀長の発言で、師団長からの意見として、現地有力者側から「現地ニ於テ現在働イテ居ル者ノ土地ハ高ク買ツテ貰ヒ度」という意見が上がっていたこと、それに対して、師団長は「土地ヲ安ク買フコトヲ考ヘテ貰ヒ度イ、現地ノ一時ノ情実ニ捉ハレテ地価ヲセリ上グルコト勿レ」と考えていました。移民用地をより多く取得するためにいかに安く買うかという方針が軍によって示されていたことがよくわかります。なお、実際の用地買収価格は、だいたい時価の2割程度、高くても4割程度に過ぎませんでした。中国人農民の反感・恨みを買うのは当然のことでした。用地買収のあり方を示す貴重な一次資料と言えます。

(2) 村ぐるみの移住奨励：分村移民

その後、満洲移民は、1936年8月、広田弘毅内閣によって国策に指定され本格化していくことになります。「20カ年100万戸送出計画」が策定されました。国策化以降の主要な送出方式として登場したのが、村ぐるみの移住奨励、分村移民でした。大量移民の要請もあり、これ以降、地方自治体の動員が進められ、全国の各地域が移民政策に巻き込まれていくことになります。分村移民には、恐慌で疲弊した農村の救済（過剰人口対策）という社会政策的な意図、あるいは過剰農家の送出を通じて残存農家の耕作規模の拡大を図るという農業構造改革の目的があったことから、「貧農は満洲で大地主になれる」、「母村は豊かになる」という宣伝が行われるようになります。

分村を実施した村には、経済更生特別助成金という名の補助金が優先的に交付されました。補助金を餌に財政難に苦しむ市町村を動員したという見方もできます。神奈川県津久井郡青根村（現相模原市）の事例でみると、経済更生事業の総経費6万円に対して補助金が1万8,000円交付されています。事業の内訳をみると、分村移民の経費は4,000円程度でそれほど多くはありません。農道新設や集積倉庫・共同集荷場建設など農村のインフラ整備が主たるものでした。ここからは、分村移民を実施することで、村にはインフラ整備のための巨額の補助金が交付されたことがよくわかります。全国で分村移民が盛んになる背景には、

こうした補助金行政という政府の対応が関わっていました。

こうした補助金行政に加えて、政府や移民推進機関では様々なメディアを使って分村移民を推奨しています。例えば、農民文学作家の和田伝が書いた『大日向村』という小説があります。長野県南佐久郡大日向村（現佐久穂町）の分村移民をモデルにした国策小説で、映画や演劇になったほか、紙芝居まで製作されています。話の筋書きとしては、貧農や炭焼きの多い貧しい村を救うために、大学出の若き村長が一大決心し、分村移民をやろうと呼びかける。それに対して村の青年たちが賛同する。半信半疑の農民たちには満洲から農作物のサンプルを取り寄せて、「満洲に行けば立派な作物が沢山とれる」とアピールする。そして多くの村人が分村に参加し、満洲の広大な土地で豊かに暮らしたというようなストーリーです。「豊かな満洲」というイメージは、当時の開拓団募集のポスターからも読み取ることができます。ポスターには、背景としてトラクターで畑を耕している様子が描かれています。当時日本ではありません使われていないトラクターを使って大規模農業をやる。「豊かさ」は満洲の広大な土地だけでなく、こうした進んだ農業技術・機械とも結びつけられていたこと、こうしたイメージを強調しながら開拓団への参加が呼びかけられていたことがわかります。まだほとんど進められていませんが、ポスター（図像資料）から満洲開拓を読み解くというのも面白い研究テーマではないでしょうか。

なお、先ほど紹介した紙芝居の現物は、立命館大学国際平和ミュージアム（京都市北区）に所蔵されています。ミュージアムは日本では珍しい大学立の平和博物館で、設立後30年ほど経過していますが、昨年9月にリニューアルオープンしました。新しい常設展示の目玉の一つとして、テーマ展示「帝国日本の植民地・占領地」というコーナーを作りました。日本がかつて支配した台湾、朝鮮、樺太、南洋群島、満洲、東南アジア、地域ごとに様々な資料や証言を展示し、日本帝国による植民地支配の特徴を理解できるように工夫されています。もし観光等で京都に来られる機会がございましたら、一度ご来館頂ければ幸いです。

話を元に戻します。今度は満洲に移住した人の話、移民の階層についてです。階層については、全体として、土地を持たない小作貧農や下層村民が多かったことは間違いません。だいぶ前に陳野守正さんが聞き取り調査をしています。埼玉県秩父郡日野澤村（現皆野町）の事例を取り上げ、役場では税金を納めない人、滞納者を厄介払いのような形で送り出そうとしていたという証言を紹介しています。借金や税金の滞納がある人は負い目があるので断れない。送出過程では村による移住対象者の選別があり、村落共同体的・階層秩序的な構造が深く関わっていたと言えます。

ただし、その一方で、必ずしも貧しい人だけが移住したわけではありません。農地をある程度所有していた自作農、村内の上中層が参加していた事例も確認できます。長野県諏訪郡富士見村（現富士見町）では、村長自ら開拓団長として満洲に渡っていますし、それに続いて村議など役職者も参加する。階層的に偏りがなかったという特徴があったわけです。農地を持っている人の移住については、帝国農会の調査報告書にあるように、いずれ母村に帰つてくるつもりで出かけている。留守の期間、母村の農地の管理を親戚に委託、貸し付けて出

かけています。満洲移民というと、財産を全て処分して移住するというイメージがありますが、必ずしもそうではありませんでした。これは富士見村だけでなく他の村でも一部確認できることから、自作農が移住する際の典型的なパターンとして理解すべきです。

1941年12月のアジア・太平洋戦争以降になると、兵士や労働者としての動員が強まつたことで、農村は人手不足に陥りました。ゆえに移民を確保するのが難しくなります。とはいっても、満蒙開拓は不動の国策でしたので中止するわけにはいきません。その結果、貧困層や零細農家を中心に送出圧力が強まり、半強制的動員が進められることになりました。戦後に刊行された開拓団の記録によると、岐阜県恵那郡坂下町（現中津川市）では、「組で何人出せと割り当てもあった」ことで、零細な農家が標的にされ、中にはそれを気にして自ら命を絶ってしまう人がいたことが記されています。また、島根県美濃郡真砂村（現益田市）の事例では、村長のやり方が横暴で、「満州に行かねば炭鉱に行けとか、憲兵も使って脅かし半分にやりなさった」といったことが語られています。このように、戦争が激化していく中で、移民は自由な志願ではなくなっていきます。高知のある村の集落では、籠引きで移民候補者を決定するほどの事態も起こっており、送出圧力は末端部分でより強まることになりました。

（3）移民たちは満洲で「豊か」になったのか？

満蒙開拓をめぐる論点として、移民たちは満洲で「豊か」になったのかという問題があります。結論から言えば、一部の開拓団では経営に成功し、郷里に送金する移民がいたことが最近の研究で明らかにされています。長野県下伊那郡清内路村（現阿智村）の郵便局文書を分析した小島庸平さんの研究です。小島さんが文書を調べたところ、この郵便局では外国為替取扱高が1930・40年代を通じて激増していました。これは主に満洲移民からの送金でした。入植地の立地条件に恵まれ、経営に成功した模範的な開拓団があったこと、その開拓団に所属した移民たちが送金していたわけです。移民の送金というと、ハワイや北米に出稼ぎした移民を思い浮かべますが、満洲移民においても一部でそうしたことが行われていたことは重要な発見です。

他の開拓団史でも大規模経営や副業で利益を挙げていたという話はよく出てきますし、とりわけ初期の開拓団、入植期間が長い開拓団では、農業生産も軌道にのり、加工所や作業場、商店、病院、学校、寺院などの施設も整備されて、移民の生活水準が高まっていたことが推測されます。

それから、分村移民を考えるうえで重要なのは、郷里・母村と現地の開拓団の結びつきです。手紙の交信や団報の送付のほか、母村は現地への物資提供（食料品・農具・学用品など）、勤労奉仕隊の派遣・慰問を通じて開拓団を物心両面で支えています。特に入植まもない開拓団には資金が乏しかつて、母村が財政支援をしていたことが明らかになっています。私の研究になりますが、山形県西村山郡高松村（現寒河江市）から送出された阿城高柴開拓団の団報からは、開拓団の経営資金の状況が読み取れます。開拓団の経営資金はその大部分を満洲柘植公社からの融資に依存していましたが、それ以外に母村からの借入金も相当額

に上っていました。先述の送金とは逆に、母村から開拓団に資金が流れていたこと、全体としてみると、送金よりもこちらの流れの方が大きかったのではないかと私は考えています。

移民の送金や母村による財政支援からもわかるように、開拓団と母村は深く結びついていたわけですが、戦争末期になると、そうした関係は立ちゆかなくなります。新潟県中魚沼郡田沢村（現十日町市）から送出された開拓団の資料には移民の手紙が含まれており、そこからは入植地の過酷な生活の様子と移民の悲痛な叫びを読み取ることができます。具体的には、資金、労力、家屋、寝具、食料などあらゆるものが欠乏し、風邪などで体調を崩す者が続出したことから、母村に救いを求める手紙を送っていたのです。それは裏を返せば、移民を迎える側、満洲拓殖公社や満洲国側が十分な受入体制を整えていなかつたこと、そして何より、移民の生活・生存よりも、送出を優先させた政府の対応の杜撰さ、無責任さを浮かび上がらせています。

（4）関西地方の資料調査から

ここでは、満蒙開拓とはあまり関わりの薄いイメージのある関西地方の資料調査からわかつたことを紹介します。まずは京都府庁の公文書で、1939年4月に厚生省職業部長が各府県知事・北海道府長官宛てた文書になります。満洲移民というと、省庁でいえば、拓務省や農林省が主導していたわけですが、実は、戦時中に新設された厚生省も職業行政という形で関与していました。全国にある職業紹介所を通じて移民を募集していたこと、移民送出に関与していた事実を読み取ることができます。

僅かですが、大阪府にも満蒙開拓に関する公文書が残されています。1944年8月、戦争末期の府庁文書です。それによると、大阪では空襲に備えて疎開事業、建築物疎開が実施されました。疎開する商工業の転廃業者を満蒙開拓団に編成する動きが出てきます。注目すべきは、文書が公安課、警務部長から各警察署長宛てて発出されている点です。大阪など都市部では、疎開とも関わって、警察権力を動員する形で満洲移民が進められていたこと、こうした点も従来の研究では十分に明らかにされてこなかったことです。

同じく関西にある資料として、滋賀県庁文書も紹介しておきます。1938年12月の県議会議長の意見書になります。それによると、当時の滋賀県では、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所の設置を要望していたこと、訓練所誘致のために政府に働きかけるような動きがあったことが読み取れます。ご承知のように、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所は茨城県内原にあったわけですが、訓練所増設の動きがあり、県内ではそれに呼応する形で誘致を望む声が上がっていたという話になります。滋賀県というと、送出数では全国最下位で、満洲移民に消極的というイメージがありますが、実際は一部に強い関心をもつ人もおり、独自の動きをみせていたことがわかります。結局、誘致運動が実を結ぶことはありませんでしたが、なぜこうした動きが滋賀県から出てきたのか、私自身現時点では把握できていませんが、地域振興や地方利益などと重ねて検討してみると面白いことがわかるかもしれません。

3、戦後日本社会／地域社会と引揚者

(1) 日本帝国の崩壊と人の移動

さて、ここからが戦後の引揚げに関する話になります。戦前の日本は、アジアや太平洋地域に植民地・勢力圏を多くもっていた「帝国」だったわけですが、敗戦（帝国崩壊）によって海外の植民地を全て失うことになります。それとともに、植民地からの民間人「引揚げ」が開始されます。その数は約 319 万人に上ったと言われています。特に多かったのが満洲で、全体の 38% を占めていました。満洲以外では、朝鮮 22%、中国 16%、台湾 10%、樺太 9% と続いています。引揚げ過程では、冒頭で紹介した黒田雅夫さん一家のように、多くの犠牲を生み出すことになりました。犠牲者は約 24 万 5,000 人で、このうち開拓団関係者は約 8 万人でした。

統計資料から引揚者数上位 11 県と引揚者率上位 10 県（満洲以外からの引揚者を含む）をみると、数では福岡、北海道、熊本、鹿児島、東京、長崎、山口、大阪などが多くなっています。満洲移民送出全国 1 位の長野県は 11 位です。一方、引揚者率（人口比）でみると、熊本・佐賀・長崎・山口など九州・中国地方の諸県が上位を占めています。四国では香川が 8 位に入っており、高知は 12 位でした。全体として西日本優位になっています。これらの地域からは、戦前に朝鮮や台湾に多くの移民が送られたこと、そうした戦前における移民の歴史が関わっています。

引揚げ過程では、財産をはじめ書類など持ち帰り品が厳しく制限されたため、引揚者は記録を持ち帰ることが難しかったと言われています。とはいっても、持ち帰ることができたケースもありました。長野県諏訪郡富士見村の開拓団幹部の一人は、現地で使用していた「豆手帳」を持ち帰り、後に家族が私家版として刊行しています。1945 年 8 月 15 日から 10 月 2 日までに起こった混乱、現地でのソ連兵との折衝の様子などが克明に記録されている資料です。「ロモーズ」と呼んでいたソ連兵とのやり取りに加えて、衣類を差し出すことで開拓団の女性を護っていた様子も読み取れます。敗戦直後の現地の実情については、民族関係を含めてまだ十分にわかっていないことも多く、今後はこうした記録の発掘・読解が必要になると思います。

(2) 戦後日本社会は引揚者をどう迎え入れたのか？

この問題については、研究史上の大きな焦点になってきました。大筋としては、敗戦後の日本には引揚者を迎える余力が十分になかったこと。そうした中で、引揚者を待っていたのは差別・偏見であり、また郷里に帰ってきても定着できず、離村して都市に流入するものが多かったと言われています。炭鉱労働や漁業労働に従事した人もいました。農業では、戦後開拓政策を通じて営農困難な山林原野・高冷地に再入植したり、戦後農業移民ということで、1950 年代前半以降再開されるブラジル・パラグアイなど中南米への移民に参加した人も少なくありませんでした。さらに、「引揚女性」には固有の困難が伴っていたことも忘れてはなりません。その点とも関わって、最近では、松原洋子さんや山本めゆさんらの研究

によって、引揚げ過程での性暴力に加えて、帰国後の国家による組織的人工妊娠中絶が行われたこと、国家が「混血児」の存在を懸念していたといった事実も明らかにされています。

「引揚女性」の体験や記憶は、村落共同体の抑圧もあり、長らく語られることはありませんでした。以上のことからすると、引揚者は戦後日本社会から「排除」された存在であり、国民国家として再編された日本の周辺部に追いやられた人たちにはかなりませんでした。

そうしたことに加えて、1955年以降の高度経済成長期になると、引揚者問題そのものが「忘却」されていきます。当時は引揚者団体による在外資産補償運動が活発化しますが、それへの社会の反応は「今や戦後ではないのに、引揚者を特別扱いする必要はない」というように、冷淡なものがあったと言われています。また、残留孤児など未帰還者に対しては、1959年の「戦時死亡宣告」（「未帰還者に対する特別措置法」）によって、帰国支援・身元調査が打ち切られるなど幕引きが図られることになります。

ただしその一方で、果たして「排除」や「忘却」といった観点だけで評価できるかといと、疑問が残ります。特に戦後日本社会とは異なる、地域社会という固有の空間の中で引揚者問題を具体的に検討するという作業はこれから課題と言えます。いわば、地域社会の中で引揚者がどのように戦後を生きたのか、あるいは、地域社会はどのように引揚者や満洲経験と向き合ったのかという問い合わせが十分検討されることのないまま残されているわけです。

（3）地域社会と引揚者の生活再建

戦時に分村移民を送り出した岐阜県恵那郡坂下町の町報『坂下新聞』には、戦後間もない時期の引揚者の声や痕跡が残されています。例えば、第28号（1951年）の「開拓者供養塔の建立に就て」と題した文章をみると、元開拓民と思われる町民から「当時の町政に参与せし方達」の責任を問う声が上がっており、具体的な施策として供養塔の建立を要求したことが読み取れます。掲載されたのは町の広報誌ですので、1950年代の地域社会において、必ずしもそうした声が抑圧されることなく表明されている点は注目されます。

また、分村移民を送り出した村長の戦後の様子がよくわかる記録も残されています。先述の島根県真砂村の開拓団の記録に収録されている文章です。書き手は村長の娘ですが、戦後、病床にある父親が「いくら国策にそったとは言いながら、沢山の大切な命を満州の地にほうむった」と語り、死ぬ間際まで自責の念にかられていたことを明らかにしています。引揚者だけでなく、国策移民を推進した指導者の声も拾い上げることで、戦後の引揚者と地域社会との関わりが明確になってくるように思われます。

では、引揚者たちはどのように戦後を生きたのか、生活再建を図ったのでしょうか。こうした点については、村の中で引揚者による組織化が図られたことが重要です。高知県では、幡多郡西土佐村（現四万十市）の権谷せせらぎ交流館にその手がかりとなる資料が保管されています。江川崎村海外引揚民更生会の規約です。更生会は引揚者が互いに助け合う団体として組織され、相互の連絡、関係当局・団体との交渉、就職・就農斡旋などを行っていました。事務所が役場内に置かれたことから、行政とも密接な関係をもちながら活動した団体だ

ったこともわかります。

ところで、敗戦後の日本では、引揚者救済をめぐる動きが盛んになったことがすでに多くの研究で明らかにされています。大きく分けて三つの経路がありました。一つは、厚生省・地方自治体・同胞援護会による引揚者援護事業です。物資配給や資金貸付・住宅供給など引揚者を対象にした固有の援護政策です。とりわけ、満洲移民を全国一送り出した長野県では、特別法外援護といった形で予算を計上するなど、「送出者の責任」を掲げて満洲開拓引揚者の救済に当たった点に特徴がありました。

二つ目は、生活保護法が施行され、引揚者もまたその枠組みに包摂された点です。生活保護法には「無差別平等」原則があります。属性や立場に関わりなく生活困窮者を救済するという原則ですが、実際の運用（どこの誰を保護対象にするか）は各町村・民生委員の裁量に委ねられていました。生活扶助を受けている世帯には、一般生活困窮者、引揚者、戦災者、留守家族、遺族、傷痍軍人といった区別が存在していましたが、長野県下伊那郡川路村（現飯田市）の1946・47年の数値をみると、引揚者が全体の4～5割で最も多くを占めていました。川路村は戦前、分村移民を送り出した村であり、それだけに引揚者が多かったという事情があるわけですが、それでもここまで引揚者の比重が高いのは何らかの理由や意図があったはずです。その点については、生活保護の運用を審議した民生委員会の会議録から読み取ることができます。会議の中で、村では保護認定の基準が作成されています。それによると、保護の対象として、困窮の度が最も甚だしい者のほかに、もう一つ、「外地引揚者中身よりなきものは一時的にこれをなす」という文言を入れていたことがわかります。「無差別平等」の原則からすれば矛盾する規定ではあるのですが、あえて引揚者を保護の対象に積極的に組み込んだこと、ここに地域社会の引揚者に対する姿勢が明確に示されているのではないかでしょうか。

三つ目は、農地改革時的小作地引上げに際して、村農地委員会が満洲開拓引揚者に配慮していたことです。先述のように、満洲移民の中には、農地を貸し付けて移住した自作農が存在していました。それが、戦後の農地改革時になると、彼らを「不在地主」とみて農地買収の対象にすべきかどうかが焦点になりました。本来であれば、「不在地主」に認定、買収されても仕方がないところですが、多くの場合、村農地委員会では、引揚者の貸与した農地を「一時的なもの」として返還することに決定します（村農地委員会議事録などの資料で確認することができます）。このように、引揚者の中には、戦後、農地の返還を受けたことにより、自作農として復帰することができた人もいたわけです。

引揚者の生活再建のあり方については、上記のような救済の仕組みを指摘するだけでなく、それと個々の家族経営がどのように結びついていたのかを検討する必要があります。徳島県名西郡上分上山村（現神山町）には、戦前から戦後にかけての役場文書が多く残されています。その中には引揚げや社会政策に関する資料が豊富に存在しています。以下はこれらの調査・分析から明らかになったことです。上分上山村では、敗戦後、引揚者は全部で42世帯を数えました。1953年時点になると19世帯に減少していることから、この間およそ半

数が他出・離村したことがわかります。村に残った 19 世帯の中の一例ですが、戦前の 1930 年代に農地を貸与して満洲（奉天）に移住し、請負業を営み、敗戦後に村に引揚げてきた家族があります。その世帯は、農地改革時に小作地引上げ申請を行い、貸与していた農地の返還を認められています。理由は、扶養家族が多く、食糧確保の必要があるためでした。またそれと同時に、村内で実施された未墾地開墾（戦後開拓）に参加し、耕作地の拡張を図っています。さらに、扶養家族が多く生活が苦しかったことから、一時的に生活保護を受けていたことも確認できます。このように、引揚者とその家族は、戦後改革の時代の新たな社会政策をうまく活用しながら生活再建を図っていたこと、引揚者の生活再建過程には行政の対応や地域社会との結びつきが存在したことが明らかになりました。

（4）中国帰国者の自立支援と引揚者

引揚者と戦後日本社会・地域社会の関係を考えるうえでもう一つ紹介しておきたい資料があります。高知県立公文書館に保管されている中国帰国者の自立支援に関する資料です。中国残留孤児となり、その後日本に帰ってきた人たちを「中国帰国者」と呼んでいますが、高知県では 1972 年の日中国交回復以降、帰国者がみられるようになり、1982 年時点で 40 世帯 105 名を数えるまでに至りました。帰国後は言語や文化・生活習慣の違いもあり相当な苦労があったわけですが、それをサポートする制度として行政によって新たに設けられたのが、引揚者生活指導員でした。

資料からは、どんな人が指導員になったのか、その属性を読み取ることができます。1978 年段階では、3 名中 2 名が引揚者でした（1 名は元開拓団員、もう 1 名は元満鉄社員）。81 年段階になると、13 名に増員されており、引揚者以外の指導員に加えて、女性の指導員も目立つようになります。ただそれでも、元満洲国官吏や元中国駐在社員など引揚者が一定の比重を占めていたことは注目に値します。中国帰国者の自立支援に引揚者がどのように関わっていたのか、その内実については今後詳細な検討が必要になりますが、ここでは、戦後日本社会ないし地域社会において、引揚者という植民地・外地経験をもつ人たちに「福祉の担い手」としての役割が期待されるようになったことを指摘しておきたいと思います。

4、おわりに

それでは最後に話をまとめて終わりにしたいと思います。まず、満蒙開拓とは何だったのかという点については、一貫して軍事の論理に基づく移民であったこと、そうした移民を効率的に遂行するため分村移民方式が採用され、全国の市町村・民衆を動員したこと、その過程では送出圧力と半強制性を伴っており、結果として多くの犠牲と未帰還者問題を発生させたことから、地域社会や個人・家族に深い傷跡を残すことになったと言えます。その一方で、資料からは、母村分村関係や送金、自作農の移住といった論点があり、単純に「棄民」といった理解のみで済ませられない複雑な性格をもっていること（さらに、本日は十分触れられませんでしたが、中国側からみた性格規定や評価も重要になってきます）。このあたり

に満蒙開拓の歴史を語る難しさがあると言えます。要は、植民地支配や軍事の論理という本質を見えつつ、地域や個人・家族にどういった影響を与えたのか、丁寧に検証する必要があります。

それから、戦後日本社会・地域社会と引揚者の関係についてもみてきました。全体としてみると、引揚者は戦後日本社会から排除された人たちという性格をもっている一方、資料からは、地域社会は複数の経路を通じて引揚者を包摂する志向をもっていたことも明らかになりました。複数の政策活用や組織化を通じて生活再建を図ったり、あるいは、中国帰国者の支援を担うなど、離村者・貧困層・「棄民」といった従来のイメージとは異なる引揚者の姿が浮かび上がってきたと思います。言い換えれば、戦後の地域社会において引揚者の占める比重は決して小さくなかった、ということです。

以上のように、史資料からはこれまであまり言及されてこなかったような、新しい満蒙開拓や引揚者の姿が浮かび上がってきたのではないかでしょうか。今後も史資料の調査、読み解きをしっかりと行なうことを通じて、満蒙開拓・引揚げの研究が進展していくことを期待すると同時に、記憶の継承、語り継ぐ活動の大切さを確認することで、満蒙開拓や引揚げの歴史への理解が深まっていくことを願っています。長時間ご清聴下さり、ありがとうございました。



基調講演の様子（高知市立自由民権記念館、2024年7月）

満洲帰国者の語り継ぎ活動—崎山資料・崎山文庫の形成過程から—

楠瀬 慶太

(満洲の歴史を語り継ぐ高知の会事務局長)

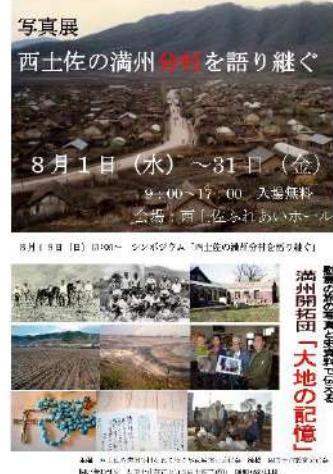
1、はじめに

今から 14 年前の 2011 年 8 月 19 日、四万十市西土佐用井の西土佐ふれあいホールで「西土佐の満州分村を語り継ぐ写真展」(写真展実行委員会主催) の関連シンポジウム「西土佐の満州分村を語り継ぐ」が開かれた。

戦前に、中国東北部の満洲国（旧満州）と呼ばれた地域に高知県から移民した人々は約 1 万人を超える¹。この数は人口比 1.4% で全国 3 位の数字である。高知県民の 100 人に 1 人以上が旧満洲に渡ったことになり、満州と高知が非常に縁深い土地であったことが分かる。しかし、その歴史は、旧満洲から日本への引き揚げ時に多くの犠牲者が出了という非常に悲惨な側面も含んでいる。写真展を開いたメンバーは、旧江川崎村（現四万十市西土佐地域の一部）から農業開拓移民として分村して旧満洲に移民した江川崎大清溝開拓団の元団員やその子、開拓団の歴史に关心を持つ住民らである²。この活動は、開拓団員の高齢化や次世代の歴史継承が困難化する中、開拓団員の子世代が中心になった活動として注目を集めた³。

この場に高知市から参加したのが、満洲帰国者の談話会や満洲関係資料の収集などに精力的に取り組んでいた当時 81 歳の崎山ひろみ氏（元満州会事務局、満洲の歴史を語り継ぐ高知の会副会長）である。写真はその際に、写真展実行委のメンバーに満洲の関係資料を見せる崎山氏を写したものだ。これらの活動に中心メンバーとして関わってきた筆者は、ここで関係者の出会いが、後の崎山氏の語り継ぎ活動のルーツになったと考えている。

本稿では、第 6 回満洲の歴史を語り継ぐ集いの報告を基にして、満洲



写真展のパンフレット



シンポ会場での一場面。満洲の地図を見せる崎山氏（左）。

シンポで会場から発言する崎山氏（右）。

¹ 約 1 万人とは、実数として把握されている開拓団と満蒙開拓青少年義勇軍を併せた数字で、職業移民は含まれていないため、実数はさらに多くなる。

² 当時高知新聞幡多支社で記者をしていた筆者も実行委の中心メンバーとして活動した。

³ 『高知新聞』2012 年 7 月 30 日 朝刊

帰国者である崎山氏の戦争記録保存と語り継ぎ活動について整理し⁴、その過程で崎山氏が集めてきた崎山ひろみ資料(以下崎山資料)と崎山文庫の形成過程と内容を主に分析する。そして、満洲移民資料の活用や継承をどのように進めていくべきかについても考えたい。

2、戦争記録保存・語り継ぎ活動と崎山ひろみ氏

(1) 戦争記録の保存活用と満洲移民資料

満洲移民に関する文書や証言を含む資料は、歴史学の中では戦争記録と呼ばれる。ここでは、戦争記録の保存活用に関わってきた高知県の施設・団体の系譜を整理し、満洲移民資料の活動の中の位置づけを確認する(図1)。

高知県においては、1970年代に土佐近代資料館構想が提起され、1980年代には市民による自由民権館建設運動とともに平和資料館建設運動が行われた。この中で戦争記録も近代資料館に入る構想もあったが、建設主体の高知市は自由民権館の建設を選んだため、平和資料館は民間での設立が模索された。1990年前後に県立歴史民俗資料館(歴民館)や高知市立自由民権記念館(民権館)が設立される中で、活動を牽引したのは、民間の平和団体が1989年に設立した高知市の平和資料館「草の家」(草の家)である。空襲資料や兵士の遺品、証言の収集、戦争遺跡の調査、反戦運動家の顕彰など広範な記録活動を展開し、『高知の戦争 証言と調査』など50冊近い刊行物を発刊している。また、大学研究者や考古学者らも加わり、学術的な視点を加えて幅広い記録活動が展開された。さらに、草の家に関わるメンバーを中心とした戦争遺跡保存ネットワーク高知が各地で調査を展開、44連隊弾薬庫跡など戦争遺跡の保存運動も行っている。2000年代に入り記録に関わってきたメンバーの高齢化が重なり、証言や資料の記録活動は以前ほど活発ではなくなってきている。

1990年代後半には満洲帰国者でつくる満州会や新京会などが相次いで結成された。各会の事務局は崎山氏が中心になって務め、帰国者が思い出を語り合う活動が活発したが⁵、高齢化で15年足らずで全て解散した。

一方で、2010年代には写真展実行委を中心に結成された「西土佐の満州分村を語り継ぐ会」や、帰国者や研究者らを中心に結成された県全体

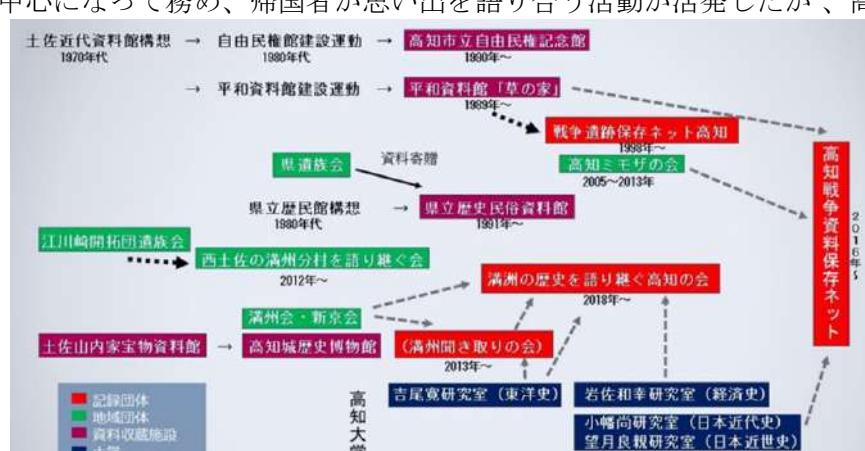


図1 高知県における戦争記録の保存活用に取り組む施設・団体の系譜

⁴ 楠瀬慶太 2023 「地域における戦争記録の継承を考える—高知県の実践活動の検証—」『「非常時」の記録保存と記憶化 戦争・災害・感染症と地域社会』岩田書院を基にして整理を行う。

⁵ 2007年には、高知「新京会」が編集した会員22人による文集『遙かなる満州』が出版された。

を対象にした「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」が活動を始めている。

2000 年代には戦争資料に注目が集まつた。県内の軍事郵便を活字化した元教員らでつくる「高知ミモザの会」の『戦地から土佐への手紙』刊行は、全国的な軍事郵便の研究が進んだ時期で、学会の動向とも連動している。漫画家を目指した特攻隊員の資料や忠靈塔建設資料など、重要資料の発見も相次いだ。こうした中、市民有志により高知戦争資料保存ネットワーク⁶（現高知地域資料保存ネットワーク、以下資料ネット）が結成され、公的施設が受け入れできない資料の救済を、草の家や歴民館などと連携して継続している。満洲移民資料については、資料ネットが各語り継ぐ会と連携して資料撮影や目録作成を進めている。

証言については多くの出版物や記録類が残されており、満洲関係者の証言については、崎山氏が主導する満州聞き取りの会が 2013 年から 70 人近い帰国者からの聞き取り作業を終えているが、証言記録（音声・動画）の活用は進んでおらず、満洲の歴史を語り継ぐ高知の会がデータ整理やテープ起こしの作業を始めている。

このように見ると、満洲に関わる戦争記録の保存活動は、高知県の活動の中で大きな位置を占めており、その中心に崎山氏が深く関わっていることが分かる。これは帰国者や遺族・親族を含めた満洲関係者が非常に県内に多いことと、満洲への関心が非常に高いことを示唆していると考えられる。

（2）崎山氏と戦争記録に関わる活動

次に、改めて崎山氏の戦争記録に関わる活動を整理する。1930 年旧満州撫順市生まれの崎山氏は、新京で終戦を迎えた。1946 年に家族とともに日本へ引き揚げ、父の故郷・高知市に住んだ。保険会社社員を経て、満洲の資料収集を始めたのは退職後の 70 歳と案外遅い。

30 代のころ、満洲時代の女学校の同窓会を機に満洲関係の本を読むようになり、1996 年には開拓団の人の実体験を聞いたことで、「とても悲惨で、都会に住んでいた私の経験とあまりにも違っていてショックを受けた。私の体験なんか言えないと思った」という。

「私のいた満洲はどうして成り立って、終焉を迎えたか歴史を知りたい。二度と同じ道を歩まないように訴えていくのが私の使命」と、1998 年に引き揚げの経緯などをたどったドキュメンタリー映画「葫蘆島大遣返—日本人難民 105 万引揚げの記録」を高知市で上映し、語り部を始めた。同時に本県や東京の古本屋で文献を探して入手し、知識を深めていった。収集した書籍、資料は約 400 点に及んだ⁷。

1998 年に満州会を結成し、帰国者のネットワークをつくり、事務局を務め、新京会や撫順会などの結成・運営にも携わった。2013 年には、収集した書籍・資料のうち、帰国者から譲り受けるなどした満洲関係資料（崎山資料）を歴民館に寄贈している。2015 年に撫順会などが解散して、帰国者主体の活動が終焉を迎える中、2018 年 87 歳の時に「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」（以下高知の会）を結成する。同年に収集した書籍を高知大学の

⁶ 筆者は資料ネットの発足メンバーで事務局を務めているほか、崎山氏も資料ネットのメンバーである。

⁷ 『高知新聞』2013 年 2 月 23 日夕刊

「崎山文庫」に寄贈して、収集資料の保存が一段落した。2019 年には高知の会主催の「第 1 回満洲の歴史を語り継ぐ集い」で語り部として登壇し、「満洲：都市での暮らし」と題して体験を語っている。

また、2021 年には、中国人画家・王希奇が葫蘆島の引揚者を描いた巨大絵画「一九四六」の展示「一九四六高知展」を高知市で開催し、10 日間で 2782 人を集めた。2023 年には四十万市出身の作家・中脇初枝の小説『伝言』（講談社）に、崎山さん本人の満洲での体験が実名で盛り込まれた。90 代をこえた近年も講座や学校などで語り部を続け、高知の会では月 1 回の子世代に体験や知識を伝える「語り継ぐ会」も開催している。

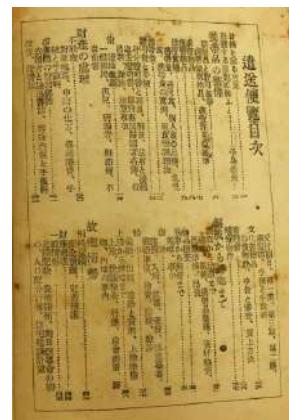
このように、崎山氏の活動は 80 代後半を過ぎて加速化しており、その内容は「語る」から「語り継ぐ」、記録から継承へと変化している。すなわち、高知の会をきっかけに次世代へとつなぐ活動へと大きく転換した。この過程では、研究者との連携や崎山氏を慕って支援する子世代の参画が大きかった。こうした発想の展開には、崎山さんが実際に見聞きした西土佐の子世代による語り継ぐ活動がモデルとしてあったと考えられる。

3、崎山資料と崎山文庫

（1）崎山資料と『遣送便覧』

まず 2013 年に歴民館に寄贈された崎山資料について見ていく。崎山氏が出身者や関係者から収集した高知県の満洲移民に関する資料群であり⁸、資料群は書籍と現資料（紙・モノ）があり、書籍類は高知大学図書館（崎山文庫）、資料類は歴民館に寄贈され、分散して保存されている。資料類は 2017 年 10 月に資料ネットが撮影・記録し、目録を作成した。「満洲移民の手引」（SN6-6）、満州国ポスター（5）、引揚證明書（19）、「満洲帝國全圖 及北支明細圖」（1）など多様な満州関係資料を含む計 200 点で、高知県から多くの移民を送り出した旧満洲の歴史を知る重要な資料群である。引揚時重要品入れ袋（36）、虻牛開拓団の引揚者が持っていた紙製トランク（31）などモノ資料も充実している。オーバーコート（32）や大日本国防婦人会たすき（37）など、桂浜の龍馬像を建設した入交好保氏の中国引き揚げ時の資料も含まれる。

中でも最重要資料といえるのが、崎山資料でしか現存が確認されていない引揚港での引揚者の作業マニュアル「遣送便覧」（SN6-2・3）である。原本は崎山文庫に入っているが、複製本が歴民館にも所蔵される。日本人の移送を担当した中国政府が中心となり残留日本人会と作成し、指導的立場にあった人が所持していたとされる。その序文は「今までの辛苦に対して有終の美を納めねばならぬ」「元気な体で祖国の土を踏むことを祈る」と、日本人会役員の言葉で結ばれている。便覧には金銀や証券、歴史書籍、報告書などの禁止品



「遣送便覧」の目次

⁸ 楠瀬慶太 2021 「解題：崎山ひろみ資料」『高知県近現代資料集成 I』高知戦争資料保存ネットワーク

が列挙され、船に持ち込むのは「時計は1個に限る」「着用する衣服以外は没収される」など細かい規定が記載されている。船に乗るグループの編成や必要書類の作成方法もあり、引き揚げ手続きの実態を伝えている。

目録や写真データの公開によって、崎山資料は保存から活用の段階に入っており、語り継ぐ資料としての利用が期待される。

(2) 崎山文庫をデータサイエンスで読み解く

崎山氏は70歳から満洲に関する書籍も収集している。収集資料でも一般流通する書籍は生史料と異なり博物館には入れるのが難しい。また、図書館も一括受け入れ難しく、崎山氏が集めた一括資料群は史料と図書に分かれる形になった。この形成過程は、書物が抱える大きな問題を含んでいるが、2018年に高知の会にも関わる高知大学・吉尾寛教授の仲介で、運良く高知大学に1276冊（図書1033、雑誌243）が崎山文庫として収蔵された。

文庫の目録には、その内容として①引揚者の証言を集めた書籍（地方・中小出版社、関係機関・団体等の出版、自費出版等）、②敗戦後旧「満洲」在住者が当時を語り或は現地を再訪問した記録、旅行記、③「満洲」研究に役立てられる実証性の高い研究書、④「満洲」研究を行う上での参考図書、⑤日本近現代史の戦争、戦地等に関する参考図書、⑥「満洲」引揚者が所持し持ち帰った歴史文物、「満洲」在住時に使用していた文書資料（複写物）ーと6分類が上げられている。歴史資料の中で、多数普及している書籍は「雑」として一括整理され、その内容が踏み込んで分析されることが多い。一方、ある目的で集められた書籍群1300点はなかなかのサンプル数であり、その詳細を分析することで崎山文庫の特徴・価値・活用の仕方を捉え直すことができるのではないかと考える。

ここでは導入として近年注目されるデータサイエンスの手法を使って、崎山文庫の目録を分析する。まず、書籍類の出版年で分類をしてみると、少ないながら高美甚左衛門『日本地誌略 1』（師範學校編輯、1880 年）や宮崎繁吉『楊貴妃』（1899 年）といった国立国会図書館に所蔵な

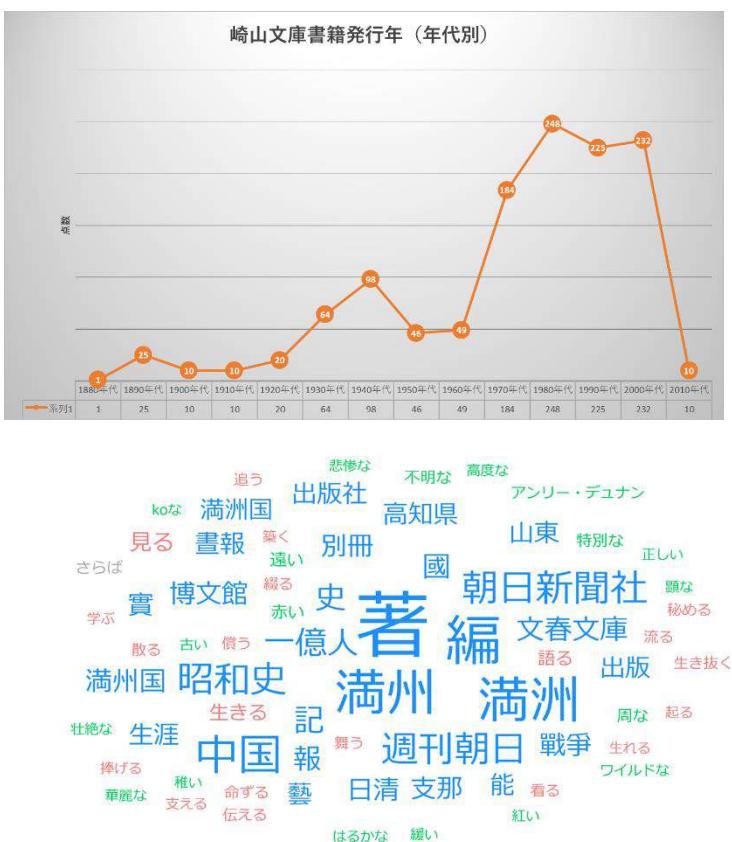


図 ワードクラウドによる目録語彙の分析図

し、デジタルコレクションも未収録の 1880・90 年代の書籍が含まれ、歴史的な貴重書を含む文庫であると位置づけられる。

また、終戦前後の 1940 年代の 98 点にしほって見ると、書籍出版年は 1940 年 6 点 1941 年 10 点、1942 年 28 点、1943 年、15 点 1944 年 27 点、1945 年 0 点、1946 年 1 点、1947 年 8 点、1948 年 13 点、1949 年 11 点となり、終戦に伴い大きく満洲関係書籍の出版物が減少したことがうかがえる。それが 1970 年代(184 点)、1980 年代(248 点)、1990 年代(225 点)、2000 年代(232 点)と出版が大きく増加し、かつ出版規模が継続していることが分かり、満洲問題への関心が中国残留孤児の帰国などで高まり、研究や出版が活発化したことが予想される。

次にワードクラウドと呼ばれる語彙の出現頻度を調べる A I 分析ツールで崎山文庫の書誌情報の分析してみる。中心部にある水色の名詞から、「満洲」「中国」「昭和史」などの語彙が多く使われ⁹、⑤「日本近現代史の戦争、戦地等に関する参考図書」が多く含まれていることが分かる。また、赤色の動詞に「生きる」「伝える」「語る」などの語彙が見られ、②「敗戦後旧「満洲」在住者が当時を語り或は現地を再訪問した記録、旅行記」が一定数含まれることも確認できる。さらに、緑色の形容詞の語彙に「はるかな」「悲惨な」「壮絶な」などが見られ、①「引揚者の証言を集めた書籍」も多数存在することが分かる。また、単語数で見る(右表)と「満洲」「写真」「満鉄」といった語彙が頻出し、満洲書籍が多くを占め、写真集や満鉄関連書籍が一定数存在する。

このように数量化によって崎山文庫の全体像がより視覚的に見えてきており、より詳細な分析を進めてみたい。文庫は一般にも公開されていることから、2024 年 7 月には 6 回の集いの関連企画として 15 人ほどが参加して文庫の見学会が実施されるなど、今後満洲の歴史に関する勉強や研究に大いに活用されることが期待されるところである。

4、満洲移民資料の「記録」と「普及」

上記のように崎山氏を中心とした活動によって、満洲移民資料は「記録」から「普及」の段階に進み、活用・継承の地盤が整いつつある。さらに、高知の会では約 70 人の満州帰国者の証言の資料化も進めている。これらの活動主体は、崎山氏から帰国者の子世代や大学生らに移行しており、彼らが資料を利用していかに周辺や次世代に伝えていくかが課題となっている。高知の会としても、崎山氏ら帰国者の思いも受け止めながら、資料の解説や動画化、教材化といった普及の活動を進めていきたい。

⁹ 崎山文庫には、先の 1880・90 年代の書籍を含め、崎山氏は集めた覚えがない書籍も含まれている。文庫には、東洋史の研究者である吉尾氏の中国史に関する蔵書が一定数含まれており、一括資料群としての評価は考え直さないといけない。

単語	冊
満州	160
中国	110
満洲	106
写真	50
高知	35
満鉄	34
支那	27
引揚	18
残留	15
満蒙	13
関東軍	12
大連	12
新京	11
開拓	11
まぼろし	7
ソ連	5

第6回集いの感想

校正・編集 小野由美子・楠瀬慶太

☆【細谷報告】細部にわたる実際の資料をふまえたお話が体系的に聞けて勉強になりました。

【楠瀬報告】県内での取り組みの経緯などがよく分かりました。きちんとこういうことがなされていて素晴らしいし、今後とも頑張っていただきたいし、応援していきたい。

70代男性

☆【細谷報告】これまでの研究成果を、資料、データをまじえて説明頂きわかり易かったです。

特に、「地域社会における引揚者の位置付け」の視点については、これまで考えたことのない視点でのまとめ方でもっとより深く知りたかった。

40代男性

☆【細谷報告】大変分かりやすいご講義でした。分村移民の事も当時の記録からご説明頂きよく理解できました。母村と分村の関係性もよく分かりました。

【楠瀬報告】崎山ひろみさんの偉大さに改めて尊敬の念を深くしました。崎山さんの活動を詳しく分析されていて大変よく分かりました。

70代女性

☆私は昭和25年長春市生まれ。父は満鉄勤務後、戦後中国政府に留用となり、中国共産党軍と国民党軍の内戦に巻き込まれ、長春で餓死寸前に追い込まれたと聞く。昭和28年3月に中国甘肃省天水から高知に引揚げて来た時、私は3歳。本日のテーマの満洲開拓団と私の家族の関わりは無いが、私と母の生れたルーツ満洲は、いつも心の片隅にある。29日の崎山文庫見学会は参加出来ないが、機会があれば今後見学したいと思います。

80代男性

☆初めての参加でした。2001年頃、高知大の移民に関する研究会で、満洲生活経験があると思われる教員が満洲への移住は「移民と言つていいのか」と言われたことを思い出しました。

70代女性

☆【細谷報告】とてもわかりやすいお話でした。いただいた資料をじっくり読ませていただきます。立命館大の国際平和ミュージアムもぜひ行ってみたいです。

【楠瀬報告】高知の「語り継ぎ活動」の歴史と現況がよくわかりました。高知から長い間離れて、再び帰省し、高知に定住するようになったもので初めて知ることが多くて、今

は参加して良かったです。ありがとうございました。

70代女性

☆【細谷報告】戦前の満蒙開拓についてはいろいろと本もあって読んだりもしましたが、戦後その人たちがどうなったのかについては知りませんでした。大変勉強になりました。

【楠瀬報告】高知県における平和博物館設置の流れなど、わかりやすい説明でした。

70代男性

☆【細谷報告】聞きやすいお話の仕方で、ずっとお聞きしたいと思いました。質問に対してのお応えもとても心にしました。先生の講義を受けられる生徒さんがうらやましい限りです。

70代女性

☆【楠瀬報告】時間、時代経過や因果関係が分かりやすかった。

60代男性

第2部 戦争とトラウマ

【講演録】戦争とトラウマ—日本軍兵士とその家族の事例—

中村 江里

(上智大学文学部史学科准教授)

導入

皆さまどうもはじめまして。中村と申します。高いところから失礼いたします。本日はこのような貴重な場にお招きいただきまして大変光栄であります。どうぞよろしくお願ひいたします。今日は戦争とトラウマと題しまして、これまで研究してきた「日本軍兵士とその家族への影響」を中心にお話します。もちろん戦争で傷つくのは、兵士だけではありません。皆様の活動で取り組まれている満州や朝鮮半島からの引き揚げの方々であるとか、空襲、原爆、沖縄戦の住民の方々の被害というのもたくさんございます。それから日本だけではなくて、国外ですね。日本がかつて侵略した国にも、そうした心の傷というのはたくさん起こっているというふうに思います。

今日は私が研究している兵士のことを中心にお話ししますけれども、それを聞いていただいて、皆様の取り組みとも重なるところもあるのではないかと思います。また質疑の時などにいろいろと感想をお寄せいただければと思います。

私は『戦争のトラウマ』という本を2018年に出版をしたのですが、こちらは私の博士論文をまとめたものになります。こうした問題には2005年に修士へ入ってからずっと取り組んでいるので、もう20年近く経ってしまったのですが、まだまだ明らかにされていないことが残っています。今度は子ども世代への影響ということを考えているので、まだまだ時間がかかりそうな研究だと思っております。

今日は後半の方で少しご家族の方へのインタビューの内容をご紹介します。その中で、戦場であるとか家族における暴力についての描写が少し含まれますので、ちょっと聞いてつらいなというふうに感じる方がいらっしゃいましたら、どうぞ遠慮なく休憩などをとっていただければと思います。こちらのインタビューは、対象者の方の同意を得た上で行っております。プライバシーに関わることですので、氏名は基本的には匿名という形にして、本名で活動している方は本名で表記しております。

1、はじめに

それでは早速始めさせていただきます。まず用語の確認をしておきたいと思います。今日のテーマになっておりますトラウマという言葉です。こちらは割と最近は知られるようになってきたかと思うんですけども、もともとは心理学とか精神医学などで専門的に使われてきた言葉です。戦争や、それから日本は自然災害が非常に多いですけれども地震であるとか。あとは虐待や性暴力など、心が耐えられないような衝撃的な体験というのをした場合に、人間の心への影響があるということです。それを体験した時だけではなくて、その後長期にわたって恐怖とか不快感をもたらすことがあるんだということが現在では理解されております。このトラウマ体験をしたときに様々な反応があり、代表的なものが

PTSD（心的外傷後ストレス症）です。その他にも抑鬱反応とかアルコールへの依存、それから自傷行為とか自殺企図など、様々な反応というのがあります。

ただ、トラウマ体験をした人全てが PTSDなどを発症するわけではなく、トラウマを抱えながら、生活を営んでいるという方々ももちろんいらっしゃいます。私自身は歴史家で、医者ではありませんので、こうした PTSD のことについて医学的なことをお話しすることはできません。ただ、この PTSD の発症や回復について、トラウマ体験そのものの衝撃の大きさとか、どれくらいの期間そうした体験にさらされていたのか、そうしたことでももちろん大事なんですけれども、そうしたことを体験した後のことですね。社会の側の支援や理解というものがどれくらいあるのかということも、傷ついた人々の回復に影響しているということですね。このあたりのことが私の研究に関わってくるのですが、戦中戦後の日本の社会の状況ということが問題になるわけです。

2つの時間

このトラウマについて理解するときによく言われるのは、トラウマ体験をした人たちは2つの時計があるということです。1つが現在その人が生きている時間で、これは誰もが持っている時間です。もう1つが、時間が経っても色褪せず、その時の光景であるとか、その時感じたことというのがたかも瞬間冷凍をされたかのように保存されていて、非常に生々しい形で何回も蘇るというような、そういうような時間ですね。

このことについて、ベトナム帰還兵のアレン・ネルソンさん、有名な方なのでご存じの方も多いと思いますが。ネルソンさんが回想録に書かれていることが非常に分かりやすいと思います。彼は日常生活の中で大きな音が鳴ると、途端にベトナムのジャングルに引き戻されてしまうと。日常の中にいるのに、まるで現実と戦場の間を行き来しているという、わけも分からぬ体験。しかもそれがいつやってくるか分からない。なんでそうなるのかも分からぬので、底が見えないような恐怖感があると書かれています。

それからもう一つは、このトラウマの特徴の一つとして、非常に語りにくいという問題があります。「言語を絶するような暴力」というのは日本語でも言われますけれども。周囲から理解されないという孤立無援感というんでしょうか、そうした問題があると思います。ホロコーストを生き延びたプリーモ・レーヴィという作家がいますけれども、彼が書いた文章にこの孤立無援感が非常によく表れています。彼は毎日毎日同じような夢を見ると。みんなが仲良くワイワイ団欒している中で、自分が一生懸命何かを話しているのに、誰も話を聞いてくれない。その中で、非常に寂しい、悲しい気持ちが繰り返されるということを書いています。これは彼が感じていた孤独感というか、こうしたものをお非常によく表していると思います。

トラウマの研究史

トラウマは日本語で心の傷と言われたりしますが、もともとは体の傷という意味の言葉

でした。それが心の傷という意味が付与されて、しかも医学の対象になったというのは、実は歴史上は結構新しいことでして、19世紀末以降のことになります。つまり近代以降ですね。いろんな科学技術が発展する中で、非常に大規模な鉄道事故であるとか、それから戦争も、大量殺戮兵器によって恐怖の質や量というものが変わっていくんですね。当時、そうした中で原因不明の身体の不調を訴える人たちがたくさん出てきました。そしてこれは心の問題ではないかということで、当時新興科学だった心理学や精神医学など、こうした新しい科学、精神の科学がトラウマを議論するようになったというのが、19世紀末からのことになります。

PTSDも非常に戦争と密接な関係がありまして、ベトナム帰還兵の精神的後遺症というのが社会問題化する中で、1980年に診断名として出てきたものです。つまり結構新しい理論なのです。特にヨーロッパの場合には第一次世界大戦が非常に大きな影響を与えていましたが、ベトナム戦争後にPTSDという診断概念が成立して以降、第一次世界大戦を中心に、戦争とトラウマの歴史研究が発展してきました。

日本の場合には、ちょっとタイムラグがありまして、トラウマやPTSDが広く知られるようになったのは、1995年の阪神・淡路大震災の頃になります。それ以降、アジア・太平洋戦争をトラウマの観点から捉えるという研究が進展してきました。具体的な研究はレジュメをご覧ください。1995年というのはちょうど戦後50周年にもあたり、特に当時は日本軍「慰安婦」問題などの戦後補償に関わる裁判の中で、PTSDが非常に早い時期から注目されるようになりました。

引き揚げ体験によるトラウマ

それ以外の被害についてもいろいろと研究が出てきていますが、旧満洲や朝鮮半島からの引き揚げ体験によるトラウマということについては、研究としてはまだほとんど論じられていないのではないかと感じております。

こちらのレジュメに書いていますが、「日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際的シンポジウム」というプロジェクトに2021年から取り組んでおりまして。精神医学や心理学、トラウマの研究者と一緒に、メディア関係者にも関わっていただいて、毎年オンラインで学際的なシンポジウムを開催しています。この中でも、何人かの方に満洲に関わるお話ををしていただきました。2021年にはルポライターの杉山春さんにお話しいただき、いわゆる大陸の花嫁といいますか、満洲に渡った女性たちですね、引き揚げの時に味わった様々なこと。性暴力も含めてそうしたことをお話しいただきました。2023年には、胡桃澤伸さんくるみさわしん、精神科医でそれから劇作家でもある方なんですけども、皆様の中でもご存知の方がが多いと思います。胡桃澤さんのおじいさまである胡桃澤盛さんは、長野県の河野村もりというところの村長さんでした。戦時中満洲に送り出した村民が、敗戦後に集団で「自決」されると、それに責任を感じて、翌年自死をされるという、こうした家族の中にトラウマというのを抱えておられます。しかもそのことをずっと長年知らなかつたと

いう、そのこと自体が傷になっていると思いますけれども、そういうようなこともお話しいただきました。

そうした形で、いろいろ断片的に書かれたり、いろいろな回想録の中でトラウマという言葉は使っていないかもしれないけれども、そうしたことはおそらくいろいろなことが記録されてきたと思います。しかし、研究としてはまだまだ進んでいないのではないかというふうに感じておりますので、今日皆様のお話からいろいろと学ばせていただくのを非常に楽しみにしております。

2、日本兵のトラウマを取り巻く「沈黙」の構造

ここからは、前半の方で、日本兵のトラウマというものがなぜ長年見えないものになっていたのか、「沈黙の構造」ということについてお話をします。また、この会の活動には第2世代・第3世代の方も関わっていらっしゃるという風に伺っておりますので、後半では「家族による戦争証言」ということについてお話ししたいと思います。

それではまず、日本兵のトラウマを取り巻く沈黙の構造についてお話をします。戦後の社会では、兵士だけではないですが、戦争のトラウマ記憶というのが長く忘却されてきました。先ほど言いましたように、1995年にトラウマや PTSDという概念が広く知られるようになりました。同じ年にヴァン・デア・コルクというオランダ出身の精神科医が日本に来て、日本の精神科医が、トラウマについて非常に理解が浅いということで驚くわけですね。日本は戦争を戦って、多くのトラウマがあるのにもかかわらず、そうしたものを感じていたのではないか、回避していたのではないか、という指摘をしています。

(1) 公的な領域におけるトラウマの抑圧／否認と、当事者たちの恥と沈黙

私自身は、なぜ日本では、個人レベルでは戦争のトラウマの記憶というのがあるはずなのに、それが集合的記憶として共有されていないのかということにずっと問題関心を持って研究してきました。

大きく分けて、二つほど理由を挙げられるかと思います。一つは、戦中も戦後もそうなんですが、公的な領域においてトラウマが抑圧ないし否認されてきたということです。それによって、当事者たちが非常に強い恥の意識を持つことになり、沈黙してきたということがあると思います。ここからは、戦中と戦後に分けてお話ししたいと思います。

不可視化されてきた戦争のトラウマ〈戦前〉

まず戦時中ですけれども、第一に国家や軍が、兵士たちのトラウマやそれによる精神疾患というものを否定していたということですね。それから精神医学の解釈というのも、現在のような PTSDという診断名はもちろんありませんので、そうした考え方とは全く違う対応の仕方というのがされていました。そして、銃後社会や家族からも疎外されていました。そして、精神疾患になった兵士自身が自分自身を否定してしまうという構造がありました。

戦争神経症とは

先ほどちらっと出てきた戦争神経症ですが、あまり聞いたことがない用語だと思いますので、簡単にご説明しておきます。戦争神経症というのは、体に目立った傷がないのに、手足の震えや麻痺、痙攣などの症状を示す兵士たちが、第一次世界大戦では次々と出現しました。いくら検査をしても傷が発見できないということで、これは心の問題ではないかということが、各国の軍隊で注目されるようになりました。

有名なのは、第一次世界大戦の時の「シェルショック」です。こちらは「映像の世紀」などでご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。実は日本兵の中でも、全く同じような症状を示す兵士たちが、日中戦争以降撮影された映像によって分かっています。

戦時下的精神医療

日中戦争以降、こうした兵士たちが増えるだろうということが予想されましたので、陸軍は千葉県の市川市にあった国府台^{こうのだい}軍病院というところを中心に、こうした兵士たちの治療を行うようになりました。戦時中は約1万人の方が入院しています。戦争が終わった時に、他の多くの公文書と同じように、陸軍病院のカルテについても焼却せよという軍の命令が出ました。しかし、やはりお医者さんにとってカルテというのはすごく大事な記録なので、国府台陸軍病院も含めて、多くの軍医たちがそれを隠して保存しました。そのような経緯で、国府台のカルテはかろうじて残された大変貴重な記録です。

戦争が長期化した1940年には、戦争で精神障害をおった傷痍軍人のための長期療養の施設が必要だということで、東京の小平市に傷痍軍人武藏療養所というところができます。ここに終戦までに約950名の方が入所していました。その他にも、全国に多数あった陸軍病院であるとか、民間の精神病院、自宅で療養するというケースが、私の調査の中で確認されております。

こうした兵士たちが、戦争が長期化、拡大する中で増大したということは、ご理解いただけるかと思います。日本軍の特徴として、敵からの攻撃の恐怖だけではなくて、軍隊の中での暴力、「私的制裁」と呼ばれるものですね、そうしたもののが深く関わっているということがあります。それから、戦争が長期化して兵士が足りなくなる中で、日本軍は徴兵検査の選定基準を下げるんですね。それによって本来であれば不合格になるような人たちが、大量に入隊していたということです。

一番典型的なのは、知的障害のある兵士ですね。本来は兵役の免除になるはずなのですが、軍務に支障がなければ入れてもいいということで入れるようになります。しかし、やはり集団生活に適応できなくなる人たちがたくさん出てくるんですね。こうした人々は私的制裁のターゲットにもなりやすかったようです。こうした軍隊内部での暴力のトラウマによって精神疾患になる人たちもたくさんいました。

精神神経疾患患者の発生・移送実態

先ほど国府台陸軍病院に入院した人が約 1 万人と言いましたけれども、実はそうした人々というのは本当に氷山の一角なのです。先ほど言いました資料の焼却の問題で、軍の体系的なデータというのは残っていません。断片的なデータですが、1942 年から 45 年の戦病者に関するデータの中で、「精神病」と「その他の神経病」というのがどれくらい発症していたのかということが、満洲、中国、南方という各エリアごとに数字が出ています。それを見ると、この 42 年から 45 年の間だけでも数十万単位の患者が出ていたことがわかります。戦地で発症していた人の内、内地に送り返されて入院して治療を受けた人たちは 1 万 5 千人くらいしかいないということで、本当に氷山の一角だったということです。ですから、国府台陸軍病院に入院して、カルテという記録が残されているのは、本当に例外的なケースといっていいかと思います。

「皇軍の精神的卓越」の強調

このように治療体系を整備する一方で、日本軍はこうした兵士たちの存在というのを公には否定していました。こちらは戦時中の新聞記事です。左の方は 1939 年 4 月 5 日の読売新聞ですが、「大戦名物の砲弾病、皇軍には皆無」という見出しが出ています。この大戦というのは、この場合は第一次世界大戦ということで、砲弾病というのは先ほど言いましたシェルショックのことです。ヨーロッパにたくさん出ていたようなシェルショックというのは、皇軍つまり天皇の軍隊のような世界最強の軍隊には全くいないんだという非常に勇ましいことを言っています。ただこの記事に写真が出ている早尾庸雄という人は、陸軍の依頼で戦場に行って、戦場の心理的な障害のレポートというのをまとめていたり、自身も国府台陸軍病院で勤務していたということがあるので、兵士たちの精神疾患については知っているはずなのですが、こうした公的な場ではそうしたことを否定することを言っていました。

右側の方は 1943 年の読売新聞の記事ですけれども、この記事のタイトルには「ガ島の米兵ほとんど神経衰弱」というふうに書かれています。神経衰弱というのは、今ではトランプのゲームぐらいしか思い浮かばないかもしれませんけれども、当時は割とメジャーだった精神疾患の名称です。ガ島というのはガダルカナル島ですね。餓死が多かったので、「餓島」と戦後には書かれました。そのガダルカナル島で戦っているアメリカ兵はほとんど精神疾患なんだというふうに言って、敵の弱さを強調するためにこうした精神疾患が利用されるという、プロパガンダの一環として利用されていました。

「欲望」の病理という医学解釈

当時の精神科医たちは、現在の PTSD とは全く異なる考え方を持っていました。PTSD の場合には、患者の外の環境というか、いかに過酷な体験をしたのかということに注目するのですが、当時の医学では、どちらかというと患者の側に問題があるという考えでした。

もともと弱い人であるとか、性格に問題があるとか、あとは軍隊にとっては望ましくない願望ですね、病気になることで兵役を免除されたりとか、恩給が欲しいとか、そういう願望があるからこういう病気になるんだという、そういう解釈を行っていました。こうした解釈は日本軍のオリジナルというわけではなくて、第一次世界大戦の時にも割とよく見られた考えです。特に日本がお手本にしていたのはドイツの精神医学ですが、ドイツの精神医学にもこうした主張が見られました。

精神疾患兵士たちの強い恥の意識

このように国からも否定され、医学からも患者に問題があるというふうに言われて、患者自身は非常に自分自身が恥ずかしいという、そういう意識を強く持つようになります。それから家族も非常に恥ずかしいという考え方を持つようになりました。当時家族から病院に宛てた手紙というのを分析してみると、「うちの息子が第一線で御奉公できず、お国のご厄介になって申し訳ありません」というお詫びの文章が必ずテンプレートのように入っています。それから患者自身の言葉もカルテに記録されていますけれども、「病気が治ったら第一線に復帰させてください」というふうに軍医に懇願する患者たちも少なくありませんでした。やはりこうした患者たちは、心を病んで戦地から戻ってきたということで、家族や地域社会から排除されてしまうのではないかという非常に強い疎外感というのを持っていたと考えられます。

「死に損なった」ことに対する恥の意識

それから日本軍の特徴として、国家のために勇ましく戦死するということが称揚されていましたので、生き残るということに対して非常に強い恥の意識があるんですね。ちょっと強い言葉ですが「死に損なった」というような感覚というのが非常に強くありました。こうした生き残ったということに対しての罪悪感というのは、トラウマを抱えた人に多く見られるというふうに言われておりますし、兵士だけではなくておそらく民間の戦争被害者の方もそうでしたでしょうし、地震なんかでもそうしたことがみられるというふうに言われています。ただ兵士の場合には、今言ったように、こうした日本軍の規範というか、軍人勅諭や戦陣訓が象徴するように、兵士の人権や生命というのが軽視される。そうした中で、生き残ったということに対しての恥の意識というのが、非常に強かったのではないかなどというふうに思っています。

戦争神経症の例

こうした戦争神経症の事例を一人紹介します。この患者さんは、中隊がほぼ全滅する中で何とか命からがら帰ってきたのですが、中隊長に「何で死んでこなかつたのか」と言われたと。それによって死にたいような気持ちになったという事例ですね。こうした中で、患者自身が自分は「国賊」というふうに言っているという表現がカルテの中にたびたび見

られます。

精神疾患兵士たちの強い恥の意識

「こんな身で戦地から帰ってきて全く恥ずかしい」「こんなことならば途中で海に身を投げて死ねばよかった」「村の人には申し訳ないから、面会には絶対に来ないようにしてください」。こうした患者の言葉も残されています。ですので、戦時下の日本社会というのは、当事者が心理的、社会的に安全な環境で、自身のトラウマ体験ということについて語るということが非常に困難な状況だったと考えます。

不可視化されてきた戦争のトラウマ（戦後）

続きまして戦後の状況についてお話をします。戦後の医療・福祉の状況というのも、ある意味では戦時中以上に非常に非常にサポートが不足しているという状態でした。それから医学の研究というのも、戦争が終わった 1945 年から、PTSD という概念が広がる 1995 年までのおよそ 50 年の間に、こういう戦争のトラウマという問題が取り上げられることはほとんどありませんでした。それから、戦争で心を病んで戦後社会に適応できない兵士たちというのは実際に存在していたのですけれども、そういう人々はコミュニティや家族からも疎外をされていました。

それから様々な兵士たちの回想録などを読むと、PTSD にはおそらく知らないし、仕事もしているのですが、生き残ったことへの後ろめたさというのは非常に多くの人たちが持っていたと思います。そうしたことから自分自身の傷ということについて語れない。「自分は生き残っただけまだましだ」という感覚というのがおそらくあったと思います。

家族と地域から切り離された「未復員」たち

戦争で心に傷を負った兵士たちの問題というのは、「未復員」という言葉で割と早い時期から知られていました。「未復員」というのは、戦争が終わって家族のもとに帰れるはずなのに帰れなかつた人たちということです。TBS のプロデューサーだった吉永春子さんという方が、1970 年代から 80 年代に「さすらいの未復員」という番組を作られたんですけども。これご覧になったことがある方いらっしゃいますか。当時は結構話題になったみたいなんですけども。毎回いろんな講演で聞いてみると、全然手を挙げる方がいらっしゃらなくて、ちょっとどこまで知られているのか分からぬのですが。割と早い時期に問題提起したのがこの番組ですね。本もあります。他にも、何人かジャーナリストの方がこうした問題を取り上げてきました。

家族の中の空白の歴史

それから、こうした医療福祉の制度の対象外だったということに加えて、家族の中できえ、戦争で心に傷を負った復員兵の存在というのは触れてはならない存在というか、いな

いはずの存在になっていたということが関係していると思います。

この方は私がインタビューをした方で、お孫さん世代なんですが、おじい様が1942年に召集され、44年にポナペ島に出征され、戦時中精神疾患になって東京の精神科病院に入院します。で、自宅に戻ったんですね。10年間、私宅監置といって、自宅の一角に閉じ込められるという、そうした状況にありました。その後ですね、亡くなるまで精神科病院に入院していたということです。Aさんのお母様とおば様は、この自宅のすぐ近くの小学校に通っていたので、おじい様が閉じ込められている中で暴れて叫ぶというのが学校まで聞こえるんですね。ですので、みんな学校の人たちは知っていて、当時の言葉ですが「キチガイの子だ」というふうに言われていじめを受けていたということだそうです。そうしたこともあるって、お母様はずっとおじい様の病気について隠していて、「おじいさんは足を怪我して入院していたんだ」というふうに話していたということで、もう亡くなるまでずっと隠していたそうです。ですので、Aさんはおば様からこの話を聞いて初めて知ったということをおっしゃっていました。

沖縄北部に残る監置小屋の遺構

この私宅監置は、日本の本土では1950年に精神衛生法というのができると合法化されるのですが、占領下の沖縄ではずっと残っていました。ですので、沖縄にはまだこの監置小屋の遺構というのが結構残っているところがあります。

家族の中の空白の歴史

あとこれは2020年くらいだと思いますが、クローズアップ現代でもこの日本兵のトラウマのことが取り上げられました。その取材の中でもですね、戦争で心を病んだおじさんの写真が全くないと。「撮るに値しないみたいな扱いを受けていたのかもしれないな」という、ご遺族の言葉が紹介されました。

(2) 加害と被害が混在する複雑な戦争体験

ここまで戦中戦後の状況について、少し駆け足でご紹介してきました。それからもう一つ大きな問題として、これは特に兵士に特徴的な問題だと思いますけれども、彼らの戦争体験というのは加害と被害というのが入り混じっているという非常に複雑な戦争体験なんですね。トラウマの中でも、語りにくいトラウマというのがいくつかあって、共犯性とか加害者性というものは、特に語りにくいというふうに言われています。加害証言そのものを抑圧する構造というのが、戦時中から戦後にかけてもちろんありましたが、それによって彼らの心がどういう影響を受けたのかというのは、本当にほとんど語られていないというふうに思います。

このトラウマということを考えたときに、彼らのトラウマというものが公的な記憶として共有されるときには、それが受容されるような、受け入れられるような公的な語りとい

うのが必要になるわけです。しかし、戦後日本ではそれが全く欠如していたのではないか。日本の戦争の場合には侵略戦争であり、かつ敗戦になった。もし戦争に勝っていれば、それまでと同様に英雄として扱うということになったかもしれません。しかし負けてかつ侵略戦争だということで、彼らの戦争体験というのが、社会全体で共有できる、語るというのが非常に難しい問題があります。社会学者の橋本明子さんが指摘されているように、日本の戦後の戦争記憶というのは、英雄の語りと被害者の語りと加害者の物語に分裂しているわけですが、いずれも彼らのきわめて複雑な戦争体験を捉えるには不十分なわけですね。ですので、トラウマ体験も含めて元兵士たちが語れる場というのはあまりなかったのではないかと考えます。

そうなってくると、戦争を語ることそのものがタブー化されるという問題が出てきます。加害と被害を含めて戦争体験を振り返るということが、当事者や家族だけではなくて、社会全体でも困難になってしまいます。個人個人の問題だけではなくて、日本社会全体の問題にもつながっているのだろうと思います。

3、戦争証言と家族

当事者による戦争証言の難しさ

それでは、続いて戦争証言と家族についてお話ししたいと思います。最初にお話ししました通り、このトラウマティックな体験というのは非常に語りにくいということで、当事者による戦争証言の難しさということがあると思います。近年、戦争体験者世代の減少ということが注目されていますけれども、その中でもトラウマティックな体験は語りにくいという問題もあわせて考える必要があるかと思います。こうした問題があるので、私自身は、お医者さんであるとか、ご家族とか、周囲にいた方々にインタビューを行っています。

医療の対象とならなかつたトラウマ

先ほど言いました通り、戦時中は数十万人単位の精神神経疾患者が発生しておりましたが、内地に搬送されて国府台陸軍病院で治療を受けたのはおよそ1万人余りでした。戦後になると、戦傷病者特別援護法ということができて、それによって先ほどの未復員の方たちは治療を受けていたんですが、そういう人たちも1970年から85年ぐらいの最も人数が多かった時期でさえ、1000人ぐらいですね。

こうした公式の統計に数値化されて、医療福祉の対象になり、記録が残された人というのは、本当にもうごくわずかであったと思います。戦後の日本では、復員軍人のメンタルヘルスに関する包括的な疫学調査というのは行われませんでした。医療記録というこというと、先ほどの国府台陸軍病院の記録というのは確かに貴重な記録なんですが、戦争末期になってくると、戦地から内地にほとんど患者を送ることができないんですね。日本軍というのは、本当に最後の1年間、民間人の人もそうですけど、最後の1年間に多くの犠牲が出ているんですね。しかも、その死に方というのは、ご存知の通り非常に悲惨な死に

方をしているわけです。それを目撃した人たちも多数で、そういう人たちが生き延びて帰ってきて、精神的な影響というのもおそらくあったと思うんですけども。こうした「絶望的抗戦期」といわれる最後の1年間を生き延びた人々の医療記録というのは、国府台陸軍病院にはほとんど入っていないわけですね。こうした問題というのがあると思います。

医学の研究に関しても、戦後日本では約50年間ほとんど行われていませんでした。しかしこうした専門家の医学的なトラウマについての解釈というのが存在しなかったからといって、精神的に傷ついた人がいなかったということではもちろんありません。ですので、こうした精神医学的なトラウマの定義・解釈と、実際のトラウマを受けた人々の経験とは、現実にはずれがあるということですね。これがとても重要だと思います。ですので、専門家ではない一般の人たちの間で、独特の言葉というのが生まれています。よく使われていたのは、おそらく「〇〇ボケ」という言い方ですね。皆さんの中でも聞いたことがある方も多いと思いますが、「戦争ボケ」とか「南方ボケ」とか。そういう言葉で、戦地から帰ってきて、何かちょっと社会に馴染めない行動をする人たちのことを表現していたかと思います。

家族の証言の重要性

こうした中で、ご家族の証言というのが非常に重要なと思っています。近年、特に子ども世代の人々を中心とした活動というのが活発に行われているので紹介します。この「PTSDの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」という、今ちょっと名称が変わっているんですけど、こうした会というのを東京の黒井秋夫さんという方が立ち上げられて、証言集会とかも行われたりしてですね。メディアにもたびたび取り上げられたりしているのでご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。このご家族というのは、やはり兵役期間とか戦争とかそういう限られた期間だけではなくて、ずっと長期にわたって関係が続くので、こうした視点から見るということは非常に重要なと思っています。

語り始めた元兵士の子どもたち

こちらは黒井さんのお父様の写真です。戦争に行く時には、非常にはつらつとしたはつらつとした表情のお写真が残っていて、アルバムにも、大志に燃える勇ましい言葉が書いてあります。しかし、戦後帰って来て本当にもう抜け殻のようになってしまって、一切動けず無気力になっていたというふうに伺っております。下の方は、戦後のホームビデオで映されたお父様の姿で、ちょっと悲しげなですね、お顔が印象的ですけれども。本当にいろいろ黒井さんが一生懸命話しかけるんですけど、全然応じられていないという様子が映されています。

戦後家族の中に封じ込められてきたトラウマ

多くの復員兵は、自らの戦争体験について沈黙をしてきたと言えます。しかし、トラウ

マ記憶というのは、さまざまな形で家族にも影響を与えていたというふうに考えています。

復員軍人の子ども・孫世代へのインタビュー調査

私は今まで、2018年から現在まで39の方にインタビューを行ってきました。半数近くが娘さんに当たる方ですね。30%ぐらいが息子さんという感じで、あとはお孫さんとか、甥・姪とかそういう方ですね。インタビューの対象者としては、だいたい60代から80代ぐらいの方になります。

復員軍人の抱える心身の不調や社会的困難

多くの方の語りの中によく出てくるのが、戦争でその人のお父さんなりおじいさんなりの人格が変わってしまったという言い方です。私がお話を伺っている方は子ども世代なので、生まれてすぐだったりとか、生まれる前のことはもちろんわからないので、お父様の戦争前後の変化について、全然ご本人は知らないわけですが。お母様とか親戚からそういう話を聞いたという形で、教えていただいている。それから悪夢を見たという話、悪夢にうなされていたという話もよく聞きます。

それからフラッシュバックですね。この方はお父様がガダルカナル戦の生き残りで、衛生兵だったことで麻酔なしで銃弾を取ったりとか、そういった悲惨な光景をたくさん見ていましたね。ですので、家族で和やかにお話ししている時に突然そのことを思い出して、兵士の戦友の叫び声が聞こえると突然言ったりとかして。それでもう場がですね、しらけてしまうという、まさに冒頭のプリーモ・レーヴィの言葉にあるように、一切誰も聞いてくれないという、そういう状況というのが繰り返されているということを教えていただきました。

あと非常に怒りやすくなつたという、 such as した話もよく出でます。このDさんのお父さんは海軍の軍医で、ミッドウェー海戦の生き残りだった人です。そのミッドウェー海戦から帰ってきた後かなり変になって、イライラして、ちょっとしたことでも怒鳴ったりとか、子どもが騒ぐと「うるさい」と日本刀を抜いたということです。この方のように、日本刀とか武器を常に持っているという話もよく聞きます。これは兵士ならではの特徴かなと思います。

それから生存者罪悪感ですね、生き残ったことの罪悪感ということですけども。このEさんのお父さんは、小さい時に養子に出されていて、養父がお坊さんなんですね。そのお坊さんの実の子どもというか、その子たちは南方に行って全員亡くなつてしまつた。このEさんのお父さんだけが生き残つて帰つてきたので、「私の子どもは全部亡くなつたのに、お前がなんで帰つてきたのか」という風になじられて辛かったと。

それからこのFさんですね。Fさんのお父さんは戦友が負傷をして、遺骨を持っててくれという風に頼まれたんだけども、それができなかつたということで。それがかなり心の傷になつていたということです。「戦友」という軍歌、これをよく歌つていたという話を

されて。「戦友」の話は結構色々な方の話で出てくるのですが、結構物悲しい響きというか、そういった歌をよく歌っていたそうです。

それからアルコールに依存していたという話も非常によく出てきます。アルコールというのは、復員兵に対するメンタルケアというのが不足している中で、一種の自己治療、セルフメディケーションといいますけれども、そういうものになっていました。自分で自分を癒すという、その中の一種として使われているということが、現在でもトラウマの臨床に関わる人の中で言われたりしています。兵士の場合も、実は戦時中からそういうことが行われていたのではないかということが、いくつかの戦時中の研究から浮かび上がってきます。戦時に酒の味を覚えて、それが戦後にもつながっているのではないかということですね。これはもう少し今後調べたいなと思っています。このアルコールと PTSD の関係というものを、何人かのトラウマ研究者が指摘していますけども、アルコールは PTSD の治療ではおそらく最も古い薬物だろうと。短期的には治療効果があるけど、長期的にはリバウンドして、再び症状を悪化させるということが指摘されています。

家族への暴力というのも、たびたび出てきます。こちらは先ほどの F さんの聞き取りです。F さん自身もお父様から暴力を受けていたんですが、お母様もやはり非常に暴力を受けていて。おそらくお母様への暴力が一番酷かったと思うんですが、お母様自身もそれを長年語れなかつたということで、70 過ぎてからようやくその話を話せるようになったということをおっしゃっていました。

満蒙開拓・引き揚げに関わるケース

それから何人か満蒙開拓と引き揚げに関わるのではないかと思われる方もいらっしゃるので、ご紹介します。

この方は、ご両親ともに開拓団に居られた方です。確か山形のご出身だと思いますが、開拓団に入っていて、お父さんの軍歴を取り寄せようとしても記録が残っていないという、そうした非常に問題のあることなのですが。そのためちょっと詳細はわからないのですが、おそらく現地で召集をされた方で、お父さんとしては開拓団に入れば徴兵されないと信じて入ったのに、裏切られたということですね。そうした国に対して非常に強い怒りを持っていたということをお話しされていました。ですので国は信用できないという、そういうことをずっと何度も何度も繰り返していた。それからお母様の方は、お父様はシベリア抑留されてしまってわりとすぐ帰ってきたみたいですが、とにかく引き揚げ時にはお母様は一人で子供を連れて逃げなければいけなかった。その中で 2 人お子さんが餓死しているんですね。シベリア抑留から戻ってきたお父様は、非常にショックを受けてお母様を責めたそうです。そうする中でご両親の仲が非常に引き裂かれてしまったと、そういう話をされてました。お母様の話だと、このお父様は、以前は非常に子煩惱で働き者だった。しかしこうしたことがあって、全く別人格になってしまった。お父様はお仕事はされていたみたいなのですが、自分で稼いだお金は全部自分の趣味につぎ込んでしまって、全く家庭

入れない。だからお母様が代わって働くかなければいけないのですけれども、やっぱり女性が働くというのは今よりももっともっと大変でした。お母様の稼ぎだけではなかなか生活が回らないのですが、本当にお父様は全然家庭にお金を入れないという、そうした状況になってしまったという話をしていただきました。これが満蒙開拓と引き揚げに関わるケースです。

「大義なき戦争」がもたらす傷跡

もう一つ、兵士の特徴としては、加害行為自体が、通常であれば経験しないような衝撃体験ですので、そのことがもたらす傷跡というのもあるのではないかというふうに思っています。これは私もインタビューした元兵士の方、吉田靖さんという方が、以前朝日新聞の「声」欄に投稿されたものですけれども、日本軍の初年兵教育の中では、非常に残酷なトレーニング、生きたままの中国の捕虜の方を木に縛りつけて突き刺すという、こうしたトレーニングを行っていました。吉田さん自身はそれをやらなくてよかったです、刺殺を目撃してしまったことで、体調を崩して入院しなければならなかった。それによって「劣等兵」というふうに烙印を押されたという話をされていました。彼自身はそういった加害行為に関わらずに済んだのですが、この時に実際に刺突をしなければならなかった人に、戦後10年近く経つてから戦友会で会うと、その人自身も夜にうなされたりとか非常に苦しんでいたので、二度とその話はしないでほしいと言われたそうです。

それから私が最近聞き取りをしている女性のお父様が、坂本正直という宮崎出身の画家の方で、輜重兵として戦場にいた時の加害行為について、かなりたくさんの作品を残しています。結構珍しいケースだと思いますが、この坂本正直の作品の展示が、12月の5日から21日まで、京都の立命館大学にある国際平和ミュージアムでありますので、ぜひご参加ください。

戦後家庭に持ち込まれた戦争トラウマの影響

最後に、戦後家族に持ち込まれた戦争のトラウマの影響についてお話しします。これは兵士だけではなくて多くの戦争体験者の方にも重なるところがあるかもしれません、まず一つ目として、公的な医療や福祉のサポートが欠如していると、こうした中でそのケアの負担を誰が担うかというと、やはり家族にしづ寄せがいくという問題があります。それから二つ目として、特に子ども世代、孫世代になると、こうしたトラウマというのを家族が抱えていると、逆境的小児期体験というふうに最近は言われますが、様々な虐待であるとかネグレクトとか、両親のDVを目撃してしまうとか、それによるトラウマですね。子ども世代自身が傷ついている。こうした体験が多くなっていくと、成人してからの様々な心身の不調とか、そういうものにつながっていくということが最近指摘されています。

それから暴力の連鎖の問題ですね。軍隊自体、暴力が連鎖していく組織だと思いますが、兵士たちが入隊すると、初年兵時代に私的制裁で暴力を受ける。自分が今度上の立場にな

ると、下の兵士を殴る蹴るという加害者の立場になる。そして中国とかアジアの人たちに對して加害行為を行い、戦地から戻ってくると今度は妻とか子どもに暴力を向ける。そうすると、妻にあたる人が今度は自分たちの子供に暴力をふるう。そういう形で連鎖していくという、こうしたケースというのを何人かの方から聞いています。暴力は必ず連鎖するというわけではありません。逆にそれを断ち切ったという人の話も聞きましたけれども、どこかで断ち切らないとそういう連鎖が生まれてしまうということですね。それから両親との関係がうまくいかないと、様々なアイデンティティの形成の問題だとか、他者を信頼するということが難しくなるとか、こうした問題も出てきます。

さらに、父親や祖父の加害体験について、倫理的な葛藤が子どもや孫世代で生まれるということがあります。元兵士自身は、自分が行った加害行為に対して、あれは命令だったからしようがないとか、戦争だったからしようがないとか、そういう形で正当化して戦後を生き延びたという人もたくさんいたと思うんですけれども。元兵士自身が、戦時中の加害行為を正当化したり、蓋をしたり、見ないふりをして、戦後をやり過ごしたとしても、それを子どもや孫が受け入れられないという事例を、何人かの方から伺ってきました。このように子ども世代、孫世代にも非常に様々な影響というのがあります。しかもそれがこれまで個人の問題とか、それぞれの家庭の問題というふうに思われていたんですね。非常にそれが恥ずかしいことだから、「言ってはいけないことだ」と思っている。

そういうふうに自分一人で抱え込んできた方々が、同じような体験をしている人がいるんだということを知り、そういう人と出会って、そういうことを語り合う場というのが非常に重要だということです。戦争のトラウマを受けた人々は孤立化しやすいので、こうしたグループというのはとても重要です。ピアサポートグループという、ピアというのは仲間のことですけれども、仲間同士でサポートし合うというグループが非常に重要だと言われています。先ほどご紹介した黒井さんの会もそうだと思いますし、もしかしたらこうした証言集会も、こうした分かち合いが行われることで、「あっ、私だけではなかつたんだ」「うちだけではなかつたんだ」と気づくことがあるのではないかと思っています。

4、おわりに

最後になりますが、近年復員兵の子ども世代、孫世代の人々による証言などによって、個人や家族の恥として閉じ込められていたトラウマというものが目に見える形になり、社会で共有されつつあると思います。復員兵の家族の証言というのは、これまでほとんど解明されてこなかつた、戦争のトラウマの長期的な影響ということを知る上で非常に重要だと思っています。

戦争トラウマの家族への影響というのが様々にあるということは、先ほどお話ししましたが、この問題というのは決して過去だけの話ではありません。80 年前に終つたというわけではなくて、現在進行形の問題なんだということですね。このことを強調しておきた

いと思います。ですので、このトラウマという視点は、戦争の長期的な影響ということを知る上で非常に重要な概念だと思っています。この戦争のトラウマの問題というのは、どうしても心理学とか精神医学とかだと個人の病理という話になってしまうんですけれども、やっぱり個人の病理ということだけではないと思うんですね。これだけたくさんの人と同じような問題が生じているということがわかりつつある今、やっぱり社会全体の問題として考えなければいけないのでないでしょうか。そうして傷ついた個人の回復というのをどのように促進していくのか、あるいは阻害されてしまうのかという、そういう社会のあり方であるとか、それに影響を及ぼす歴史的文化的背景ということに目を向ける必要があると思いますし。日本一国の問題ではもちろんないわけですね、戦争ですから。加害被害の問題、それから世代間の影響といった、そういう関係性の中で理解する必要があるのではないかと思います。



基調講演の様子（2024年11月24日）

戦争とトラウマ —日本軍兵士とその家族の事例から—

中村 江里 (上智大学)

enakamura@sophia.ac.jp

1、はじめに

● 用語の確認

- ・トラウマとは：過去の出来事によって心が耐えられないほどの衝撃を受け、それが同じような恐怖や不快感をもたらし続け、現在まで影響を及ぼし続ける状態（宮地 2013）
- ・代表的なトラウマ反応が PTSD（心的外傷後ストレス障害）¹だが、他にも抑うつ反応やアルコール・薬物依存、自傷行為、身体的不調など様々な反応がある。トラウマ的な経験をした人全てが PTSD になるわけではなく、症状を抱えつつも日常生活をこなしている人もいる。
- ・PTSD の発病やその後の回復には、トラウマ体験の衝撃の大きさや期間、回数に加えて、社会の支援や理解を得られるかどうかも大きく影響する。

● 研究の背景

- ・19世紀末～トラウマに関する医学的議論、1980年アメリカ精神医学会『精神疾患の診断と統計マニュアル第三版』(DSM-III)で心的外傷後ストレス障害(PTSD)の診断名成立

→1970年代後半～西欧諸国を中心として戦争とトラウマの歴史研究

- ・日本では1995年の阪神・淡路大震災をきっかけに、トラウマや PTSD が広く知られるようになる

→その後、アジア・太平洋戦争をトラウマの観点から捉える研究の進展

- ①日本軍「慰安婦」問題（梁 1997; 桑山 1998; 吉池 1998; 在日の慰安婦裁判を支える会 2007; 野田 2009）

- ②精神障がい兵士（浅井 1993; 野田 1998; 清水 2006; 中村 2018）

- ③中国の民間人被害者（聶 2006; 上田 2009; 石井 2013; 松岡 2016）

- ④原爆（中澤 2007; 太田・三根・吉峯 2014; 直野 2015）

- ⑤沖縄戦（北村 2009; 沖縄戦トラウマ研究会 2013; 蟻塚 2014）

- ⑥空襲（田中 2016）

- ⑦連合軍捕虜（中尾 2022）

→旧満洲・朝鮮半島からの引揚げ体験によるトラウマについては、杉山（2023）、胡桃澤（2024）を除けばまだほとんど論じられていない。

¹ 2013年に改訂された米国精神医学会の『精神疾患の分類と診断の手引き(DSM)』第五版では、PTSDの症状は①過覚醒（過度の緊張や警戒が続く）、②再体験（事件の記憶や感覚などが甦る）、③回避（トラウマ体験と関連するものを持続的に避ける）、④否定的認知・気分に分類されている。

2、日本兵のトラウマを取り巻く「沈黙」の構造

・戦後の日本社会では戦争のトラウマ記憶が長らく忘却（ヴァン・デア・コルク 2001）

★なぜ日本では、日本兵のトラウマ記憶が不可視化されてきたのか？

(1) 公的な領域におけるトラウマの抑圧／否認と、当事者たちの恥と沈黙

<戦時中>

- ・国家・軍による否認
- ・精神医学による「願望」の病理化
- ・戦後社会や家族からの疎外
- ・精神疾患兵士自身のセルフ・ステイグマ

<戦後>

- ・公的な医療・福祉からの除外
- ・大規模な暴力に直面した人々に関する医学言説の<空白期>（1945～95）
- ・戦争で心を病み、戦後社会に適応できない元兵士のコミュニティや家族からの疎外
- ・生き残ったことへのうしろめたさ

(2) 加害と被害が混在する複雑な戦争体験

- ・共犯性や加害者性、犯罪性を帯びるものは、語りにくいトラウマの一つ（宮地 2013）
- ・加害証言そのものを抑圧する構造：戦時中の報道統制、戦後は加害証言を行った人々に対する戦友会からの圧力や「反共」バッシングなど（星 2002）
- ・復員兵のトラウマが受容されるような公的言説の欠如（Dale 2021）
→侵略戦争でかつ敗戦に終わったアジア・太平洋戦争の場合、とりわけこうした公的言説の構築は困難。英雄／被害者／加害者の物語に分裂した集合的な戦争記憶（橋本 2017）のいずれも、加害と被害が入り混じった複雑な戦争体験によるトラウマを語るには不十分。
- 戦争を語ることそのものがタブー化され、被害／加害を含めた戦争体験を振り返ることが、当事者や家族だけでなく、社会全体でも困難に（森・港道 2012）

3、戦争証言と家族

● 当事者による戦争証言の難しさ

- ① 戦争体験世代の減少
- ② トラウマティックな体験の語りにくさ
→トラウマをめぐるポジショナリティと発話の力動を示した環状島モデル（宮地 2007）

● 医療の対象とならなかったトラウマ

- ・戦時中は数十万人単位の精神・神経疾患患者が発生していたが、内地に還送され、国府台陸軍病院で治療を受けたのはおよそ1万人余り。戦傷病者特別援護法（1963）に基づき入院・通院した精神疾患患者は、ピーク時の1975～80年でも1000名程度。
⇒統計上補足され、医療・福祉の対象となり、記録が残されたのは氷山の一角。復員軍人

のメンタルヘルスに関する包括的な疫学調査も行われていない²。

- ・大規模な暴力に直面した人間と社会の反応に関する医学言説の＜空白期＞としての戦後日本（1945～95）
- ・精神医学的なトラウマの定義・解釈と、トラウマを受けた人々の経験や現実のズレ（Delaporte 2016; Kivimäki 2022）
- ・「戦争ボケ」（森倉 2021）「呆然トーサン」（桑原 2022）など、医学的に解釈される「疾患（disease）」とは異なる「病い（illness）」の語り

● 家族の証言の重要性

- ・拙著（2018）出版後、読者からの手紙や講演後の感想を通じて、戦争で心を病んだ元兵士とともに生活した家族と出会うように。
- ・2018年に「PTSDの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」を立ち上げた、東京・武蔵村山市の黒井秋夫さんをはじめ、60代～80代になった元兵士の子ども世代が、自身の人生や生きづらさを振り返る中で、父親の戦争体験と向き合い、発信し始めている³。また、北村（2022）・中村平（2022）のような孫世代による「当事者研究」も始まりつつある。
→兵役や戦争という限られた期間だけでなく、当事者との関係が長期にわたって継続する家族の視点から見ることの重要性（中村 2022）

● 戦後家族の中に封じ込められてきたトラウマ

- ・多くの復員兵は自らの戦争体験について沈黙
⇒彼らのトラウマ記憶は、家庭の中で様々な形で表現され、家族にも影響を与えた。
…悪夢、無気力、フラッシュバック、生存者罪悪感、怒りの暴発、家庭の中のピリピリした空気、家族への暴力、繰り返し語られる戦争の話、アルコール・薬物依存など
- ・戦後家庭に持ち込まれた戦争トラウマの影響
①公的な医療・福祉のサポートの欠如→家族のケア負担増大
②逆境的小児期体験（ACEs：Adverse childhood experiences）⁴によるトラウマ

² 1980年代後半に行われた全米ベトナム帰還兵再適応研究（NVVRS The National Vietnam Veterans Readjustment Study）によると、戦地に送られたベトナム帰還兵の PTSD 発病率は、男性 15.2%、女性 8.2%で、特に戦闘が激しかった地域にいた男性の場合は 35.8% に上った。また、生涯有病率は男性が 30.9%、女性が 26.9% とされた。

³ 「語り合う会」代表の黒井秋夫さんの活動については、NHK 総合・目撃！にっぽん「ずっと父が嫌いだった～家族が向き合う戦争の傷痕～」（2021年8月22日放送）など多くの番組で取り上げられている。https://www.youtube.com/watch?v=Iel8ubHb_d0

また、2023年夏には朝日新聞デジタルで「戦争トラウマ 連鎖する心の傷」をテーマに全6回の連載が配信された。<https://www.asahi.com/rensai/list.html?id=1903>

⁴ 逆境的小児期体験に該当するものとしては、心理的・身体的・性的虐待、身体的・精神的・

③暴力の連鎖：次の世代への影響

④アイデンティティ形成や他者との信頼関係構築の困難

⑤父親（祖父）の戦争体験に対する倫理的葛藤

⇒同じ苦しみを抱えてきたにもかかわらず、孤立化し、恥の意識を抱えてきた人々が会える場の重要性（ハーマン 2023）

4、おわりに

・復員兵の家族の証言は、これまでほとんど解明されてこなかった戦争トラウマの長期的影響に関して知る上で、非常に重要。多くの場合、彼ら自身も家族内の暴力や緊張に苦しんでおり、この問題は決して「過去」の問題ではなく、「現在進行形」の問題。

・戦争トラウマの問題は、個人の病理という視点だけでは解きほぐせない。傷ついた個人の回復を促進／疎外する社会のあり方や、それに影響を及ぼす歴史的・文化的背景に目を向け、加害—被害や世代間の影響といった関係性の中で理解する必要がある。

【謝辞】 インタビュー調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。本研究は、JSPS 科研費 (21K12909)、RISTEX (JPMJRS22J3) の研究助成を受けて行われています。

心理的ネグレクト、家族の離別、家庭内暴力（DV）の目撃、家族の物質乱用（アルコール・薬物）、家族の精神疾患、家族の収監が挙げられる。こうした体験の種類が多いほど、後年になって心臓病や糖尿病、薬物乱用、自殺念慮、失業や貧困などのリスクが高くなることが指摘されている（三谷 2023）

<参考文献>

- 浅井利勇『うずもれた大戦の犠牲者－国府台陸軍病院・精神科貴重な歴分析と資料』国府台陸軍病院精神科病歴分析資料・文献論集記念刊行委員会、1993年。
- 蟻塚亮二『沖縄戦と心の傷』大月書店、2014年。
- ベセル・A・ヴァン・デア・コルクほか編、西澤哲監訳『トラウマティック・ストレス』誠信書房、2001年。
- 上田信『ペストと村一七三一部隊の細菌戦と被害者のトラウマ』風響社、2009年。
- 太田保之・三根真理子・吉峯悦子『原子野のトラウマ』長崎新聞社、2014年。
- 沖縄戦トラウマ研究会『終戦から67年目にみる沖縄戦体験者の精神保健』非売品、2013年。
- 北村毅『死者たちの戦後誌』御茶ノ水書房、2009年。
- 北村毅「戦争の批判的家族誌を書く」『文化人類学』87(2)、2022年。
- デーヴ・グロスマン、安原和見訳『戦争における「人殺し」の心理学』ちくま学芸文庫、2004年。
- 胡桃澤伸「『加害責任』の世代間伝播－『満蒙開拓』と祖父と私」『世界』985号、2024年。
- 桑原茂夫『西瓜とゲートルーオノレを失った男とオノレをつらぬいた女』春陽堂書店、2022年。
- 桑山紀彦「中国元『慰安婦』の心的外傷と PTSD」『戦争責任研究』19号、1998年3月、10～19頁。
- 在日の慰安婦裁判を支える会編「オレの心は負けてない：在日朝鮮人「慰安婦」宋神道のたたかい」樹花舎、2007年。
- 清水寛編著『日本帝国陸軍と精神障害兵士』不二出版、2006年。
- 杉山春「トラウマを学びつつ、旧満州に渡った女性たちの語りを振り返る」竹島正・森茂起・中村江里編『戦争と文化的トラウマ』日本評論社、2023年。
- 田中禎昭「東京空襲の記憶をいかに伝えるか－体験画による記録の方法とその意味－」『描かれた東京大空襲 体験画図録』すみだ郷土文化資料館、2016年。
- 直野章子『原爆体験と戦後日本』岩波書店、2015年。
- 中尾知代『戦争トラウマ記憶のオーラルヒストリー－第n次大戦連合軍元捕虜とその家族』日本評論社、2022年。
- 中澤正夫『ヒバクシャの心の傷を追って』岩波書店、2007年。
- 中村江里『戦争とトラウマ』吉川弘文館、2018年。
- 中村江里「戦争体験に関わる『二次証言』の可能性と課題」『日本オーラル・ヒストリー研究』18号、2022年。
- 中村江里「『社会的苦しみ』としての戦争トラウマ」『BRAIN and NERVE』75巻8号、2023年。
- 中村平「日本軍兵士の子と孫世代のトラウマのオートエスノグラフィ」『文化人類学』87(2)、2022年。
- 聶莉莉『中国民衆の戦争記憶』明石書店、2006年。
- 野田正彰『戦争と罪責』岩波書店、1998年。
- 野田正彰『虜囚の記憶』みすず書房、2009年。
- ジュディス・L・ハーマン著、中井久夫・阿部大樹訳『心的外傷と回復〔増補新版〕』みすず書房、2023年。
- 橋本明子『日本の長い戦後－敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』みすず書房、2017年。
- PTSD の復員日本兵と暮らした家族が語り合う会編『PTSD の日本兵の家族の思いと願い』あけび書房、2023年。
- 星徹『私たちが中国でしたこと：中国帰還者連絡会の人びと』緑風出版、2002年。
- 松岡環『南京 引き裂かれた記憶』社会評論社、2016年。
- 三谷はるよ『ACE サバイバー』筑摩書房、2023年。
- 宮地尚子『環状島＝トラウマの地政学』みすず書房、2007年。
- 宮地尚子『トラウマ』岩波書店、2013年。

森倉清一・森倉次郎・森倉三男『戦争を刻んだ人と家族—森倉可盛の記憶』私家版、2021年。

森茂起・港道隆編『<戦争の子ども>を考える—体験の記録と理解の試み』平凡社、2012年。

梁澄子「元『慰安婦』にみる『複雑性 PTSD』—ジュディス・L・ハーマン著『心的外傷と回復』から」『戦争責任研究』17号、1997年9月、26~31頁。

吉池俊子「『慰安婦』問題と PTSD」『歴史評論』576号、1998年4月、53~56頁。

吉永春子『さすらいの<未復員>』筑摩書房、1987年。

Dale, Robert. "Testing the Silence: Trauma and Military Psychiatry in Soviet Russia and Ukraine During and After World War II Trauma." In *Trauma, Experience and Narrative in Europe after World War*, edited by Ville Kivimäki and Peter Leese. London: Palgrave Macmillan, 2021.

Delaporte, Sophie. "Making Trauma Visible." In *Traumatic Memories of the Second World War and After*. Edited by Peter Leese and Jason Crouthamel. Cham: Springer International Publishing, 2016.

Kivimäki, Ville. "Experiencing Trauma Before Trauma: Posttraumatic Memories, Nightmares and Flashbacks Among Finnish Soldiers." In *Trauma, Experience and Narrative in Europe after World War II*.

【講演録】北朝鮮からの引き揚げと戦後の暮らし

琴寄 學

(満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・会員)

聞き手：楠瀬 慶太

(満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・事務局長)

楠瀬：この報告は琴寄さんに一人でしゃべっていただくという形ではなくて、僕の方から質問をしてお答えをしてもらうという形式で進めていきたいと思います。琴寄さんについて、高知の方はご存知だと思うんですけど。8月17日の高知新聞の朝刊に、「朝鮮引き揚げの記憶後世に」ということで、琴寄さんの記事が紹介されていたので、皆さん見られた方もおられると思います。今まで満州の会では朝鮮半島の話っていうのはほとんどなかったんですけど、やっぱり近い地域もあるし、また異なった引き揚げ体験もあるということで、今回、語り継ぐ会のメンバーで毎回来ていただいている琴寄さんにも少しお話を聞いていただきたいなということで、新聞で取り上げられたというのもあって少し詳しく聞いてみたいというそういう思いで今回設定してお話ししてもらうことになったところです。

(導入で琴寄さんの来歴をスライド解説)

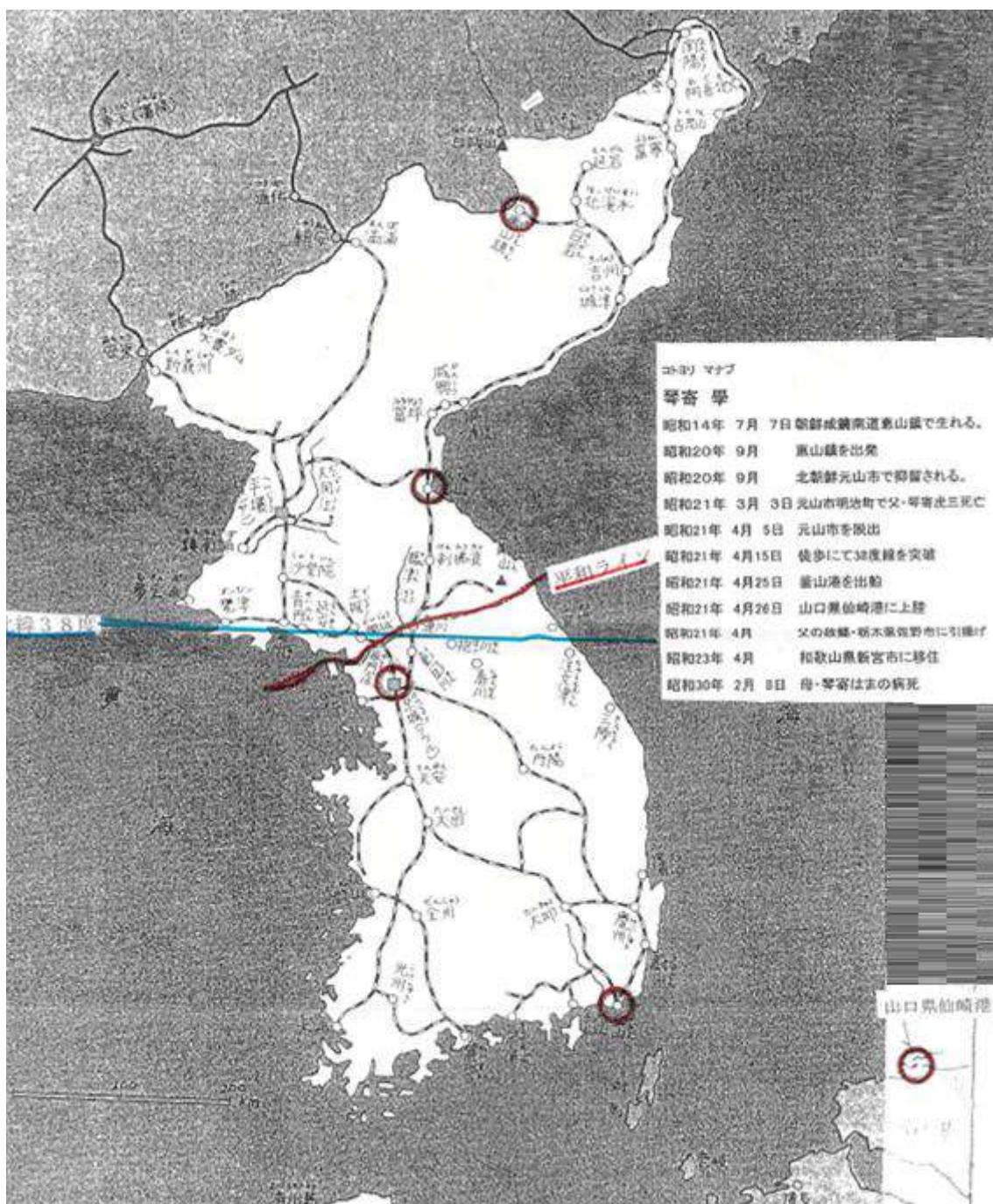
楠瀬：琴寄さんが生まれたのが、ちょっとこれ分かりにくい地図で申し訳ないんですけど、ここが本当に満州との国境地域にある恵山というところ、その地名として今は恵山市ですけど当時は恵山鎮と言われたところで、そこに昭和14年にお生まれになりました。なので本当にまあ満州とすぐ近くということになります。ここから終戦になった後、この38度線北側をソ連軍が駐留していましたので、そこを越えて山口の方へ戻ってくるというような、そういうような過程をたどります。

琴寄という名字 자체があまり高知では聞き慣れないということもあって、お父さんは栃木県のご出身であります。お母さんが奈良県のご出身、十津川郷土で有名な十津川のご出身で、材木がすごく盛んだった所だったんですけど、台風災害に遭いました、十津川 자체がなかなか経済的に立ち行かなくなってしまった、十津川から朝鮮半島の方にかなり移住した人たちが多くいたということです。

藤井家というのがお母さんのご実家にあたるんですけど、藤井家の方も北朝鮮に家族みんなで移住されていた。そういう中で、お母さんがはまのさんですね。ここにいらっしゃいますけど、はまのさん。



1歳頃の琴寄さん（朝鮮恵山にて）



琴寄さん家族の引き揚げ経路（琴寄氏作成）

琴寄：僕はおりません。

楠瀬：そうですね。この時はまだお生まれになってないんですけど、お姉さんがここにおられます。おじいさんが旅館の経営していました、その娘さんがはまのさん。お父さんの虎三さんは、もともと警察官で後に材木会社に就職される、終戦時は材木会社におられたんですけど、そのお二人が結婚されて、お子さんはお姉さんが3人で琴寄さんが一番下でお生まれになるということになります。

琴寄さんが生まれたのは昭和の14年ですね、なので、さっきの写真は昭和15年なんで、本当に1歳くらいの写真になります。旅館を営んでたということもあって、比較的裕福な家庭だったという風に聞いております。これが藤井一家、琴寄さんを含めた一家で。先ほどの写真に琴寄さんといふたちが入ってくるわけなんですけど、当時この恵山で平和に暮らしていたということになります。

それが昭和20年8月の終戦前に、対日参戦でソ連がきました、こっち側からどんどんソ連軍が入ってくるという中で、恵山にもソ連軍が駐留するということになります。その中でいろいろ大変なこともあります。その中で従業員がソ連

兵に襲われたりとか、そういう大変なことがありながらも、なんとか家族が9月に恵山を出ました。無蓋列車でこの線路を、琴寄さんたちはそのまま帰れるんじゃないかと思っていたみたいなんんですけど、突然元山というところで降ろされて。38度線がもうソ連軍によって封鎖されているので、ここから南へ行くことが出来なくなって、突然元山で降ろされ、収容所に入れられることになります。

収容所に入った時が9月なので、かなりその後はどんどん寒くなってくる過酷な環境の中で、収容所の中でおじいさんが亡くなり、お父さんが亡くなり、さらにいとこさんたちとかも、どんどん亡くなっていくと。発疹チフスとかいろんな病気によるものと栄養失調とかということが原因になっていくんですけど。そういう中で、一家の大黒柱だったお父さん（虎三）が3月に亡くなられるという。これがすごく琴寄さんにとってはすごく大きな体験になるんですけど。

そういう中で、もうどうなるんだというふうに思っていたら、ソウルの方にいた、38度線の南側にいたお母さんのお兄さん、真ん中のお兄さんが38度線を朝鮮人に化けて、渡ってきて（家族を）救出に来たんですね。それでそのお兄さん（琴寄さんのおじ）は、最初おばあさんが非常に体調が悪いということで、おばあさんを背負って38度線を越えようとするんですけど。その途中でおばあさんが亡くなってしまって、それで一度おじさんはまた元山に戻ってきます。



藤井家の家族写真と裏面の注記（昭和11年）

それでみんなで脱出しようということになって、(旅館の) 従業員とかも含めて 20 人ぐらいが、表の道じゃなくて山の中とか村々を越えて、10 日間かけて 38 度線をなんとか越えることができて。その時琴寄さんは 6 歳で越えることができて、その後、北朝鮮側の活動はすごく過酷だったんですけど、38 度線を越えたら結構スムーズに帰ることができて山口に帰ったのが 4 月。釜山を出て山口に帰ったのが 4 月 26 日です。

それからお父さんの実家があった栃木県に一度帰られるんですけど、その後、今度はお母さんのお兄さんですね。お兄さんたちがいた和歌山に移られて、戦後は主に和歌山で生活するということになります。その中で中学 3 年生の時にお母さんを亡くされて、お姉さんが何とか働きながら琴寄さんを高校を出してくれたということになります。

その後、琴寄さんは高校を出た後、県外の建設会社に就職されるんですけど。その後、高知の営業所にあの若い時に来られたことがあって。そこで奥さんと出会ってご結婚されて高知の建設会社に移られて高知にずっとおられるということになるので、高知に来てからはもう 50 年ぐらいにはなるということになります。

そういうような琴寄さんの来歴があるんですけど全体の流れとしてはそういう流れになります。今回、お話しitただく話の核心になってくるのが、やっぱりこのお父さんですね。虎三さんがやっぱりいた時期といななかった時期で、琴寄さんの境遇というのがすごく大きく変わっていく、お父さんと琴寄さんという関係性というか、琴寄さんのお父さんへの思いというのが実は戦後の暮らしとかということにもすごくつながっていくということで。今回戦争とトラウマというテーマを設定させてもらったんですけど、戦争というものが家族とかそういう人たちにどういう影響を与えたのかということを考える意味でも、少し琴寄さんに話してもらいたいなというふうに思ったところであります。

一つ一つ質問をしていきたいんですけど、まず恵山ですね。この恵山で、昭和 20 年の 8 月 9 日にソ連が対日参戦ってきてから、生活が一変してきたということなんんですけど。その対日参戦以降、ソ連が駐留した頃の記憶として 6 歳なのでいくつか覚えているようなことがあったら教えていただけたらと思います。

琴寄；はい。まず生まれた時は、ここ朝鮮半島は日本に併合されていたんです。だから 6 歳まで育ちましたのでね。朝鮮語は分かりますかと聞かれますけど、全然わかりません。これはもう平素ね、朝鮮の方も日本語で話しました。朝鮮の方に日本人以上の義務を押し付けとった。これはもう間違いないです。

それでもう一番、僕は気の毒に思うのは朝鮮の人がですね、戦争が終わったやれやれと思った中で 30 名ぐらいの方がですね、戦犯で絞首刑になっているんですよ。あの「私は貪になりたい」というのがありましたよね。あの人たち以上ですよ。それで（絞首刑になつた彼らが）何をしたかと言ったら、捕虜の虐待ですからね。そりやあ虐待された、しなさい言われてやって、やれやれと思ってたら、お前は日本軍のためにやってないから絞首刑だって。こんな僕はね、こんな気の毒な人おらんと思うんですよ。これまたね言いたいこ

といっぱいあるんですけどね。

それで終戦になりました。ソ連兵が入ってきました。ソ連兵の先発部隊はほぼ頭が坊主なんですよ。スキンヘッド。これは囚人部隊なんですよ。だからね、本当に凶暴で、時計も扱えんのですよ。その頃の時計はゼンマイ式でしょ。でも一番は、じいさんの経営しどった旅館に乗り込んできて、たまたまそこに泊まっておった新婚さんを乱暴したんでしょう。爺さんが一生懸命になってね、人工呼吸したけど亡くなりました。

この後それがソ連の兵隊さんもね。20年5月にドイツは参ったというたでしょ。やれやれと思っていたのに、今度は日本に極東へ行って、日本と戦争をせえ言われている。今度はですね、その人たちがアメリカと戦争して全部死ぬんだと言ってたことを痛烈に覚えています。後から来た若い兵隊さんはものすごく優しかったですよ。

だけどね、一番最近乗り込んできた囚人部隊はですね、スキンヘッドの頭ツルツルの人たちでね。もうその人たちがね、ものすごくね、乱暴で狼藉で。日本の全員かどうかは分かりませんが、女の人は青酸カリを持っていました。私の知っている、じいさんの旅館に勤めている、すみちゃんという女人人が、そういう目におおたんでしょうね。だけど、青酸カリが無かったから、その人は猫いらずを持っていたんです。猫いらずを飲みました。水がなかった。胃まで入らなかった。どうなると思います?体がね、バレーボールの球みたいに膨れますよ。そんな女性もおったんです。

そして9月の中頃ね、日本人集まれと。今から内地、日本本土へ返してやるからと言って、無蓋列車に押し込められたんですよね。その汽車がずっと南に行く。なかなか進まない。途中で止まる。女の人が、おしつこしたいけど、ちょっと恥ずかしいから、ちょっと離れたところへ行くと降りる。そうしたら汽車が知らない間に、タッタッタッタッと動き出して、置いてこられた人もいます。

それと僕が情けないなと思っていたのは、うちのじいさんは向こうで財をなしていましたので、倉庫一杯くらい杖を持っていました。けど、それは全部取り上げられて、そこら辺の竹の枝を持って歩いていた、これも情けないと思いました。

そして汽車が南下していって、元山というところで突然止まるわけですよね。今で考えてみたら丁度、昭和20年9月の中頃でしたから。スターリンがですね、「日本人動かすな」と言う命令をね、突然出した訳ですよね。だからそれとぴったり合うんですよ。

だけど、その前にうまいこと逃げた人たちもようけおるんですよ。満鉄の関係のある人たちとかね。その人たちとは、日本に帰ってきて、慶山鎮から引き揚げてきた人間が集まる会をしたけど、その人たちとはよう出てこなかつたという話を聞いています。

それで、元山で抑留されたわけです。その中で一番先に亡くなつたのは、猫いらず飲んだ女性ですわね。その次に亡くなつたのは、僕のおじいさんがそこで亡くなつたんですよ。おじいさんが亡くなつた時に、額が真っ黒になつたんですよ。なんで額が真っ黒になつたと思います?体にシラミがおるでしょ。亡くなつたら体温が下がるでしょ。体温が下がつたら、体温のまだ温いところにシラミが集まるんですね。そしたら、おでこが一番体

温があるんでしょう。おでこにはそれもね、痛烈に覚えています。もう発疹チブスが大流行しましてね、もう全員がかかりました。当然僕もかかりました。それで生命力のある者だけが生き残ったんですよね

そして、あくる年の31年の3月になつたら 親父が保安隊に引っ張っていかれました。それは元警察官だったということが分かったんでしょうね。そして帰ってきた時はもう非常に弱ってました。それから昭和21年の3月3日に親父が亡くなりましたので、一応病名は肺炎ということになってますけど。私はその時に受けた拷問が死の原因だと今でも思っています。けれど、それまではですね、私は、おふくろがおった、おやじがおった。けど食べるものはなかったですよ。だけどね、他の抑留された子供たちから比べたら。あとから本を読んだら、その間は、まず恵まれとった方だと思います。

だけどですよ、今でもですね、私は生涯大学というところに月に2回授業に行ってますけど、そこでですね。だいたい40人くらいいますけどね。弁当買うんです。一番後でもらってきてですよ、一番早う返すの私ですよ。早いってことですよ。早う飯食わんと、人にとられるから、それだけ残ってるんですよ。今、私85歳ちょっとですけどね、皿鉢料理以外はね、残したことありません。全部食べます。それはもうあるものを食べんとねえ、いつ食べれるかわからんからでしょう。そしてお腹が空くとね、この胃のあたりからギューギューギューギューといいますよ。それ恵まれてますね。

そうなつた時に、あの慶城で復員になりましたおふくろの兄貴が、私たちが元山で抑留されていることを知つて、助け出しにきてくれたわけですわ。夜中に20人くらいに別れてね、落ち合う場所を決めて行つたんですよね。その時に覚えているのは、ソ連兵のマンドリンという機関銃があるんですよ。それでバラバラバラバラバラバラと、私たちを狙つて撃つてきたかどうかわかりませんけれど。ソ連の中を必死でくぐり抜けてきた。落ち合う場所を決めて、山道ですわね。

北朝鮮には、日本人が30万人ぐらい抑留されておられたらしいんですよ。そこも食糧難でしょう。日本人を追つ払いたいでしょうけど、公道を通るのは認められない。けど山道を逃げるのは認めてくれたんじゃないでしょうかね。途中で持つてるもの全部取られました。だけど途中でですね。「日本人に世話になったから」といつて食べるものを惠んでくれる朝鮮のオモニのおばさんたちもたくさんおったんですよ。日本人に助けられたから言うてね。

そして僕は、元山で抑留されると、ボロ靴を履いて歩いとつたら、ソ連の若い兵隊さんがですね、気の毒がってシナ靴をプレゼントしてくれたんですよ。そのシナ靴のおかげで38度線を超えることができたんですよ。

私の次の姉が元山で抑留されているときに、動けるもんだけを。まず日本行って状況を話そうと汽車で脱出したんです。だけど失敗して、姉が一人ね、遠く離れた駅に一人だけになりました。で、その時にソ連のバーディオンという若い兵隊さんがね、もう一生懸命苦労して苦労して姉を家族のところまで届けてくれたんです。ほんと姉はね、もう本当

にロシアへ行ってバーディオンに礼を言いたい、バーディオンに礼を言いたいと言うてね。もう生涯言い続けました。だからね、助けてくれた朝鮮の人、ロシア、ソ連の人もたくさんおるんですよ。そりやあ悪いのもよけおりましたけど。そのお陰で私は 38 度線を越えることができました。

で、38 度線を越えると、まあ天国みたいなもんですよ。なぜ天国かと言いますと、大きな声で日本語で話せるじゃないですか。食べるものあるじゃないですか。それから 10 日ほど経って、釜山から船に乗って山口県の仙崎港に帰ったんですけれど。船の中で痛烈に覚えとることは、もう仙崎を目の前にして船から飛び降りた女性がおったんです。僕はその時に何で飛び降りたか分かりませんけどね。後で調べたら、その人は北朝鮮における時にロシア兵からの恥辱に耐えかねてですね。苦労して苦労して苦労してもう内地を目の前にして。けど、その恥辱に耐えかねてですね。船から飛び降りて亡くなった人もおります。でまたね、船の中でね、食べたでのさつまいもの蒸かしたのを食べたことの美味しかったこと。こんな美味しいもんがね、世の中にあるかと思ったのね。今でもね 覚えてます。

それで日本に帰りました、日本に帰ってまず親父は戦争で亡くなっています。親父の里の栃木県佐野市に私たち一家は行きました。そこはね親父のあんがい大きな家屋があったんですよ。だけど、おふくろはお嬢さん育ちでしたから。農業をする、昔蛭とかあんながおりましたんで無理やったから、おじを頼って和歌山県の新宮市に行きました。そこで 11 年間育ちました。

小学校のときは親父のおらん、病弱なおふくろの家庭やから、貧しいのは当然ですけれど。小学校 3、4 年生ですよ。赤ちゃんを連れて小学校に来る女の子もおりましたわ。だからその子から比べたら自分はですよ、まだ幸せだなと思って。思い切り遊べるだけ幸せだなと思ってました。だから本当に弁当持つてこれんような家族でしたけどね。昭和 26 年、私は 6 年生の時に。コッペパンってね、固いパンだけの給食が始まったんですよ。それからちょっとしたらね、脱脂粉乳ですかね。あれがつきました。脱脂粉乳はあんなまずいもんじゃない、知らんと言うて言う人がおるかも、おりましたけど。僕にとってはこんなうまいもんがあるかなと、そう思いました。

そして、おふくろが小学校 6 年生の時に病弱になったのはね。それは肺結核であるのが分かったんですよ。肺結核じゃあいうと、その頃はね、本当に人に言えんでしょう。それでもうね、もう痛烈に覚えてるのはね、その時におふくろに手を引かれて、宵闇の鉄の線路の上をね、歩いたことが 2 回ほどあるんですよ。その時ね、僕はね、怖いよ一怖いよ一って泣きましたわねえ。おふくろが、あきらめて線路から離れましたけどね。

それとなんですね、親父がおらんのだと。親父はどうして戦死者と言われんだろうかと。どうせ死ぬんやったらですね、亡くなるんやったら、特攻隊員になってですよ。潔く死んでくれたら、わしも威張って親父のこと言えるじゃないかと。引き揚げる時、病気で死んだと格好悪いこと言えるかというふうに思ってたんですけど。高校の時に高木という先生がですね。「琴寄くん、あんたのお父さんも戦死者だと、戦争で死んだということを

ね、胸張って言いなさい」と言ってくれたんですよ。で、それから僕は、親父は戦争で死んだ、戦死者だと胸張って言えるようになったんです。僕は本当に高木先生が恩人だと思ってます。本当にもう、中学校の時にね。僕は本当に「親父が生きちよつたら」「親父が生きちよつたら」と思ってね、押し入れの中で何回泣いたか分かりません。

高校の時ですか、高校の卒業ぐらいの時にね。これも人の名前言うたら悪いかも分からないんですけど、桐島洋子さんというね、ジャーナリストのね、女性ジャーナリストのね、もう草分けみたいな人ですよ。高校卒業やのに、東大生の卒論の教授したと、その人がですよ、親父はいらんけど子供が欲しいと言うてカナダへ行って子供を作ってきたというのが話題になったんですよ。これは誤解だったと言いますけどね。その時は腹立ちましたね。経済的な理由があったら親父はいらんのやろか、そんなことがあるかと。親父って言うのはどれほど大事かと、そういうふうにね、思ってました。もう、それですよ。もう親父が大事や、親父が大事やと思ってました。それで高等学校はですね、もうおふくろは中学3年の時、昭和30年の2月8日に亡くなりましたので、高校は私の8歳上の姉の働きと、父のわずかな恩給と、私は新聞配達と家庭教師、家庭教師いっても発達障害のある人の友達みたいなのね、それをしながら、ようよう高校を卒業して、そして大阪の建設会社に就職しました。

そりやあもう建設会社に就職してからは楽でしたですね。高度成長の時代ですしね。それと私はおふくろも親父もおらんでしょう。親の面倒を見る必要ないでしょう。入った金は全部使えるでしょう。言うたら給料は入ってくるわ、その頃自動車もない何もない給料は使い放題ですわ。何に使うとか聞かんとって下さいよ。

それからは楽でしたね。だけど子供が…。そして会社で高知へいって。初めは高知で「青春が埋もれていた」とぼやいていましたけど、世話をしてくれる人がおって、高知の女性と結婚して、高知が気に入って気に入って、名古屋から戻れ言われたんですけど、高知の会社に職場を変えて、そこで定年になるまで65まで勤めましたけどね。

子供が小学校できた時にですね。子供が欲しがらんのにですね、「おい自転車買うちやろうか」とか。「おい野球のグローブ買うちやろうか」とか。サーカスが来るから「見に行こうでとか」。もう先々言うわけですわ。家内によく怒られました。「あんた子供が欲しがってから言いなさいよ」と。だけど、それはもう子供の時にもうサーカスが来たら見に行きたい、親父とキャッチボールしたい、自転車乗って遊びたい。そういう気持ちがあつたから、それを子供にしてやれることによって、自分の子供の時の一種のトラウマかもしれませんけれどね。

ほんで、まだ今から30年ちょっと前ですから、学校の参観日もね、男の父兄が行くのが少なかったんですけど。私はもう学校の時に誰も来てくれなかつたから寂しかつたと思ったから。父親がとつことつとこ行きよつたら目立つたでんしうね。小学校のPTA会長はこんな男が2年勤めさせてもらいました。昔のね。そんなこともあります。なんせね、もう親父が欲しかつた。親父が欲しい子供の時ね。本当、押入れの中でね、何回泣いたか

分かりません。

楠瀬：あと最後なんですけど、やっぱりお父さん、お母さんが亡くなられたということと、病気をされたということが、すごく経済的に、段階的に苦しくなったなかで、中学生の時にお母さんが何度か自殺をしようとしたという体験もあったということを最後に話してもらっていいですか。

琴寄：それはね、小学校 6 年の時なんですよ。さっき言いましたけれど、あの結核じやと肺結核と分かった時に、悲観したおふくろに小学校 6 年生の僕は手を引かれて、宵闇の線路の上を歩きました。その時に僕は「怖いよー」「怖いよー」「怖いよー」って泣き叫びました。それで、おふくろは諦めてですね、線路から離れました。そういうことがね 2 回あったのを痛烈に覚えてます。その頃ね、結核言うて言うたらね、本当に死の病でしたからね。マイシンのない時代に。おふくろは中学 3 年の時に亡くなりました。中学 3 年からこっちは親父もおふくろもおらんと、まあそういう家庭ですけどね。

だからね、何を言いたいかというと、戦争はもう何ですかという今ね。ウクライナでもやってるでしょう。ガザもやってるでしょう。はよう終わってもらいたい。終わっても、ああよかったですよ。それでもう肉親を失った子どもたちね。ひょっとしたら身体障害者になったかもしれない。その人たちがどれだけ苦労するかと。これも自分もね、まあ、それほどの苦労じやなかつたかもわかんないですけど、本当に戦争さえなければ避難民になってですね、あの内地に引き揚げてくるときには、日本へ帰れるという希望があったから帰ってきたんですよ。

だけど今でも 1 億人ぐらいが避難民になってるでしょう。この人たちは本当に何を希望に生きておるんでしょうかね。僕はね、日本に帰れると内地に帰れるという希望があったから帰ってこれたんですよ。だけど、内地に帰ってきてからもですね、ああ、よかったですよ。戦争があったから。戦争がなかつたら、親父が生きちよつたら、戦争がなかつたら、何遍思ったでしょう。でも本当、子供の頃ですけどね、押入れの中で泣いてね。

一時ね、こんな話あるんですよ。僕は学と言いますよね。「学がおらん」「学がおらん」と大騒ぎしたらしいんですわ。そしたらね、僕はね、押し入れの中で寝てしまったらしいですわ。泣いてそのまま寝てしまったんですね。本当にね、そんなことはあります。

それと、話は余談になりますけど、定年退職した時にね。僕はね子供の時にね、近所の人たちに可愛がってもらったんです。小学校の時に、担任の先生は新婚んですけど、そこで遊びよったら、琴寄君ごはん食べていきやって担任の先生の家で食事したことが何遍もあります。そして遠足の時にはですね、父兄が琴寄君の分と言って弁当を持たせてくれました。そうしてね、近所の人たちの世話になったんですよ。だからそういう子供の時になった御恩をですね、退職した後、返したいな、という気持ちがありましてね。福祉員ですね、児童福祉員をね、引き受けました。だけね、夕方 4 時ごろ冬場 6 時頃にですよ、家に行ったらですよ。2、3 年の子供が一人で首から家の鍵を下げて一人おるわけですよ。

行って「お母さんは」って言ったら、「まだ帰らん」。「晩ご飯は」って聞いたら、お母さんが買うて来る。こんなん聞いたら、俺の子供の時代とまた違う意味で子供が気の毒やと思ってね。つくづく思いました。それも定年になって退任しましたけどね。

本当にね、子供をどういうふうに育てるかね。本当にね、子供っていうのは、親父とおふくろで育ててもらいたいですね。僕はですよ、親父が早くなくなりましたからね。これこそ思ってます。



自身の戦中戦後の体験を語る琴寄學さん＝手前。奥は聞き手の楠瀬慶太さん。

六歳の戦争体験

高知市横浜西町18-6

ことより
琴寄 まなぶ
學

六歳の戦争体験

私は 79 年前六歳の時 38 度線を徒步で突破して内地（日本本土）に引き揚げて来ました。途中北朝鮮の元山で抑留され冬を越しましたが、発疹チフスの大流行に遭い全員が罹り、生命力のある者だけが生き残りました。

亡くなった人は凍土に浅く掘った穴に沢庵漬けのように埋葬されました。私の様に身内を埋葬して来た人達が遺骨を収集したい、出来なければせめて墓参だけでも、と「朝鮮遺骨収集全国友の会」が結成され、私も加入していました。けれど会員の方は高齢のため次々と亡くなり、高知県では早野朝子さんと私の二人だけになってしまいました。早野さんと、殆どの人は朝鮮での悲しい出来事を何も語らず、お墓に持つて行かれたので残された二人がその真実を伝える義務があるのではないかと話し合いましたが、早野さんも令和元年 12 月に 87 歳で亡くなり私だけになりました。それで私は少しでも多くの方に、戦争の真実を伝えたいとこの手記を書きました。

六歳の時の事をよく覚えているなと言われますが、祖父の旅館に突然乗り込んで来たソ連兵に乱暴された新婚のお嫁さんを、祖父が必死で人口呼吸をしていた様子など、脳裏から離れないのです。

まず朝鮮民主主義人民共和国と呼ぶのが正しいのですが、長くなりますので、北朝鮮と呼ぶをご了承ください。

私は昭和 14 年（1939）7 月 7 日に満州（当時）との国境の町、
朝鮮咸鏡南道甲山群恵山鎮カンキョウナンドウ カヨサンぐん エイサンチで生まれました。父・虎三は栃木県佐野市植上町出身で大正 12 年（1923）12 月公務員「警察官」として渡韓し、昭和 5 年（1930）に実家が恵山鎮で経営する、「ふきや旅館」を手伝うために渡韓した、奈良県吉野郡十津川村平谷出身の藤井はまのと現地で結婚しています。私が生まれた時は警察官を辞め、大村と言う材木会社に勤めていました。第二次世界大戦が始まる時でしたが、とても恵まれた生活を送っていました。朝鮮で育ちましたので少しそは韓国語が分かりますかと、よく問われますが、全然分かりません。それは当時朝鮮は日本に併合（明治 43 年・1910）されて朝鮮の人たちも日常は日本語で話しをしていたからです。朝鮮半島の人達は日本人以上に日本国に対する義務を押し付けられ、又昭和 14 年（1939）12 月からは、日本風の名前に改名されました。

（創氏改名令）日韓併合は、インフラの整備・農業発展・両班制度の撤廃・識字率の上昇などで間違いではなかった。との意見の方が

おられます。しかし昭和 11 年（1936）の第 11 回ベルリンオリンピックで、日の丸をつけた孫基禎さんがマラソンで優勝して日本人は大喜びでしたが、その時朝鮮の人達はどんな思いだったでしょうか。

もし我が国がどこかの国に併合されたらどうでしょうか、私は命を賭けて戦います。日本が朝鮮半島を併合して思い上がった事が太平洋戦争へと突き進んでしまった最大の過ちだったと私は考えています。

戦争中は、何不自由のない生活でしたが、昭和 20 年（1945）になると召集年齢が 45 歳までになり、復員していた叔父たちにも召集令状がきて、ほとんどの大人の男性は居なくなり（根こそぎ召集・動員）、そしてお前達を守ってやると威張っていた、警察や軍の偉い人やその家族が知らぬ間に居なくなりました。（ソ連軍の参戦を察知したからではないでしょうか。）

昭和 20 年（1945）8 月 15 日、日本はポッダム宣言を受諾して敗戦となりました。敗戦から日を置かずして、ソ連軍が旧満州方面から惠山鎮にも進駐ってきて祖父の「ふきや旅館」に共産党本部の看板が揚げられました。ソ連軍の先発部隊はスキンヘッドの囚人部隊で、腕時計が扱えないほど教養がなく、また凶暴でした。

9 月になり、日本人集まれとの命令で集まると、今から内地（日本本土）に返してやると無蓋車に乗せられました。汽車は動いたり止まったりの繰り返しでなかなか進みません。止まった時小用のために降りた女人を見て、汽車が急に動き出し何人かの女性が取り残されました。また目の悪い祖父が杖を取り上げられ、枯れ枝を杖代わりにしていた姿や、ソ連兵に乱暴された時用にと（ソ連軍には慰安婦制度はありませんでした。それで多くの日本の女性が犠牲になりました。）持っていた薬（青酸カリが無く猫いらすを持っていたのです。）を飲んだが水が無かつたため、喉で焼け身体全体が風船のように膨らみ、それでも内地に帰りたいと、私たちに必死でついてきていた祖父の旅館に勤めていた若い女の人の姿などが、今でも私の脳裏に焼き付いています。

私達は北朝鮮の元山という駅で突然降ろされ工場の倉庫のような所に押し込まれ、避難民となり地獄の 8 ヶ月が始まりました。（20 年 9 月中頃スターリンが日本人は動かすなどの命令を突然出したからだと思われます。）

日本政府から見捨てられ棄民となつたのです。終戦直後の日本本土でも多くの方が飢えに苦しんでおり、餓死する人もおりました。

そこに 660 万人（軍人も含めて）の方が外地から帰国すると、大変な食糧危機になると日本政府は帰国事業にあまり積極的に取り組んでくれませんでした。

まず、食べるものが無く飢えの続く日々でした。草や木の実など食べられる物は何でも食べました。海で蛤が獲れたので必死で取つて食べました。北朝鮮の故金正日総書記は平成 14 年（2002）9 月、日本人 13 名の拉致を認め、蓮池さん、地村さん夫妻と曾我ひとみさんの 5 名は日本に返されました。横田めぐみさんら 8 名は既に死亡したと発表されました。その中で市川修一さんは元山の海水浴場で溺れて亡くなつたとの事ですが、元山の海は 6 歳の子供でも貝が採れるほどの遠浅です。なぜあの海で若い男の人が溺れたのかと不思議でなりません。

朝鮮の冬は零下 30 度近くになります。夏服の着の身着のまま、避難民となつた私達は、発疹チフスの猛威に襲われました。まず猫いらずを飲んだ女性、祖父、祖母、叔母、従兄、そして父と私達の一団で 9 名が元山で亡くなりました。祖父が亡くなつた時額がシラミで黒くなりました。亡くなつた人は凍土に浅く掘られた穴に何人も放り込まれ、タクアン漬けのように埋葬されました。私の父は、元警察官であったことがばれ、保安隊に引っ張つていかれました。そして数日後に帰つて来た時は、拷問を受けたのか酷く弱つていて間も無く（昭和 21 年 3 月 3 日）亡くなりました。

私は今でも父の死亡はその時受けた拷問のためだと、思っています。女人達はソ連兵に襲われないようにと、みんな頭を剃り顔に墨を塗つて男の恰好をしていました。私達子供は石炭の燃え殻の中から、まだ燃える物を拾つて来るのが仕事でした。南鮮の京城で復員した叔父が、私たちが元山で抑留されている事を知り、聾啞者の朝鮮人に化け寝るときには寝言を言わないように口に新聞紙を入れて 38 度線を越えて助け出しに来てくれました。そして昭和 21 年（1946）4 月 5 日元山を脱出したのです。白岩山超えの 60 里（約 240 *）私たち以外のチームの方ですが氷の中に落ちて生き別れをする人、朝鮮人に叩かれて崖から落ちる人、腫れあがつた足で這うよう歩いている人、取り残される子供達、などの光景が記憶にあります。38 度線突破までの必死の行程で頼れるのは自分の足だけでした。私達は 10 日間かかり 4 月 15 日に 38 度線を越えました。

「北朝鮮には約 30 万人の日本人が抑留されており、朝鮮も食糧難です。日本人を追い出したいがスターリンの命令で動かすわけには

いきません。それで山道を使用するのを黙認したのではないでしょ
うか、しかし持ち物は全て奪われました。」

38度線より南は天国のようでした。京城を経由して4月25日釜
山港を出港、4月26日、無事山口県仙崎港に着きました。引き揚げ
船の中で食べたさつま芋の美味しかった事が忘れられません。また
夢にまで見た内地を目の前にして、引き揚げの際に受けたソ連兵か
らの恥辱に堪え難く船から身を投げた女性が居られました。けれど
飢えに喘ぐ私たちに、そっと食べ物を差し入れてくれた、オモニー
(朝鮮人のおばさん)。ダバイ(ください)ダバイと物乞いする子供
たちにやさしく黒パンを投げ与えてくれた、ソ連軍の若い将校など、
助けてくれた人たちも多く居られたのも事実です。

私たちの家族は叔父たちと別れ、父の故郷栃木県佐野市に向かい
ました。そこには父が購入していた大きな家屋がありました。しかし母はお嬢さん育ちで、父の実家の農業を手伝うのは無理でした。
それで家屋を処分して、十津川の本流熊野川の河口の町、和歌山県
新宮市に叔父を頼って引越ししました。それで私は新宮市で高校卒
業までの11年間育ちました。私はとても良い子でした。子供の日には新宮市長より、善行児童・模範児童で何度か表彰されています。
それは良い子にしていれば近所の人や友達の父兄がかまってくれて寂しさを紛らわせることが出来る事が自然に身についていたからです。本当に良い子であったか疑問です。引き揚げの無理が祟ったのか病弱な母、父の居ない引き揚げ者、貧しいのは当然です。弁当を持って行けない日もある小学生時代でした。(私が6年生の時の昭和
26年に硬いパンだけの給食が始まりました。) けれど、4、5年生で弟や妹の子守をしながら登校する女の子が居り、授業中に泣き出した赤ちゃんを必死にあやしながら教室を出ていく姿を、今思い出しても涙がでます。私はその子にくらべ思い切り遊べるだけ幸せだと思っていました。しかし、昭和25年(1950)に勃発した朝鮮戦争で日本は漁夫の利を得て(朝鮮特需)経済的に恵まれだし生活が徐々に豊かになって行きましたが、それに取り残された中学生の時が私は一番辛かった思いが残っています。(生活保護はまだ無かつたので、生活費は父の恩給と8歳年上の姉の働きでした。母は結核で医療扶助は受けていました。その時期の私の様を元毎日新聞高知支局長の大澤重人さんが季刊高知の2021年12月号に記載してくれました。そのコピーを添付しています。)母が病は肺結核だと判明した時、まだマ
イシンの無い時代絶望した母に手を引かれ、宵闇の紀勢線を歩きま

した。その時私は怖いよ、怖いよと泣き叫びました。それで思い直した母が線路から離れました。私が小学6年（昭和26年）事です。母は昭和30年（1955）2月8日、私が中学3年の時に亡くなりました。私は小中生の時父を恨んでいました。それは生むだけ生んで死んでしまった。それも引き揚げの途中、病死するなど恰好が悪い、どうせ死ぬなら特攻隊などで格好よく死んで、靖国神社に祀られてほしかった。それなら胸を張って父の死を話せるのに、また8月15日の終戦記念日になぜ父は戦没者として扱われないのか、との怒りがいつも湧いていました。高校生の時、私の家庭の事情をよく知っている高木先生が、琴寄君、君のお父さんは戦死者だ、戦争で死んだと胸を張って言いなさい、と言ってくれました。それ以来私は、父は戦争で亡くなった戦没者だと言っており、誇りに思っています。高木先生は恩人です。「高校は奨学金とアルバイト（新聞配達と家庭教師など）でどうにか卒業しました。

私は社会に出て68年になりますが、その間高度成長期で恵まれたためか あまり苦しかった思い出はありません。それは少年時代の苦しみにまさる苦しみが無かったからだと思います。昭和45年30歳の時に土佐の女性と結婚して3人の子供に恵まれましたが、子供達が望むより早く色々な物を与えてよく妻に子供達が欲しがってから与えなさいと、叱られました。それは私が子供の頃に欲しても叶えられなかった事を子供達に与えて、自己満足するためだったからだと思います。参観には当然誰も来てくれずいつも寂しい想いでした。それで自分の子供達の参観日には努めて出席しました。40年前はまだ父親の参観は目立ち、なぜか高知市立横浜小学校のPTA会長を昭和62. 63年と努めました。

小学時代の担任の先生は新婚さんでしたが、よく自宅で食事をさせて頂きました。遠足の時など何人もの同級生の父兄が琴寄君の分と弁当を持たせてくれました。近所の方にもお世話になりました。それで私は、少しでも少年時代に受けた御恩を社会に返したいとの想いから、退職（平成16年）後民生委員児童委員を引き受けました。冬場の午後6時頃尋ねたら、小学2, 3年の子供が首から家の鍵を下げて一人寂しく居り、お母さんはと聞いたらまだ帰らん、晩御飯は聞いたら、お母さんが買うて来る涙が出ました。私の時代とは異なる事情で苦しむ子供たちが居り力になりたいと思いながら、個人情報の保護などで少しも力になれませんでした。本当にもどかしい思いです。平成29年に定年で退任しました。

令和4年2月24日、突然ロシアがウクライナに侵攻を始めました。何故か、私はプーチン大統領は気が狂ったのではないかと考えてなりません。しかしロシアの人達90パーセントがプーチンを支持していると報道されています。ウクライナでは民間人の死者が1万人を超えたと伝えられています。ロシア人は鬼なのでしょうか。けれど私は79年前にロシア（当時ソ連）の若い兵隊さんに助けられた思い出が心に残っています。北朝鮮の元山で抑留されていた時、ぼろ靴を履いて歩いていたら、見かねたソ連の若い兵隊さんが立派なシナ靴をプレゼントしてくれました。その靴のお蔭で38度線を突破することが出来たのです。また姉（当時11歳）が汽車で脱出を試みましたが失敗して遠く離れた駅に一人だけになりました。その時苦労して姉を家族の元まで送り届けてくれたソ連の若いバービョンという兵隊さんを、ロシアに行ってバービョンにお札を言いたいと姉は言い続けていました。ウクライナでは多くのロシア兵が戦死しています。（約4万人）又世界中でロシアの人たちは白い目で見られ、肩身の狭い思いで暮らしています。これが専制主義国家の恐さです。

令和5年10月7日に突然、パレスチナ自治政府のガザ地区を拠点とするイスラム教スンナ派の武装集団ハマスがイスラエルを襲撃し、イスラエル市民ら1200人を殺害し、200人以上を捕らえて人質にしました。激怒したイスラエルはハマスの掃討を口実に軍事作戦をガザ地区で展開していて、ガザ地区で民間人約4万人が死亡しその7割が女性と子供です。ハマスと組みするレバノンの武装組織ヒズボラがイランに後押しされ、イスラエル北部に侵攻し第五次中東戦争の可能性があるとも言われだしました。

シリア・イエメン・ミャンマー・アフガニスタン・バングラデシュなど世界では多くの国で内戦が続いており、一億以上の難民が発生しています。

最近、中国が台湾に軍事侵攻する「台湾有事」の可能性があり、それは「日本有事」もある、と唱えた書物を目にします。また日本はロシア・中国・北朝鮮の核保有国に囲まれて大変危険だ、徴兵制度の復活が必要だと意見の人が出てきました。

日本は自由で民主主義の素晴らしい国家で、今は平和が続いているが、世界の様相が随分と変化しています。日中友好との言葉を耳にしなくなりました。戦争をしない国、されない国であり続けるためにはどうすればよいのでしょうか。日本人は平和ボケだと言わ

れますが、今こそ国民一人一人が平和を維持するためにどうすれば良いか、真摯に考えることが必要な時ではないでしょうか。

私は内地に（日本本土）帰れるとの希望があったから、あの苦しみに耐え得たのですが、行くあてのない人々の苦しみは想像に絶すると思います。また戦争が終わっても肉親を失った苦しみは、私は十分に体験しています。戦争で一番悲惨な目に遭うのは、なんの罪もない子供と女性です。

私は子供たちに平和についての話をするとき、人には色々な考え方や意見がある、多くの方の意見・考えを聞いて、その中から自分で決めなさい。絶対に一つの考えに偏らないようにと話しています。

令和6年8月1日

高知市横浜西町18-6

ことより まなぶ
琴寄 學

電話・fax 088-842-0538

携帯 090-4508-2409

追記

朝鮮遺骨収集全国友の会

北朝鮮の凍土にタクアン漬けのように埋葬してきた、身内の遺骨を収集したい、出来なければせめて墓参だけでも、との会が結成され私も入会していました。けれど会員の方は死亡したり、高齢になつたりして、目的が達成されないまま会の運営が出来なくなり解散しました。

北朝鮮残留孤児

私は6歳の時、北朝鮮の元山から60里（240K）を徒步で白岩山を越え38度線を突破して、日本に帰ることができました。それは私は足腰が強く歩けたからです。北朝鮮には取り残された子供達がいるはずですが、話題にすらなりません。

日本人妻

地上の楽園を求めて、1957年（昭和32年）から帰国事業が始まり、1984年（昭和59年）まで約10万人の方が新潟港から北朝鮮に帰国しました。その中に朝鮮の男性と結婚した日本人の女性が約2千人程いました。しかし親の生きている内に、いや自分が生きているうちに一度でも里帰りしたいとの希望が叶えられた方は、50人ほどです。ほかの方は今どうされているのでしょうか。

妹の遺骨

引き揚げの時、身体のあらゆる所を調べられ、持ち物は全て取り上げられました。私は昭和19年に3歳で亡くなった妹の骨壺を持っていました。骨壺は何処でも調べられる事はなく、遺骨の中に隠していた貴金属は無事でした。私たち家族は妹に助けられたのです。

戦犯で処刑された朝鮮半島出身者

朝鮮半島の人たちに、日本国は日本人以上に日本に対する義務を押し付けました。それで多くの方が日本兵として戦いました。その中には戦後戦犯（主に捕虜虐待）として処刑された方が約30人程おられます。

日本語

韓国を旅行中の日本の若者が、日本語の上手なお年寄りにどこで覚えましたかと、聞くと「覚えたのではない、覚えさせられたのだ」と怒りを込めて答えられたそうです。

38度線

第二次世界大戦終了時にアメリカは、北緯38度を境にして南北をそれぞれの軍隊が分割占領することを、ソ連に提案しソ連もこれを受け入れ、平和ラインが制定されました。

南は昭和23年(1948)8月15日、李承晩(イ・スイマン)大統領が大韓民国の成立を宣言しました。そして北は金日成(キム・イルソン)が翌月の9月9日朝鮮民主主義人民共和国を成立しました。

だが南北に国が成立した2年後の昭和25年(1950)6月5日の日曜日、北朝鮮軍が38度線で一斉に砲撃を開始し、朝鮮戦争が勃発しました。ソ連から武器の供与を受けていた北朝鮮軍は優勢で、もなく韓国軍は釜山まで攻められ海に追い落とされ朝鮮半島は北が軍事統一するところまできたのです。

アメリカのトルーマン大統領が国連軍を創設し、国連軍司令官にマッカーサー元帥を指名し全面介入しました。国連軍は仁川に上陸し北朝鮮軍を撃ちにし、中国との国境近くまで追い詰めました。すると毛沢東首席が「義勇兵」を組織して朝鮮に送り込みました。国連軍は正体不明の敵の精銳部隊に遭遇し、追い戻され一度は取り戻した首都のソウルを再び放棄します。態勢を立て直した国連軍は反撃に出て再びソウルを奪還して、38度線付近で膠着状態に陥り、一進一退の激戦になり両軍に死傷者が続出します。それで休戦協定の話し合いが板門店で始まり、昭和28年(1953)7月27日に国連軍・北朝鮮・中国が調印して休戦協定が成立しました。しかしながら休戦協定に不満の韓国側は調印していません。南北両国は、ほぼ北緯38度線を境に軍事境界ラインで分割されましたが、現在でも休戦ラインです。

「この戦いで国連軍司令官のマッカーサーは、原爆の使用の許可を求めましたが、トルーマン大統領によって解任されました。」

在日韓国人・朝鮮人

日本の支配下で土地を奪われた人や、働き場所を求める人たちが、日本に渡りました。日本国内の労働力不足を解決するために強制的に連れてこられた人たちもいました。

日本の敗戦当時、日本本土には 200 万人を超える朝鮮半島出身者がいました。この人たちや、その子孫が在日韓国・朝鮮人なのです。

日本の敗戦後、朝鮮半島に戻らず日本に留まった朝鮮半島出身者の身分は極めて不安定なものでした。日本の敗戦で多くの人々が帰国しましたが、生活の基礎が日本にある人や、故郷の親族が全て亡くなったり、土地を失っていたりした人は、そのまま日本に留まりました。帰国しようと思っているうちに朝鮮戦争が始まり、帰国するタイミングを失った人たちもおりました。

この人たちとは、日本が朝鮮半島を支配している間は、一応日本国籍を持っていましたが、1952 年（昭和 27 年）のサンフランシスコ講和条約発効とともに日本国籍ではなくなりました。

日本に住む外国人は、「外国人登録証」の携帯が義務付けられています。「日韓基本条約」の締結とともに、韓国だけが国籍と認められるようになり、国籍欄を「韓国」と書き換える人が増えました。

この人たちとその子供は「永住資格」「義務教育」「生活保護」「国民健康保険」についても、日本人に準ずる扱いになっています。

(そうだったのか日本現代史 池上 彰)

韓国籍 42 万 7 千人 朝鮮籍 2 万 7 千人

日韓基本条約と漢江の奇跡

1965 年（昭和 40 年）6 月、日本（佐藤栄作政権）と韓国（朴正熙政権）との間で調印された条約です。これにより日本は韓国を朝鮮半島唯一の合法政府と認め、韓国との国交を樹立しました。また韓国併合条約など、戦前の諸条約の無効も確認しました。両国間の交渉の問題点は賠償金でしたが、交渉の末、総額 8 億ドル（無償 3 億ドル・政府借款 2 億ドル・民間借款 3 億ドル）の援助資金と引き換えに、韓国は請求権を放棄しました。

これは韓国の国家予算（当時）の 2.3 倍もの金額で、朝鮮戦争で壊滅的打撃を受けていた韓国が、短期間で急速な復興および経済成長を成し遂げ、世界でも 10 位圏の経済大国に発展しました。

このことが「漢江の奇跡」と呼ばれています。

遠きにありて 35

「10円」の卵

大澤重人

元毎日新聞高知支局長

高知市の琴寄學さん(82)は中学生のとき、押し入れでよく泣いた。6歳で父虎三さんを失い、友達が父親と遊ぶ姿を見ると涙が止まらなかつた。

中国(当時は朝鮮)国境に近い朝鮮北部の恵山鎮の生まれ。敗戦でもぐに引き揚げることができず、日本海に向した元山に留め置かれた。朝鮮北部を占領したソ連(当時は)が、南部に通じる北緯38度線を封鎖したからだ。日本人たちは酷寒の越冬を強じられ、凍死、伝染病死、餓死が相次つた。

虎三さんが亡くなつたのは敗戦翌年の1946年3月。元警察官とばれて朝鮮の保安隊に連行・射殺された後のことだ。歩けないほど弱りきつており、拷問されたと感じた。享年42。カマスに包んで畠の間に埋めた。植民地政策を遂行する「力」となった警察官は、誰しも民族的な恨みの対象とされた。

ソウルで召集解除された伯父が翌4月、助けに来てくれた。朝鮮人を裝つて鉄道に乗り、南から38度線を越えてきたのだ。一家は、伯父の先導で収容所を脱出した。幼い琴寄さんは母はまのさんや3人の姉とともに人に口を避けて山道を走り、38度線を突破した。10田園、240ヤードもの長旅だった。

「えらかったな、強かつたね」母は畠に涙をため、4人の子をねぎらつた。

帰國後、高校卒業まで和歌山県新宮市で暮らした。ゼロから生活を引き揚げ以上に大変だった。亡き父のわざかな恩給に加え、病弱な母の代わりに7歳上の姉が働いて一家5人の生活を支えた。

小学校のとき、木下サーカスが近くに小屋を立てた。歌手の美空ひばりが映画で乗つたという象が巨玉だった。「金がないから行けんのですよ」暮間にテントが開くと中が一瞬見えた。それを楽しみに何日も通つていたら、金を渡してくれた。

戦争でどん底に落ち込んだ日本経済が、朝鮮戦争(50~53年)による朝鮮特需で息を吹き返す。中学生になる頃、父子でピクニックに行く家庭も出てきた。そんな姿が少年の心を傷つけた。追い打ちをかけるように母はまのさんが結婚を患い、寝込みがちになつた。

琴寄さんは新聞配達と家庭教師をしながら高校を卒業し、大阪の建設会社に就職した。

「社会人になつてからは楽でした」

高知に転勤後、地元の会社に移り、定年まで勤め上げた。今はボランティアで高知市の観光ガイドをしたり、引き揚げ体験を小学校などで語したり。周囲の優しさに教わられた少年時代の恩返しのつもりだ。

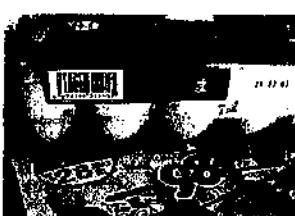
今も田舎に妻とスーパーに出かけなど、卵の値段に自然と目が行く。あとのとき振り締めた「10円」の感触を懐かしみながら。

軒行つても10田の卵はないんですよ。12円か13円か14円なんですよ。そつや、岐に同級生の家族がしとる八百屋さんがある。行ってみたんです。おばさん「10田の卵など?」「って聞いたから、察したわけですねえ。『あるであります』14田の中から一番大きいのを新聞紙に包んでくれて。その卵を完物のようにして持ち帰つて、おふくろに食べさせてあげました」

琴寄さんの母は中学校3年のときにはねへとなつた。43歳の若さだった。

琴寄さんは新聞配達と家庭教師をしながら高校を卒業し、大阪の建設会社に就職した。

「社会人になつてからは楽でした」



物価の低落とと言われる卵。今でも10個98円(税別)で売られることが京都市内で



Ohzawa Shigeto Profile

1962年京都府舞鶴市生まれ。元毎日新聞高知支局長。源来人歴史館(大津市)専門員。著書に「咲くや めくげの花—朝鮮少女の想い越いで」、「泣くのはあしたー従軍看護婦、九五歳の歩跡」(第26回高知出版学術賞特別賞)など。いずれも富山房インターナショナル刊。京都市在住。

私が小学六年生の時に書いた作文です。

朝鮮の開拓

千穗小六年
琴符

僕は平和な北鎌の田舎にすくすくと育ち、もうすぐ一年生になれる喜びを両親に話しては「アイウヨオ」と音読し、本當に幸福な毎日を過していました。しかしこの幸福も終戦というみじめならずの中にまきこまれ、余るしづい懸の手が、僕たち家族の上におそいかかって來たのでした。

僕たちは昭和二十年を最後に、なつかしいよるさとを後に、みじめな避難民となつて、着のみまま、無がい事に乗せられ祖國の日本へ歸されました。その時僕は七つでした。

のような日に會つたのです。でもそれからのお母さんは、人一倍頬くなりました。「もう泣かなくていいよ」お母さんはきつと内地につれてどうしてやるよ」としきりではげまじでくれました。お母さんは又「どんないきした。

した。母は僕たち四人の姉弟に
「えらかづたね、強かづたね。」
といいながら、目にのみだを一
ぱいためていました。僕の手を
にぎり、「今から大きな聲で、
日本語をつかつてもよいのよ。」
といつたので、うれしくてたま

少し調子を變るめたことが何よりも厭惡なことです。東京の繪選作。
〔片山春培〕

のよくな日に會つたのです。でもそれからのお母さんは、人一倍頬くなりました。「もう泣かなくてもらひし。お母さんはきっと内地につれて、つてやるよ。」といひてはげましてくれました。お母さんは又「どんなことがあつても、六十里の道は歩くね。」といつたので、僕は「はい。」と答えました。間もなく僕たちは逃げ出しました。三十八度度焼をどうしても突破しなくてはなりません。京城まで六十里の道は北鮮と南鮮のさかいで、その道はどうしても通れません。僕たちは山を行くことになりました。道にはおいはぎのような人がいて、色々な物をとつてしまひます。白岩山を登る途中あらばにも、こちなにも死がいがるるころがつています。足があつていいものさうにはれ、ころころしてあるいでいます。僕はああいうことで、いつ京城へつくのだろうと思ひました。水の中にはまりこんで生きかかれをする人、朝鮮人にたたかれがけから落ちてしまふ人、言うに言わん苦労をしました。とうとう十日間で京城につきました。

した。母は僕たち四人の兄弟に「えらかただね、強かつたね。」といながら、目になみだを一ぱいためいでました。僕の手をにぎり、「今から大きな聲で、日本語をつかつてもよいのよ。」といつたので、うれしくてたまりませんでした。

その後僕たちは六年間母の手一つで育てられましたが、こうして懃しく学校に通えるのもお母さんのおかげです。

しかし、とにかくやさしいお母さんも旅の疲れが、今年の二月からやまいになり、とことつじて死きました。

戦争されたかたのお父さんもきつと元氣でいてくれるでしょるし、もつと幸福に暮らせるでしよう。僕たちだけではありますせん、同じように戦争のために苦しんでいる人も多いことでしょう。もうあらめじめな戦争は絶対に止めるようく僕も努力したいと思います。

野　あなたの物の見方には一つ一つに非常に深いものがあります。ことにお父さんをかまますに、なんであたりや三十八度座りつけないこと、お母さんのやさしいおこぼなど人をひきつけずにはおきません。ただ怒りの方で

思い出の写真

私は6歳の昭和21年(1946)4月5日抑留されていた北朝鮮の元山を脱出して、38度線越えの60里(約240キロ)を十日間掛かり徒步で突破して内地(日本本土)に引き揚げて来ました。必死の行程の中で頼れるのは自分の足だけでした。歩けなくなり取り残された子供達を目撃しています。それで足腰には自信があり、小学生時代駆けっこだけは誰にも負けませんでした。5年生の時選ばれて(和歌山県新宮市立千穂小学校)中学校の運動会の小学校対抗リレーで活躍して優勝した時の写真です。私は左から二人目ですが、四人共ランニングシャツが違います。揃いのユニフォームなど夢のまた夢の時代でした。胸のマークは校章の八咫鳥(ヤタガラス)です。八咫鳥は日本神話で神武天皇が日向から大和檍原に向かう東武東征の際、山深い熊野を案内した三本足のカラスです。私はこの校章を大変誇りにしていました。又日本サッカーの生みの親と言われる、中村覚之助(1878~1906)さんが当地の出身の縁で日本サッカーのシンボルになっています。

73年前の思い出の深い写真です。

高知市横浜西町18-6

琴寄 學



前列左から二番目が私です

この少年は私ではありませんが、年齢・体験など
全く同じ環境の少年です。



北鮮からの引揚者 たゞひたすら南へ向かって歩いた 間道を抜け 山道を進み 河を越えた 38度線
を突破しあえたときは皆で抱き合って泣いた この子もよく耐えた 足どりも確かだ 21年夏益山にて

早野朝子さん著「涙痕」より



残留孤児として中国社会を生き抜く-池上利久さんの体験-（概要）

高野 好美

（中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部）

満洲へ渡る

今日お話しするのは、7歳で一人中国に取り残され、中国残留孤児として生きてきた池上利久さんの体験です。池上さんは1938年に長野県上伊那地方に生まれました。そして生後7日で父母と共に、現在の中国、黒竜江省にあった哈達河（はだほ）開拓団に農業移民として渡りました。6歳の時、池上さんは国民学校に入学しましたが、病気で学校にはあまりいけませんでした。大人の農作業のそばで遊んだり中国の子供たちと遊んだりして過ごしていました。

ソ連進攻と逃避行

1945年の8月9日、ソ連軍が満洲に攻め込んできました。突然の知らせに開拓団員は慌てて避難するための準備をして、8月10日の朝まだ陽の上がらないうちに集団で出発しました。池上さんの家族は、集団の後を追うような形で、夜、出発しました。

あくる日、街はずれの橋をもう少しで渡りきるというところで、ソ連軍の飛行機の爆撃と銃撃を受けました。大人が乗った2台の馬車は御者も馬も撃たれてひっくり返っていました。お父さんが池上さんのところに来て、みんな死んでしまって残っているのは自分たち二人だけだと言いました。その直後、「あそこへ逃げろ」と言う声と同時にお父さんの顔は銃撃で吹き飛ばされました。池上さんは必死でお父さんが指さしたところに逃げました。「お父さん」と呼びかける間もありませんでした。

幸い柳の根元に人ひとり入れるような穴があったのでそこに隠れました。池上さんはお父さんもお母さんも死んでしまってどうしたらいいだろうと思いましたが、銃撃はいつこうにやみません。川面に銃弾が降ってきて水面が揺れていました。

その後、池上さんは中国人の劉さんという家に引き取られました。劉さんの家では5年暮らしました。そこでは、豚や牛の世話、庭や家の掃除をさせられ、仕事がうまくいかないとき頭を叩かれ、頭をかばうと背中を鞭で打たれました。「日本人め」といっては叩かれ、零下30度にもなる冬には戸を閉められて入ってくるなど外に追いやられたこともあります。食事も足りず、食べ残しは犬や猫にやるのですが、あまりにも空腹で犬の残したものを持ち食ふこともあります。しかし、これも見つかると犬の物を盗んだといっては叩かれました。

あまりの待遇のひどさを見かねた役所人が、池上さんを高さんという人の家に連れて行きました。池上さんの姿を見た新しい養母は、育ててい



講話を進行する高野好美さん

た牛とブタを売って、新しい服と布団を買ってくれました。この家に来てからは殴られたり寒さに凍えたりすることはなくなりました。そして 4 年生まで学校に行かせてくれました。

創意工夫の中国時代

15 歳で小学 4 年を終えた池上さんは、その後さまざまな仕事をし、春雨工場では材料のジャガイモを早く潰す機械を考案するなど、創意工夫に努めました。19 歳の時、炭鉱に職を見つけ、20 歳の時には鉄鉱石を碎く機械を考案し、それが認められて主任に選ばれました。しかし、何かを成し遂げたいと思って努力しても日本人だとわかると仕事を外され、主任から工具に降格させられ、給料も上がりませんでした。こういうことが続いたため、自分は日本人なんだ、という思いをだんだん強くし、日本に帰れるものなら帰りたいと考えるようになりました。

1966 年になると、中国では「文化大革命」が起こりました。池上さんは共産党の入党申請をすると調査で日本人ということが分かり、日本のスパイと言われて、職場での地位もなくなりました。それからは日本人とわかりそうになると次々に職場を変えました。この頃、貧しい農村出身の女性と結婚し 3 人の子供を授かりました。

日本帰国へ

1972 年、日中国交が正常化しました。池上さんは日本への思いが募りましたが、実際に日本に帰るための準備を始めることができたのは 1980 年でした。そして日本人である証明書類がそろったのは 1985 年のことでした。

1986 年、池上さんは残留孤児が日本に来て肉親を捜す「訪日調査」に参加しました。この時に長野県にいるお姉さんが名乗り出してくれ、長野からお兄さんが東京まで会いに来てくれました。この 2 人は戦前に満洲に渡らなかった兄姉でした。そして 1987 年、妻と二人の娘、息子、養母の 6 人で長野に一時帰国し、実の両親の墓参りにも行くことができました。

5 年後の 1992 年に養母が亡くなり、永住帰国のための準備を始めましたが、今度は日本の親族に手紙を出しても返事がなく書類が整いません。既に日本に帰国している残留孤児の知り合いが身元引受人になってくれ手続きをしてくれました。

永住帰国と言葉の壁

日本帰国後、最初の勤め先は電気関係の小さな工場でした。日本語ができなければ正社員にもなれないし、給料も上がらないというので、今からだと一生かかっても無理だと思い、この仕事はやめてしまいました。

次に勤めたのはドラム缶の会社でした。相変わらず日本語ですんなりやり取りはできませんでしたが、真面目な仕事ぶりが認められて工具から技術職になりました。この仕事を

定年退職する 60 歳までやりとげ、退職してからも 3 年くらいは人手が足りないときに呼ばれて仕事をしました。

池上さんの「今」

池上さんの信条は創意工夫だと言います。日本に帰国してからも職場での創意工夫を続けました。退職してからは農園を借りて夫婦で有機肥料を自分で作ったり、帰国者仲間に畑作りのコツを教えたりしています。池上さんは今年で 86 歳になりますが、どのような状況になっても、自分で考えて前に進もうとする彼の姿勢が壮絶な逃避行を乗り越えさせ、困難な少年時代の生活を耐え抜かせました。

しかし、強い帰国への望みをもっていたにもかかわらず、様々な事情で 20 歳の池上さんの思いがかなうまでに 36 年かかりました。さらに 56 歳になってから日本語を新たに身につけることはほとんど無理でした。孫と話すときも娘や息子の通訳が必要です。今は落ち着いた日々を送っている池上さんですが、日本語の面では今も苦労しています。

私は池上さんのお話を伺って、私たちに今できることは、数少なくなつてゆく体験者に寄り添い、その体験と思いを聞き取って後世につないで行くことだと思います。皆さん前の世代の方たちは池上さんと同じ時代を生き抜いて、今の私や皆さんにつなげてくれたのです。命を繋げられなかつた多くの人がいた時代を忘れないでいたいと思います。そしてその時代を物語ってくれた人のことばを大切にしていきたいと思います。

「中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部」とは？

首都圏中国帰国者支援・交流センターでは、普及啓発事業の一環として、2016 年より中国残留邦人、樺太残留邦人等の体験を次世代が受け継ぐための戦後世代の語り部育成研修を始めました。研修生は 3 年間の研修中に残留邦人（帰国者）本人から直接その体験を聞き取り、その体験を語り継ぐ人間として自分の語りを完成させていきました。現在、「戦後世代の語り部」として 13 名が活動を行っています。語り部は 30 代から 70 代の方たちで、帰国者の 2、3 世の方もいますし帰国者とは縁のない方もいます。

本格的な活動は 2020 年ぐらいから始まりましたが、現在は年間 4、50 箇所、北海道から九州までご依頼のあるところへ伺う、出前講話を行っています。語り部について、申し込み要領については、当センターホームページにございますのでご覧ください。交通費、謝礼なども不要ですのでお気軽にお声をおかけください。

首都圏中国帰国者支援・交流センター（月・祝休館）
〒東京都台東区東上野 1-2-13 カーにプレー新御徒町 7F
電話：03-5807-3171 メール：kataribe@sien-center.or.jp



第7回集いの質疑応答

3人の報告後に行われた質疑応答について記述する。質疑応答の場には、報告者の中村江里さん、琴寄學さんのほか、首都圏中国帰国者支援・交流センターの馬場尚子さん、満洲の歴史を語り継ぐ高知の会の織田千代子さん、岡田としさんの3人が登壇して、戦争とトラウマに関する体験や調査結果について話した。司会は語り継ぐ会の楠瀬慶太さんが務めた。以下、質疑応答の内容を記す。文字起こしは織田が担当し、楠瀬が校正を加えて構成した。

楠瀬：すみませんお待たせしております。そろそろ質疑の方に入りたいと思うので戻ってもううたらと思います。それでは質疑に入る前に少しだけ「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」でも、「戦争とトラウマ」という問題について、事前にいろいろ考えたりしてきたところがありまして、そういう体験のある方が会員の方にもいらっしゃるので少しそんな話を伺いした上で、皆さんの質問という形にいきたいと思います。まず、最初に岡田さんの方からお願いします。

岡田：私の母も満洲から引き揚げて来まして。その時が20歳前で大変苦労して、むごい場面とか自分の甥が亡くなったりとかして、心を痛めて帰ってきても、何というのかふぬけというか、そういう感じで暮らしてまして。やっぱりそれが母の性格とかそういうのが、今もって私にも残っているんじゃないかなというふうに思っています。

それで「トラウマ」っていう問題ですけれども、日本人っていうのは残留孤児にしろ、帰国にしろ、また水俣の公害にしろ、また避難者にしろ、すごく心を痛んで本来ならば被害者で大事にされる人を、なぜ同じ日本人が差別をしたり、偏見の目で見たりするんだろうというのが、すごく私は疑問に思ってます。本来大事にされるべき傷ついた人々を、同じ日本人として二重に差別し、変な目で見るというのは、本来のトラウマよりさらに厳しい状態に置かれるのではないだろうかと。なぜ、この問題がこんなに長く放って置かれて、そのまま放置されるのだろうというふうに日頃から思っています。それを止めるためには、やはりこれを知って、真実を知って語って、やっぱり知ることしか次の連鎖を止めることがないんじゃないかなというふうに考えます。

これから先にまた日本も戦争が絶対に起こらないという保証がないので、そうなったら80年も100年も皆さんのお子々孫々につらい思い、トラウマを伝承してしまうんだということを、いろんな所で学んでいただけたらいいなというふうに思っています。今日はありがとうございました。

楠瀬：ありがとうございます。岡田さんは今年7月にも第6回の集いでお話ししてもらつたんですけど、お母さんが引き揚げの段階でかなり精神的にダメージを受けて、戦後岡田さんが生まれた後もちょっと育児放棄というか、そういうような状態がずっと長く続いていたということで。やっぱり戦争の傷っていうのがすごく家族の中にもあって、岡田さん

は最近こういう問題が言われるようになって、少し自分の境遇とかと重ねるところもあって、またいろいろ高知の方でもそういう人たちとお互い語り合っていったりすることができればということで。全国にもそういう語り合う会というのができているので、高知でもそういう会ができたらというようなことを考えられているので、またそういう発展も語り継ぐ会の方からしていけたらなというふうに思っています。

それで今回岡田さんは高知の方なんんですけど、今回残留孤児の体験を高野さんにお話ししてもらいました。先ほど高野さんお話ししてもらったように、結構残留孤児の人たちとかに聞き取りもかなりされているわけなので、そういう中で「戦争とトラウマ」というものが、残留孤児の人たちの体験の中にあったのかなという話を、首都圏中国帰国者支援交流センターの馬場さんが、今日来ていただいているので、高野さんの話の補足にもなると思うんですけど、少し話をしていただけたらと思います。

馬場：中国帰国者支援・交流センターの馬場と申します。支援・交流センターは帰国者の日本語学習支援、生活支援、次世代の語り部育成などの普及啓発事業等を行っています。今日は、中国残留日本人の中でも残留孤児となった人の体験が、その後本人の心にどのような影響を与えるだろうか、と一緒に考えていただければと思います。

ある児童虐待に関する研究では、身体的な児童虐待の場合、脳に大きく影響する年齢は6歳～8歳という風に報告されています。先ほど高野さんがお話した池上さんは7歳から苛酷な体験が始まりました。少しほかの方の例に触れます。

7才のDさん。逃避行中家族が仮眠をとった小屋で現地民に襲われ、目の前で父親の頭に銃弾が貫通し血だまりの中の父親の姿を記憶しました。そして一人で走って逃げたところを現地民に追いつかれ、こん棒で何度も頭部をたたかれ意識を失いました。何とか九死に一生を得、頭に傷を負いながら山の中を一人で逃げました。

9才のTさん。逃避行の中、地元民に四方を囲まれ銃撃に遭い、大人も子供も半狂乱で逃げました。マイナス30、40度の収容所、食べ物もなく伝染病で祖母、兄、父と次々に亡くなりました。幼い弟と二人で父の亡骸を引きずって、うずたかく積まれた死体の山に父を置きました。

6才のSさん。集団自決しようと青酸カリを飲もうとしたSさんとおかあさんは間一髪のところを中国兵に助けられました。その後、その母親は町中で3人のソ連兵に暴行を受けSさんはそれを目撃してしまいました。だんだん精神を病んでいった母親は死ぬまでオンドルの台の上から動きませんでした。

どの例も今であれば子供への深刻な虐待や苛酷体験として、心のケアが必要とみなされると思います。当時の子供たちはそのあとも自力で生き抜かなくてはなりませんでした。中国残留孤児は中国人家庭に引き取られますが、第二次大戦は終わっても中国はしばらく国民党と共産党との内戦が続き、残留孤児たちもこの戦争に巻き込まれ更なる逃避行を体験したり、共産軍の包囲網の中で再び飢えを体験した子供もいました。

また、良い養父母にもらわれて手厚く育てられた例もたくさんありますが、労働力とし

てもらわれた場合は、過酷な生活をした人もいます。8才のKさん。預けられた家でお金を入れるために豚の世話を住み込みでさせられ、家に戻っても物乞いをさせられて食べ物も口に与えられませんでした。着るものももらわれた時ままでぼろぼろの布切れになっていました。何かにつけ折檻を受け、周りの子どもからもいじめられましたが他に行くところもなく逃げ出することもできませんでした。

8才のWさん。当時の中国の農村部には「童養媳」という、男の子のいる家で将来その子の嫁にするために幼い女の子を引き取って一緒に生活させるという風習がありました。Wさんも貧しい農家に引き取られ家事や農作業をさせられ、周囲から「嫁」「嫁」と言わしながら、学校にも行けず生活しました。

残留孤児は、その後大人になってからも中国の長い政治闘争の中で、日本人であるということで批判の対象になる可能性が高く、常に誰かに告発されないかという不安の中で注意深く暮らしていた人が多いです。自分や家族が投獄されたという人もいますし、常に監視の目があったという人もいます。以上のように幼少期のショッキングな体験だけでなく、その後の中国生活も恐怖や危機を感じる体験を続けた残留孤児も多いのです。

そして日中国交正常化後、日本帰国への可能性が見えた時、期待に胸を膨らませた肉親捜しでも、結局親族が見つからなかったの方が多く、中には肉親がわかったとしても受け入れを拒否されるということもあり、何度も絶望を味わう残留孤児もいました。中高年となって日本に帰国した残留孤児たちは、ほぼ日本語ゼロからのスタートですから、言語や文化習慣の壁にぶつかり大きなストレスを受けます。また、職場や地域社会で差別的な言動を受けたり、子供の学校でのいじめなども経験します。また、言葉の問題で家族であっても世代間のコミュニケーションが難しくなるという事態も経験します。遠くにいて思っていた「祖国」とは全く違う現実に、新たな心の傷を受けることになりました。

現在、残留孤児だった方の年齢も80歳前後となりました。しかし、高齢となった今も幼少期やその後の体験が頭から離れない帰国者や心を病む人もいます。例えば、△目の前で見た親の死が原因で悪夢をよく見たり、親が殺された場面がフラッシュバックすると2,3日眠れなくなる△戦争を連想させる音声やテレビに拒否反応があり、終戦の時期が来ると気持ちがひどく落ち込む△部屋に誰もいないのに「着物を着た女人や子供が30人ぐらいいる」と訴える人がいる△残留孤児の母親が死ぬ間に「満人が来た！満人が来た！」と叫んだ△常に人に監視されている気がすると訴える人がいる——など、今も過去の体験の影響と見られる現象があります。

幾度となく降りかかる苛酷な体験が重なったせいか、周囲の支援に対しても疑心暗鬼になったり人間不信になったり、常に苛ついていたりするケースも見られるという支援者からの声もあります。ある精神医療の専門家は「幼児期のトラウマ体験によってその後の苛酷な体験にもっと傷つきやすくなる。そして、思春期、青年期、進学、就職、結婚、育児、老年期などストレスを受けやすい時に『幼児期のトラウマと大人になってからのストレス体験とが反応して雪だるまのように大きい心理的困難』となる。幼児期のトラウマは拾わ

なくともいいストレスを拾ってトラウマとなる」と言っています。

残留孤児・帰国者の人生にもこれに当てはまるようなことが起こる可能性があるのではないでしょうか。もちろんすべての残留孤児が今トラウマ体験に苦しみ続けているわけではないです。苛酷な経験を乗り越え幸せな今を過ごしている帰国者は大勢います。しかし、記憶の中にはなかなか過去にならない消えない体験が残っている人は少なくないです。時々そちら側の記憶に占められてしまう方もおり、これまでの道のりを1時間も2時間も電話の向こうで語られる方もいます。

このような事実はなかなか表に出にくいで。日本語で自分の体験や現在の状態を直接周囲の人や医療者に説明できる人はごく稀ですし、自分自身でも自分の不調の要因について自覚的になることは難しいと思います。現在、残留孤児の方々もかなり高齢となり、徐々にいなくななりつつあります。最近、戦争によるトラウマ、PTSDの問題がやっと世の中で認知されるようになってきています。なかなか声を持てない残留孤児、中国帰国者についても、その出発点からその後の人生の過程を通して想像していただき、その心の傷について考えていただければと思います。

楠瀬：馬場さんありがとうございます。それでは琴寄さんからもひと言。

琴寄：私は父親は北朝鮮の元山で亡くなりまして、凍土に30センチほど掘った所に何人も放り込んでたくあん漬けにしてきたんです。このようにあのう北朝鮮にですね、たくあん漬けにした人の遺骨を収集したいと。できなかつたらせめて慰靈だけでも行きたいという朝鮮遺骨収集全国友の会というのができちやったんですよ。だけどそこに入っちゃった人たちがですね、高齢のためにね、お墓に入ったんですね。だけど、この朝鮮で起ったこの悲しいことをね、ほとんどの人がもうお墓を持って行ってしまったんです。それで名前も言いますが、早野朝子さんという人とですね、もうみんな逝ってしもうたと、残された2人だけがですねえ、本当の真実を語る義務があるんやないかと話し合って。早野さんも亡くなつて僕一人になりましたんで、僕はこうやって話をさしてもらつとるんです。

まだね、僕はね、話せるだけね、恵まれるとと思うんですよ。話せるだけね。もう絶対にね、話せんことがどっさりあるんですよ。そらなかにはね、38度線を越える時にね、子供が泣きしゃべくるからもういかんということで、その子供をきっちり縛ってきた人もおるんです。僕も目撃します。ほんで何人もですね、子供たちがね。僕はね、あの6歳で足がまだ強かったから歩けたんですけど、置いてこられた子供たちも。その北朝鮮残留孤児という人はおると思いますけれど、話題にもならんでしょう。

それから30年くらいから帰国事業で10万人ほどの人が帰られました。その中に2000人ほど日本人の女性がね、朝鮮の人と結婚した日本人として行ったけど、その中でですね、自分が生きてるうちに、親が生きてるうちに帰りたい、自分が生きてるうちに帰りたいと帰れた人は50人ぐらいしかおらんのですよねえ。あとは今どんなふうに暮らしているのか、ずっと日本人であるということを隠して暮らしていると思うんですよ。こんな話をするとな、あそこにおる残留孤児の人らには迷惑かかると思いますけどね。まだこういう国があ

ると、それも本当に日本の間近だということはね、皆さんに知ってもらいたいとそう思います。そういうことで。

楠瀬：ありがとうございます。それでは織田さんの方からも少しお父さんの話をしていただけたらと思います。

織田：織田と申します。今日は中村先生の話を興味深く聞かせていただきまして、ありがとうございました。今回のテーマの「戦争とトラウマ」ということなんんですけど、私の父は戦争には参加をしてはないんですけども、満蒙開拓青少年義勇軍に行っていたことが 10 年前に分かりました。これまで、父の性格についてずっと疑問に思っていましたが、最近、戦争とトラウマという言葉を知って、何か関係があるのではないかと思っていますので、話をさせていただきます。

父は性格的にすごく私にとっては嫌いで、今まで父に甘えたこともないですし、可愛がられたっていう記憶もありません。今一番子供の頃の記憶として残っているのが、弟に対してとても厳しく叱っていたことや、母に対する父の態度というか、今だったら言葉の暴力というか汚い言葉で。本当に母にいつも言っているのが耐えられなくて。私が小学高学年だったと思うんですが、母に「何でお父さんの言うことを黙って聞くの」て聞いたら、「お父さんはね、世の中自分中心に回っていると思っている人やから、私が何を言っても聞いてくれんから私は言わん」。そう言った言葉が父の性格のすべてを表しています。だから、家族に対する思いやりや、情のない自分勝手な父親だろうと思って、私は思春期になつてもいつも父に反抗しておりました。

ところが平成 5 年でしたか、母が突然倒れて高知の病院に 3 ヶ月入院して 67 歳で亡くなつたんですが、その時父は安芸から高知の病院に付き添って、一度も家に帰らずに病室に寝泊まりして母が亡くなるまで私と交代で母を看病しました。その時初めて父の本心というか、優しさを知りました。それから父は今から 10 年前に 93 歳で亡くなつたんですが、亡くなつた後で、初めて父が 14 歳の時に義勇軍に入って満洲に行っていたという事実を知りました。そしてその時に弟から、その隊長さん（中隊長）の名前を（弟が）付けられたという事実も知りました。

そこで、義勇軍についてちょっと調べてみようと思って、ずっと自分なりにいろんな資料を読んだり、体験者の手記などを読みました。父は国策で 14 歳の時に、義勇軍に行つたら 10 町歩の田畠が 3 年間訓練所で頑張れば土地がもらえることを知って、多分それが魅力で、父は満洲に夢を持ってふるさとも、親も捨てて行ったんだと思いました。体験者の手記を読むと、本当に満洲は日本では想像できない過酷な所でした。父があんな所で 14 歳から 20 歳まで一番大事な青春時代をそういう満洲で頑張っていたのに、戦争によって何もなくなつて無になって帰つて来たことを知りました。

戦後は、ハウスでなすを栽培して 80 歳過ぎ迄で頑張っていました。自分は 14 歳から青春時代がなかったのに、私たちが育つて行くのを見た時に、どんな思いで私たちを育ててくれたんだろうかと。また、家族にも一言も言わずに満洲の話を墓場まで持つて行ったこ

とを考えたときに、生前、父の胸の中の思いはどんなだったろうと想像すると、反抗したことが申し訳なくて謝れるものなら謝りたいと思っています。それでちょっと中村先生に質問なんですけど、今日は「戦争とトラウマ」なんですが、私の父は直接戦争には行ってないんですけど、まあ義勇軍といえば軍隊と同じ組織なので、多分そういういろんな辛い経験があって、人に対する優しさとか、思いやりの心が、傷ついたのではないかと。また、何か心に傷を負ったとき、助けてもらったから隊長さんの名前を自分の息子につけたんだろうと、想像するしか私はないんですけど、それはやっぱりトラウマじゃないかと思うんです。ちょっと先生の意見を聞かせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

楠瀬：ここまで聞いた話で、ちょっとコメントいただけたらと。

中村：皆さん本当に貴重なコメントをいただきましてありがとうございます。最初に織田さんの質問に対して回答したいと思いますけれども、織田さんのお父様の場合には、戦闘ということは経験していないのかもしれないですが、おっしゃる通りやっぱり義勇軍として訓練をされるときに、軍隊と同じような非常に暴力的な教育というのが行われていたわけですね。そのこと自体によって傷ついているという可能性があります。それからもう一つは先ほどもお話にあったように、14歳から20歳までという、本当に何というんですかね、青春時代を本来であれば送れるようなそういう大切な期間をですね、満洲で過ごして。行った時には、いろいろ理想に燃えて行ったのかもしれませんけれども、それが結果的に国に裏切られたというか、そうした形になったということで、非常にそのこと自体に傷ついたという、そういうことがあるのではないかと思ったんですね。

私がお話を伺った方の中にも、終戦前3ヶ月とかで、義勇軍に入ったという方がいらっしゃって。その方はその後、国共内戦にも参加して、結構長い間中国にいらっしゃった方なんんですけど。やっぱりその方も、すごく国に裏切られたというような気持ち、それで怒りというかそういうものがすごく強くて。その方の場合は反戦活動というんですかね、そうしたものに帰ってきてから関わった方ですけど。ただ表では平和というのを訴えるんですが、家族に対しては非常に暴力的で、言葉の暴力ということも含めてあったというような話をされていました。

トラウマというと、恐怖体験というものが中核にある概念だと思うのですが、なんだかちょっとそれだけでは足りないのではないかという気持ちがずっと私の中ではあります。そういう裏切られたという気持ちというんですかね、それがすごくしつくりくるというか。いろんな方の話を聞いていると、それは兵士にしても引き揚げの方にしても、いろんな方の戦争体験に割と共通して言えることなのかなという感じがします。

琴寄さんのお話も本当にお辛い体験だったと思うんですけども、本当にお話いただいてありがとうございます。もしよければちょっとお伺いしてみたいのですが、こういったご自身の体験を語れるようになったのは、いつからなのかということですね。そのきっかけとか、そういうことを教えていただきたいなと思いました。子ども時代に経験した人

というのは、兵士とか大人になってから経験した人とは、また違う辛さというのがあると思うんですよね。子どもというのは、社会の中で非常に弱い立場で暴力にさらされるので、それによってより傷つくこともありますし。またそれを表現する力というのは、まだ十分身につかない段階で暴力にさらされて、それがなかなか言えないとかですね。いろいろなご苦労があったと思うんですけども、そのあたりいかがですか。

琴寄：すみません。最後にね、一つだけ僕が疑問に思っていることを言わせてください。

「北朝鮮」「北朝鮮」と言いますわね。昔日本は“ジャップジャップジャップ”と言われて腹が立ったでしょ。北朝鮮の人も北朝鮮と言うと腹が立つんですよ。だけどねほら、朝鮮民主主義人民共和国って長こうなりますわねえ。僕はねそこがね、どうもね、あの国の呼び名ももうあの人たちが納得する名前で呼んでやるべきじゃないかと。そこがもう根本的にボタンの掛け違いがあるんじゃないだろうかと、僕はね、そう思っとります。なんかあのいい呼び名っていうんですかねえ、納得するような呼び名はないものでしょうかねえ。以上です。

楠瀬：さっきのご質問は聞こえてました。どうして語れるようになったのか。いつから語れるようになったのか。

琴寄：ぼつぼつ語ってますけれど。朝鮮遺骨収集全国友の会というのがあって、さっき言いましたけど、そこへ入って、そこにおる人たちが目的が達成されないままに次々に亡くなって行って。皆亡くなった人は全部、あそこから起こった悲しいことをお墓に持つて行きましたんで。残ったのは早野さんと二人。残った二人が本当の話をですね、伝える義務があるんじゃないだろうかという話をしまして。そして、早野さんは亡くなりましたけど、僕は一人残りましたんで、僕はその前からちよくちよくはしますけど、こういう活動をさせてもらっています。さっきも言いましたように、私はね、こうやって引き揚げてきた時のことを話せるだけまだマシなんですよ。表向いてね、話せない人がいっぱいおるんですよ。そのことも理解していただきたいなと思います。以上です。

楠瀬：大体退職後からぼつぼつということだったですね、たしか。

琴寄：退職するまで、仕事、仕事、仕事でしたもん。どうもどうも。

中村：その遺骨収集友の会はいつできたんですか。友の会？

琴寄：すみません。いつできたかというのを覚えてないんですけどね。解散したのは覚えてます。

中村：解散したのはいつですか？

琴寄：いつやったろうかねえ、すみません(笑)。かなり前ですよ。ほんで、すみません。お寺にね、記念碑をね、山口でのお寺に作ってます。やったと思いますけど、それ、また家に資料がありますので覚えてないですみません。全国組織でした。朝鮮遺骨収集全国友の会という会です。

中村：すみません。いろいろ質問してしまったんですけど。おそらく多分そういう会に参加されて活動される中で、多分同じような経験をされた方にたくさん出会って、それでま

た語れるようになつていったのかなというふうに、想像ですけれど思いました。

そういう意味でも最初に岡田さんがおっしゃっていたように、いろいろ同じような辛い体験をしてきた方々が、高知で集まる場ということができたらいいなというふうに思いました。まあ、この会自体がそうしたものを始めているのかもしれないのですけれども。黒井さんたちがやっている会は、公の誰でも参加できる集会以外に、クローズドというか、少人数で本当に何というんですかね。直接そういう体験を持っている人だけが集まれる場所、そこで話したことは、そこで言いっぱなしで外には出さないという、そういう会もやっているので、私も自分がインタビューした方々同士をですね、時々ご本人の承諾を得て紹介したりとか、そういうことをやってたりするんですけど。そういう会も、また、別途あつたらいいのかなと思いました。はい、よろしいでしょうか。

楠瀬：はい、ありがとうございます。ちょっとごめんなさい。だいぶ時間が押してきましたんですけど、2、3問くらい、もし質問が登場者の方にあつたら受けたいと思うんですけど、どうでしょうか？

参加者1：すみません、コナカと言います。今日こらしてもらったのは、この中村先生の戦争とトラウマ、このお話を、これ（高知新聞の）「読者の広場」の岡田さんの記事から見て、今日ここにあるというのを知ったんですけど。それまでちょっと、チラシを見たこともないし、イベントそのものを知らなかつたんですけど、あの読者の広場の記事というかね、あれがあつて知ってここに来ました。で、トラウマと戦争とかいう言葉で、ひかれて來たがですけど、戦争の長期的影響の学際的シンポジウムか何か、そのあと日本のトラウマ研究というのは、国立機関とか大学機関とかで、そのシンポジウムのあと何か動きが関わつたりとかしているんでしょうか。それと、最新の戦争の長期的影響、今回は戦場から帰ってきた兵隊さんの抱えてきた家庭ということもありましたけど、逆に旦那が戻らんかった家庭とかいうのは何も目を向けられていないみたいなんんですけど。その戦争による長期的影響とかいうのは、また他の視点とかからもまた見たり、研究があるんでしょうか、ということを聞きたいです。

中村：ご質問いただきましてありがとうございます。そうですね、トラウマ研究全体に何か影響を与えているのかというのは、ちょっとまだ分からぬところがありますけども。2021年から始めたシンポジウムなので、コロナの最中から始まつたということもあって、わりとオンラインでずっとやっていたのですが、参加者はずっと増え続けていまして、今もう100人ぐらいは毎回集まるという感じで。しかもやっぱり学際的なので、いろいろな領域の人が参加してくださって、市民の方も結構いらっしゃいますし、そういう意味ではアカデミックな意味というだけではなくて、もっと一般向けの試みとしてやっていますので、私たちの狙いとしては、今のところそれなりに成果はあるのかなということは考えています。「日本トラウマティック・ストレス学会」というところがありますけれども、そこも昔はあまり戦争のことは取り上げなかつたみたいですし、心理学とかの学会もですね、やはりそういう戦争とか社会の問題というのは、あまり見ないようにしてきたという

ところがあったみたいですけども。今日も午前中心理学系の学会で私報告をしてきましたし、そういう感じで結構いろんな領域からお声をかけていただけるようにはなったかなと思います。なので、引き続き頑張っていきたいと思います、ということでおろしいでしょうか。

あと取り上げているテーマというのは、私自身は兵士のことをやっているんですけども、あちらのシンポジウムの方は、いろいろな戦争体験について取り上げていますので。先ほどもご紹介した通り満洲のことも何回か取り上げていますし。夫が帰ってこなかつたいわゆる未亡人という女性については取り上げたことはなかったかなとは思うんですけども、いろいろなことを取り上げていますので、もしよければホームページを見ていただければと思います。

楠瀬：ありがとうございます。時間が迫ってきたのでここら辺りで今回閉会したいなと思います。こちらの運営上の不手際もあって長くなりまして申し訳ないです。また第8回の満洲を語り継ぐ集いも、来年以降またやっていきたいと思っていますので、また今後ともよろしくお願ひします。今日はご清聴いただきましてありがとうございました。拍手。これで閉会したいと思います。皆さんありがとうございました。アンケートをお配りしていますので、またよかつたら……。



質疑応答の様子

第7回集いの感想

校正・編集 小野由美子・楠瀬慶太

☆【中村報告】叔父がビルマの戦地の話をしたことがなく、毎晩アルコールで潰れるまでさまようかのごとく暮らしていたことを思い出しながら聞きました。終わったことでなく、現在も続いていること。至らないことがたくさんですが、もっと若い人に話をできるよう勉強したいとあらためて思いました。

【琴寄報告】自分が知識を深めるだけでなく、体験した方の話を聞くことは、涙とともに受けとめて、若い世代に伝えていくことの大切さをあらためて思いました・

70代女性

☆【高野報告】池上利久さんの人生から中国残留孤児の直面した困難について深く知ることができました。特に身元引受人の制度が、帰国を妨げていた要因だったことを知って憤りを感じました。

20代女性

☆【琴寄報告】力強かった。体験に勝る話がない。言葉の力。

70代男性

☆【琴寄報告】うんうんうなずくばかりです。父の姉夫婦が満洲へ行って帰って来ますのでいろいろ想いがわきます。

私も岡田としさんの声ひろばにて【集いを】知りました。もっと手前よりPRしてほしいです。本日来られてよかったです。

60代女性

☆戦争・トラウマ・長期的影響、様々なものがある。苦労と心理的負担、不可が多かったと思う。連鎖を断ちたい。

50代男性

☆【中村報告】戦争のトラウマについて詳細に語っていたのが印象的だった。戦争は、終わったから良かったとはならず、戦争中の悲しみが何年も、そして次世代にも残っていくものであり、戦争は起きてはならないということが改めて大事なことであると感じられた。

【琴寄報告】力強い声で話しており、琴寄さんの思いが強く伝わってきた。子どものときの戦争体験を聞くことで、戦争がいかに残酷なものであるかが痛感させられた。戦争が起きると、終わってからも問題が続いて行くことが理解できた。

【高野報告】池上さんの過酷な人生を聞き、心が痛む思いだった。中国での生活が続いたことで日本語習得に時間が掛かったり、仕事を退職したりもして、苦しい思いをすることが

多かったんだろうなと感じた。戦争で精神的ダメージを負った人たちへの心のケアが行われるべきだと感じた。

30代女性

☆【中村報告】とてもわかりやすく、戦後生まれで、第2次世界大戦の戦中派である肉親を持つ私世代への宿題だと再認識した。

【琴寄報告】体験した人しか分からぬ事、その時の思い。【ソ連兵やオモニの親切】直に聞くことは貴重。今後このような活動は續けんといかんですね。

【高野報告】私のいとこ【昭和20年生】も条件が異なれば、残留孤児だったかもしれませんと聞いています。関心があるのは私たちの世代くらいかなと思う中、ドラマやいろんなメディアを通して知らしめていかなくてはと思ひます。

70代女性

☆【中村報告】大学の先生らしく色々な角度から研究されていること感じました。若い世代なのに、祖父母世代の「満洲の歴史」を我々団塊世代にお話し頂き、感謝の念で一杯です。

【琴寄報告】遠い昔の幼い頃の記憶でしょうが、まるで昨日の出来事のように語っていただいたお話に、強い感銘を受けました。

70代男性

『高知新聞』記事より

2024年11月27日の『高知新聞』に第7回満洲の歴史を語り継ぐ集いの内容が紹介された。

以下記事の文章のみ引用。次ページにはチラシと集いの写真を掲載した。

戦争体験のトラウマ、可視化を 上智大・中村准教授が講演 高知市

日本でほとんど語られてこなかった戦争体験者のトラウマ（心的外傷）について研究する上智大学の中村江里准教授が24日、高知市で講演した。アジア太平洋戦争後の日本で旧日本軍兵士らの精神疾患が黙殺された構造と、家庭や子孫に影響した事例を示し、「トラウマの可視化は戦争の長期的影響を知る上で非常に重要だ」と訴えた。

中村さんは軍医がひそかに保存した治療記録などを調査し、2018年に「戦争とトラウマ」（吉川弘文館）を出版している。

兵士のトラウマや心的外傷後ストレス障害（PTSD）の問題は、欧米では第1次世界大戦やベトナム戦争を機に社会問題化。しかし日本でPTSDが注目されたのは1995年の阪神大震災後だった。戦争をトラウマの観点で捉える研究も、この後に本格化したという。

なぜ日本では長年、トラウマが「不可視化」されていたのか。中村さんは「公的には病の存在が否認されてきた」「当事者たちが『死に損なった』と『恥』の意識を持ち、沈黙してきた」と戦時中の状況を説明。戦後も「医療、福祉のサポートが欠如し、当事者が安全に体験を語ることが困難だった」と指摘した。

家族への聞き取り調査では「人格が変わった」「怒りやすくなった」「アルコール依存」といった症状が多く、精神を病んだ元兵士を「いないはずの存在」として自宅の一角に閉じ込めた事例も。「復員した夫から暴力を受けた妻が、そのことを周囲に語れない」といった状況も多いという。

中村さんは「戦争トラウマは過去でなく現在進行形の問題。同じような体験をした人同士が語り合える場が必要だ」と呼びかけた。

講演会は「満州の歴史を語り継ぐ高知の会」（大野正夫会長）が主催。県内在住の引き揚げ者らが自身の体験や、残虐な経験で傷ついた親との関係などを語った。

（八田大輔）

第6回集いのチラシ

満洲移民と史料



第6回 満洲の歴史を語り継ぐ集い

今回の集いは、「満洲移民と史料」がテーマ。引き振り返時に史料を持って帰れなかった場合が多く、満洲での歴史を知る史料が少ないとされる中、どのような史料が全国そして海外に残っているのか。活用や譲手を含めて。歴史を語り継ぐための史料の重要性を考えます。

日時	2021年7月28日（日）13：00～16：00	参加無料
場所	高知市立自由民権記念館ホール（高知市桜島4丁目14-30）	申し込み不要
内容		
講師：ヨーナライス（経済社会学者）が「満洲の歴史を語り継ぐための史料」について語ります。		
講師	細谷 勉さん（立命館大学教授）	「史料から読み解く満蒙開拓と引揚者」
講師	橋瀬慶太（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会）	「満洲開拓者の語り継ぎ活動-崎山資料・崎山文庫の形成過程から-」
主催	満洲の歴史を語り継ぐ高知の会	
連絡先	大野 090-7145-2456	
申込方法 満洲開拓者の語り継ぎ活動の開催についての情報が載っています。		



崎山文庫見学会の様子

第7回集いのチラシ

戦争とトラウマ



第7回 満洲の歴史を語り継ぐ集い

今回の「戦争とトラウマ」がテーマ。戦争体験について語り、歴史社会や家族へ与えた影響を考えます。

日時	2024年11月24日（日）13：00～16：00	参加無料
場所	高知市立自由民権記念館ホール（高知市桜島4丁目14-30）	申し込み不要
内容		
講師：中村 江里さん（上智大学准教授） 「戦争とトラウマ—日本軍兵士とその家族の事例から—」		
体験談	琴寄 学さん（横濱の歴史を語り継ぐ高知の会）	「北朝鮮からの引き揚げと船宿の暮らし」
語り	高野 好美さん（中国被虐婦人等の作務と労苦を伝える歴史世代の語り部）	「残留孤児として中国社会を生き抜く-池上利久さんの体験-」
講師紹介	中村江里さん（なかむら・えり） 1982年生まれ。一橋大学大学院社会文化研究科修士課程修了（社会学専攻）。2017年に教壇デビュー。2019年に准教授に昇進。2024年には准教授に昇進。著書に『北朝鮮からの引き揚げと船宿の暮らし』（岩波新書）、『中国の歴史と文化』（岩波新書）、『北朝鮮からの引き揚げと船宿の暮らし』（岩波新書）などがある。	
主催	満洲の歴史を語り継ぐ高知の会	連絡先：大野 090-7145-2456



集い会場にて。左から大野会長、琴寄氏、崎山副会長。

【参加記】高知に刻まれた戦争の歴史に触れて

中森 柚子

(広島大学大学院博士課程前期1年)

このたびのシンポジウム登壇者の中村江里先生につないでいただいたご縁で、初めて高知を訪れました。普段は、史料を中心に机に向かって戦争孤児の歴史について研究を進める私にとって、4時間ほど列車に揺られて高知駅に降りたときに広がっていた清々しいほどの晴天は、このたびの高知滞在の充実を予感させるものでした。

2024年11月23日、事務局長の楠瀬慶太氏と実行委員会委員の岡田とし氏のご高配により、高知の戦跡を訪ねるフィールドワークに参加しました。道中の車内では、「高知地域資料保存ネットワーク」や「高知県の学校資料を考える会」など、地域に残る資料を保存・活用するための盛んな取り組みについてお聞きして、公的機関のみに閉じることなく、地域の人びとの手に歴史が握られていることの重要性を強く実感しました。

「浦戸海軍航空隊碑」、「高知海軍航空隊之碑」の見学を経て、軍用飛行場（現在の高知空港）建設のため廃村となった三島村の「開拓記念碑」に村民の悔恨を痛感したのち、土佐湾沿岸へ移動しました。米軍上陸の有力候補地として多くの兵力が投入された土佐湾では、今も軍事設備跡が散見されます。そのうちの1つである四国防衛軍のトーチカは、分厚いコンクリート作りで、太平洋に面した壁からは外へ銃口が向けられるようになっていました。既に天井や壁は剥がれ朽ちているのを見つめ、実際に米軍が上陸した沖縄戦の惨禍を思うと、このようなトーチカが米軍に抗戦するのにどの程度効果的であったのかについては疑問に思わずを得ませんでした。

南国市に移動すると、広大な畑に無数の掩体が忽然と現れました。大型戦闘機を収容する目的で設置された掩体は、かつて軍用飛行場につながるように整備された滑走路とつながっていました。セメント作りのドームは、現在は古い農機具などが入れられており、ほとんど放置されています。しかし、機体の両翼の形にくりぬかれた穴が戦後80年経っても手を広げてこちらを待っているようにさえ思えて異様に感じました。約80年、無言でこの場に残っているトーチカや掩体群は私たちに何を伝えようとしているのか、今はおだやかな太平洋がかつては地上戦の恐怖を湛えていたことを重ねて、深く考えることのできた時



▲四国防衛軍のトーチカ



▲前浜掩体群5号掩体

間となりました。

その後、「加害」「被害」「抵抗」「創造」の4つの柱をもって運営されている民立民営の平和資料館「草の家」を訪れました。「草の家」の語り部活動をきっかけに戦争体験を語り始めた岡村正弘館長の「小学生に100回、200回と話すようになって感情をやっと繕えるようになった。送ってもらった感想文は皆感じ方が違って、それぞれに伝わっていることがわかった」とのお話に、語りを記録し後世に伝えていくためには、語る人と、その言葉にじっと耳を傾けてうなづく人のどちらもがその場に居合わせることこそが不可欠であるということを改めて強く感じました。



▲草の家にて岡村館長のお話を聞く

11月24日、高知市立自由民権ホールにおいて開催された「第7回満洲の歴史を語り継ぐ集い」に参加しました。当事者が声を持つことができない原因是、精神疾患への差別的なまなざし、聞く人の想像力の欠如、固定化された家族観・ジェンダー観などの様々な要因が絡み合っているということを、中村江里先生の基調講演、琴寄學氏（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会）による北朝鮮からの引揚げ体験講話、高野好美氏（中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部）による講話から痛感しました。会全体を通して、家族の歴史の奥底に沈殿して見えないものとされてきた戦争の長期的な影響を掘り起こし、確かにあったこととして社会へとひらいていく貴重な場となっていたことが強く印象に残っています。

また、戦場や空襲による死だけでなく、戦後数年を経たのちに病死や自死によって親を亡くしながらも今日まで生きてこられた方の「戦争さえなかったら」という言葉の重みは、戦争孤児の歴史を研究している私にとって、決して一面的にとらえることのできない孤児の経験の複雑な奥深さを突き付けるものとなりました。

以上、2024年11月23日から24日にわたる高知での2日間は、実際に土地を踏みしめ、戦禍を生きた方々の生の声を聴くことのできた何物にも代えがたい経験となりました。高知に息づく歴史に直接触れながら、「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」や「草の家」の皆さんとのあたたかで豊かな出会いにも恵まれました。また必ず高知に足を運び、歴史を訪ねる旅を続けたいと強く思っています。このような機会をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。



▲質疑応答の様子

記録集の全文 PDF は、満洲の歴史を語り継ぐ高知の会のホームページでも無料公開しています。なお、本記録集は高知県文化財団の 2024 年度文化事業助成（事業名：「満洲の歴史を語り継ぐ集い」と記録集の発行）を活用して発行しました。

=====

『満洲移民と史料・戦争とトラウマー第 6・7 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集一』

編集 満洲の歴史を語り継ぐ高知の会
(編集責任者: 大野正夫(会長)、編集担当: 楠瀬慶太(事務局長)、岡田とし、
小野由美子、織田千代子)

発行者 満洲の歴史を語り継ぐ高知の会 (高知県土佐市宇佐町井尻 262-1)
e-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

ホームページ <https://mansyu-kochi.yuhocreate.com/>



発行日 2025年3月25日

印刷 株式会社プリントパック
〒617-0003 京都府向日市森本町野田 3-1

=====